

転生した黒の剣士は三 門市を守る

ハゲの中のハゲ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒の剣士と真紅の槍術士。

この名をアインクラッドで知らぬ者はいない。

この二人は裏切りを知らず、共に脱出することを誓い合った。

そしてクリアした後も、二人は戦いへと導かれて行く。

様々な近界民がはびこる世界で桐ヶ谷和人と明石征十郎は戦い続ける。

もう二度と、人を失う悲しみを繰り返さないために。

黒バスの赤司が出てきますが、黒バスの原作に触れることは赤司についてのことしか触れないし、説明もしつかりするので黒バス知らない人でも気軽に読んでください！

逆にワートリは原作既読推奨です。SAOは知っていた方が面白いけど、知らなくても勢いでいけるレベルです。

この作品はpixivにも投稿しています。このサイトのはリメイク&mp;続編投稿です。

目次

プロローグ

設定 | 1

プロローグ | 6

原作前〜平和な日常編〜

新たな世界、そして出会い | 12

異世界最初の試練 | 19

新たな転生者 | 31

決戦！忍田本部長 v s 桐ヶ谷隊

41

ある休日の出来事 | 56

赤司と書いてチートと読む | 68

可愛い弟子が出来ました | 76

A級ランク戦、開幕 | 95

原作前〜SAOの悪夢再来編〜

思いがけない敵、驚異の始まり

130

蘇るコボルドの王 | 135

緊急対策会議 | 148

半年間の軌跡 | 155

邂逅編

〇〇凛花① | 161

茅場晶彦① | 175

茅場晶彦② | 181

茅場晶彦③ | 194

玉狛支部① | 202

桐ヶ谷和人①

赤司征十郎①

木虎藍①

227

迅悠一①

239

桐ヶ谷隊①

256

迅悠一②

272

迅悠一③

290

桐ヶ谷和人②

306

三雲修②

326

三雲修③

343

桐ヶ谷隊②

360

大規模侵攻〜キリト編〜

桐ヶ谷和人③

374

大規模侵攻〜赤司編〜

プロローグ

設定

〔設定〕

名前の表し方

本名／s a o ネーム

桐ヶ谷隊

隊長

桐ヶ谷和人／キリト

17歳

ポジション

攻撃手

トリオン 8

攻撃 (片手剣) 13

防御・援護 5

機動 15

(二刀流) 18

技術 8

射程 2

指揮 2

特殊戦術 2

メイントリガー

レイガスト 《片手直剣・黒》 スラスタール（改） シールド バッグワーム

サブトリガー

レイガスト 《片手直剣・水色》 スラスタール（改） シールド テレポーター（改）

サイドエフェクト

【システムスキル】

SAO時代にキリトが使っていたあらゆるスキルが使える（刀剣は使わない予定）

レイガストはキリト用に改造しており、シールドモードへの変形機能をなくす代わりに、攻撃力、耐久力が跳ね上がった

スラスタールも改造しており、ソードスキルと同じである特定のモーションをとつたら勝手に起動する

テレポーターは、範囲を10mに縮小する代わりに360度何処へでも移動でき、連続使用ができる用になった

セイと共に s a o をクリアしたが、2人はワートリの世界へ飛ばされる
基本一刀で戦い、本気の際は二刀流を使う。レイガストのスラスタに目を付け、
ソードスキルを完全再現した

隊員

赤司征十郎／セイ

17歳

ポジション

射手

トリオン 20

攻撃 12

防御・援護 8

機動 6

技術 10

射程 6

指揮 15

特殊戦術 4

メイントリガー

アステロイド メテオラ ハウンド シールド

サブトリガー

アステロイド ハウンド シールド バググワーム

サイドエフェクト

【天帝の目】

黒バスから参戦。性格は僕俺司。原作通りチート。s a o 経験者

キリトと共に s a o をクリアしたが、ワートリの世界へ飛ばされる

【オリキヤラ】

オペレーター

有栖川京華／アリス

17歳

情報処理能力 25

視野 10

キリト達とは別にワートリ世界へ飛ばされた元 s a o プレイヤー

一応戦闘もできるけど優しい性格上滅多にしない

S A O ではアルゴに並ぶ情報屋。こち亀から名前だけお借りしました

SAOのアリスに顔そっくり

怒らせたら怖い。基本誰にも屈しない赤司が怯えるほど怖い恋する乙女。相手は・・・作中で分かります

《時系列》

sa o ↓ sa o クリア後

ワートリ ↓ 原作前

《細かい設定》

全員チートだけど敵とは色々工夫して接戦にするつもり

ワートリ世界は sa o の 20 年後で、sa o はクリアされず sa o プレイヤーは全員死んだという設定

キリトとアスナに恋愛関係はなし

キリトと赤司は1層からのコンビで2人の通り名は黒の剣士と真紅の槍術士

キリトの装備はキリトが「sa o と同じ感覚で戦いたい」と鬼怒田さんに特注した

もの

キリト&赤司とアリスが出会うのはB級に上がってから

プロローグ

「さあ、始めようか。キリト君、セイ君。」

「ああ、望むところだ」

「キリトー!!、セイー!!」

二人は後ろから聞こえた自分を呼ぶ声に、一旦足を止め振り返り、麻痺状態の仲間に声をかけた。

「エギル。」

一人は黒人の男性《エギル》。キリト達二人の数少ない仲間の一人である。

「今まで剣士クラスのサポートありがとう。知っていたよ。お前が儲けのほとんどを、中層プレイヤーの育成につき込んでた事。」

「!!……………」

エギルは言葉を返さなかった。いや、セイのまるで最後の挨拶を交わすような口ぶりに、言葉が出なかったのであろう。

「クライン」

今度はキリトが、野武士面の赤いバンダナを巻いた武士、《クライン》に声をかけた。キリトがsaoにログインして、最初に言葉を交わした、切っても切れないような関係の、兄貴分のような存在だ。

「はじまりの日、お前を置いていつてすまなかつた。」

クラインが苦虫を噛み潰したような顔で答える。

「…………… てっ、てめえキリト！謝ってんじやねえよ！！許さねえぞ！！？ちゃんと向こうでメシの一つも奢ってからじゃねえと！ぜってえ許してやらねえぞ！！」

「分かった…………… 向こうでな。」

そして二人は、最後の敵へと体を向き直す。

「行くぞ、セイ」「ああ、キリト」

最早二人には、作戦や最後の会話もいらぬ。お互いの事は全てお見通しだ。

「待たせたな、ヒースクリフ」

「そろそろ始めようか」

「最後の戦いを！」

二刀の剣を構えた黒の剣士と赤の槍使いが今、最後の敵ヒースクリフー茅場晶彦に

挑む！

ーキリト side e

剣と剣、槍と剣がぶつかり合い合いカアン、カアンと金属音を奏でる。

(相手はこのゲームを知り尽くしている……この戦いではソードスキルは使えない)

後ろのセイとアイコンタクトを取る、やはり相棒もその事は分かっているようだ

声の掛け合いも必要ない、俺がスイッチと言わずとも、セイは迷わず槍を構えて突撃してくる。

交互に繰り出される剣と槍の嵐に、普通のプレイヤーなら成す術もなくHPを削りきられてしまうだろう。

しかし相手は神聖剣のユニークスキルを持つヒースクリフ、一筋縄ではいかない。

ヒースクリフは盾で俺達の攻撃を受け流しながら余裕の表情を浮かべる。俺一人だったら今ここでソードスキルを発動させていただろう。

(でも俺には……仲間がいる！)

セイが槍でヒースクリフの攻撃をはじめ返し、奴の剣が空を舞い、奴は体制を崩した。
「今だ！キリト！」

長い戦いの中で作り上げた、奴が初めて見せた隙。あの体制なら、ソードスキルの対

策もクソもない。

「う、おとおおおおお!!!」

その瞬間、俺はついにソードスキルを発動させた。黒の剣士、キリトがこの世界で最も修練し、最も頼った二刀剣技。

――二刀流上位十六連撃、スターバースト・ストリーム

二刀の剣が、ヒースクリフを次々に切り裂いて行く。一撃一撃を重く、鋭く、まるで、今まで死んでいった者たちの思いが込められているかのように。

そして最後の一撃を振り抜いた時、物凄い疲労感に襲われた。そして前を見ると、まだ奴は立っている。

(さっきので削り切れなかったのか………！)

いつの間に拾ったのか、先程落とした剣が、奴の手元にある。

――ああ、俺、ここで死ぬのか。みんな………ごめん………エギル、クライン、アルゴ、アリス、セイ………

「お前がここで死ぬはずないだろう？キリト。」

透き通る赤色が、俺の横を吹き抜けた。

「そうだ、俺にはお前がいたな。セイ」

目を開けると、ヒースクリフと戦っているセイがいた。

「流石だ、キリト君、セイ君、流石私の見込んだ剣士達だよ。もっと、もっと私を楽しませてくれ！」

「悪いがそれはできないな、そろそろ終わらせるからな！」
またセイがヒースクリフの剣を弾く。

俺はすかさずヴォーパルストライクを放った。だがその一撃はヒースクリフに止められてしまった。

「私に同じ戦法が二度も通じるものか！」

「だろうな。この一撃は止められてしまった……俺の一撃はな！」

次の瞬間、セイの槍がヒースクリフの胴体を貫いた。

「なっ！……！」

「言っただろう？キリトには僕がいると。」

「フツ…… フハハハハハハ！！」

「君達二人には本当に参ったよ。完敗だ。」

「キリト君、セイ君。君達はこのゲームのラスボス……すなわち私を倒した。よってこれより全プレイヤーのログアウトを開始する」

「なっ！なんだ？！？体にノイズが？！？」

「心配するな。それはログアウトが行われているだけだ。」

「…………… セイ、今までありがとうな。お前がいなきや、俺はこのゲームをクリアすること、このゲームで生きる目的を見つける事も出来なかった。本当にありがとう」

「それはこっちの台詞だよ、キリト」

自分の本名を教える事も、未練がましい事を言うわけでもない。最後に言う事は、もう決まっていた。

「またいつか、一緒に戦おうぜ！」

「ゲームはクリアされました」

「ゲームはクリアされました」

そして2024年11月7日14時55分、二年間に及んだデスクゲーム、ソードアト・オンラインはクリアされた。

原作前々平和な日常編

新たな世界、そして出会い

「ゲームはクリアされました」

「ゲームはクリアされました」

そして、2024年11月7日14時55分、2年に渡るデスクゲームSAOは終わりを迎えた。

「……………」

「終わった……のか……?」

そうして、キリトは体を起こす。起きたキリト……桐ヶ谷和人が味わった感触はふわふわとしたベッドではなく、ゴツゴツとした硬いコンクリートの感触だった。

「どういうことだ?」

そう言つて和人は、ナーヴギアを外す。SAO患者は全て病院に移されて生命維持を受けている筈が、和人が見たのは、見覚えのない廃れた住宅街だった。

「……どこだ……?」

周りを見渡すと、人は一人としていない。言うなれば、ゴーストタウンだ。

「うつ……ここは……?」

突然横から聞こえた声に振り向くと、そこには黒の剣士キリトの雄一無二の相棒が横たわっていた。

「セ、セイ? どうしてお前もここに?」

真紅の槍術士、《セイ》

「その声は……キリトか!?」

そう言つてセイ……赤司政十郎はナーヴギアを外す。

——良かった。セイも無事だ。セイなら、ここがどこか知っているかも……! !

だがその淡い期待は、赤司の一言でいとも簡単に打ち碎かれる。

「セイ……ここはどこなんだ? お前は何か知らないのか!?」

「俺にも分からない。ただ分かるのは、ここが現実世界という事だ。それは、俺達の服や肉体を見れば分かる。」

そう言われて和人は、自分の体を見る。そこにあつたのは、患者服を着た、SAOの時では考えられないほど細く、弱々しくなった自分の肉体があつた。そして、和人は苦笑した。

「流石はセイだな。こんな状況でも、冷静に対処が出来るんだから。」

「そうかな? まあとにかく今考える事は、ここがどこかと『門発生。門発生。』ゲート?」

突如、自分達の上空に黒い穴が空いた。そしてその穴から、奇妙な化け物が降ってくる。

「何だあいつは!?」「分からない、だが斬るしかない!」

そう言つて二人は自分達の武器に手を伸ばす。だがその手は、ただ空を斬るだけだった。だがそれも当たり前。ここは現実、二人が二年の時を過ごした剣の世界ではないのである。

(折角SAOをクリアしたつてのに、ここで何も分かんないまま死んじゃうのかよ!!)

そう思った刹那、一筋の閃光が走り抜けた。

「なっ・・・なんだ!?」

その化け物に立ち向かつて行ったのは、一人の青年だった。恐らく自分達と同年代であろう。

光のような剣速で、白い巨大な化け物を切り倒して行く。

「まるで、アスナを見ている様だ。」

そんな事を言っている間に、その青年は化け物を倒してしまった。

「よう。無事か?お二人さん。」

そう言い放つた青年に、キリトは声をかけた。

「あなたは……一体何なんですか?」

「俺はボーダーだよ。あんた達こそ、どうして警戒区域にいるんだ?」

警戒区域はなんとなくニュアルスで分かるが、ボーダーとはなんだ? 服か?

「俺達は、SAOプレイヤーで、やつとのことでクリアして目覚めたらここにいたんです。」

「SAO? 何だそれ?」

「SAOを知らないんですか? あの一万人も巻き込んだデスゲーム、ゾードアート・オンラインを?」

「ゾードアート・オンライン……デスゲーム……思い出した! 20年前にあったあの大規模テロか!」

それを聞いて、和人は絶句した。なぜなら青年の口から出たのは、思いがけない事だったのだから。

「20年……どういうことですか!?!」

驚いて和人は青年に詰め寄った。

「落ち着け、キリト。交代だ」

赤司が和人を宥める。

「すみません……少し戸惑っていて……」

そして話し手を赤司にバトンタッチする。

「どうやら俺達は、お互いに違う世界にいたようですね。」

青年は驚いた顔も、疑った顔も見せず、答える。

「信じられないけど、この現状を見るにそのようだね。」

「それなら、教えて頂けませんか？この世界の事、こっちのSAOの事。」

「いいよ。えーと・・・そういえば名前聞いてなかったね。」

「俺は桐ヶ谷和人。17歳です。」

「俺は赤司政十郎。同じく17歳です。」

「俺は迅悠一。俺も17歳だよ。」

自己紹介も終わったところで、赤司が本題を切り出す。

「では、教えていただけますか？この世界のこと・・・。」

「おいおい、同じ年なんだからタメ口でいいよ。じゃあ教えるよ。この世界で起きたこと・・・全部」

「OK。じゃあまず、こっちのSAOに何があったのか教えてくれないか？」
「分かった」

迅が言うには、こっちのSAOは20年前・・・俺たちの世界と同じく2022年からスタートし、2年以上経ってもクリアされず、被害者は全員脳を焼かれるか生命維

持の限界で死んだらしい。

「そんな・・・」

キリトは絶句した。世界が違うとはいえ、自分達が命がけで戦った世界が、クリアされずに多くの人々が犠牲になったということに・・・

「次は、この世界の事だ。さっきの化け物は何なんだ？」

赤司がついに訪ねた。さっきの奇妙な化け物について・・・

「それを話すのは、長い話になるが、いいか？」

二人には、それを断る理由などない。二人同時に頷いて迅の返事を待つ。

「・・・分かった。話すよ」

まここ三門市は3年前のある日、突如門（ゲート）と呼ばれる異世界への扉が開いた。そこから出てきたのは、近界民（ネイバー）という怪物達だった。地球上の兵器が全く歯がたたない現状に誰もが恐怖したが、謎の集団が近界民を撃退した。それが迅達、ボーダーという組織らしい。

「ボーダー？」

「ああ、トリガーと呼ばれる武器を使って近界民を撃退する、いわば自衛隊みたいなものだ。」

その時二人は、ある決断をした。

「セイ……」 「ああ、分かっているよキリト」

「迅。俺たちをボーダーに入れてくれ」

「別にいいけど、どうして？元の世界に帰りたいとは思わないの？」

「帰りたいとは思っているけど、この世界に来た以上、お前に救ってもらったように、俺達もこの三門市の人々を救いたいんだ！」

「もう人を失う悲しみを味わいたくないし、味わせたくないんだ。ダメかい？」

「いや、こちらこそ大歓迎だよ。あのSAOを勝ち抜いたって事は、相当の実力を秘めているそうだからねからね。」

「ありがとう！」

そう言つて二人は、深く頭を下げた。

「二人とも、頭上げてくれよ。ほら、そうと決まったらボーダー本部に行くよ。」

そして三人は、ボーダーへ向けて歩き出した。

——物語の歯車が、動き出す

異世界最初の試練

——キリトside——

迅は、俺達を連れて会議室に向かっている。

「どうもー実力派エリート迅悠一、帰還しましたー!」

「ご苦労だったな、迅・・・その二人は？」

そう迅に声をかけたのは、左目の横の傷が特徴的な40代の男性。きつと来る途中に迅が言っていた城戸司令だろう。話の通り怖そうな人だなあ・・・

「まさか人型近界民?」

そう言ったのは、少し細目の男性。恐らくこの方は根付さんだ。

「そうなのか?!? 迅?!?」

そうすると、この腹回りのふくよかな男性が、鬼怒田さんか。それにしても、人型近界民って何だ?

「落ち着いて、根付さん、鬼怒田さん。」

「ならば、その二人は一体何者何だ?」

そう言ったのは、恐らく忍田本部長だ。この人は凄い剣士だと聞いた。いつか戦ってみたいな。

「忍田さん、この二人はどうやらこの世界とは違う別の世界からやってきたみたいなんです」

迅・・・そりゃストレートすぎるよ。そんなのいきなり言われても誰も信じやしないって。

「なーにを言つとるんだお前は。また未来視のサイドエフェクトか？」

サイドエフェクトとは一体なんだろう？疑問を抱きつつ迅が質問に答える。

「いや、今回は何も見えなかった。でもこの二人は確実な実力を持っているはずだよ。」
「なぜそう言い切れる。」

「二十年前にあったsao事件・・・覚えてます？」

「あんな大規模テロを、忘れるわけなからう。」

流石に生まれていなかった迅は忘れていても、その頃にはバリバリ少年時代を過ごしていた皆さんは、あの事件の事ははつきりと覚えているようだ。

「この二人は、そのSAOをクリアしたそうです。」

会議室の全員が、驚いた顔をした。そりゃそうだろうな。

「何!? バカを言え。SAOは、クリアされずに被害者全員が亡くなったはずであろう

！」

「でも現に、この二人はナーヴギアを持っているし、この中にはSAOのソフトが入ってるよ。ほら。」

迅はそう言つて、俺のナーヴギアをひたたくつてソフトを取り出した。

「ほ、本当だ。・・・あの事件があつて以来、全てのナーヴギアとソフトは回収されたはず……」

「分からんぞ。ただ隠し持っていただけかもしれない。」

「落ち着け、私が話をする。君たち、名前は何と言うのかね？」

城戸司令に名を聞かれ、俺とセイはアイコンタクトをとり、そして答えた。

「俺は桐ヶ谷和人です。」

「僕は赤司征十郎と言います。」

「桐ヶ谷君、赤司君、君がSAOをクリアしたと言うのならその実力を見せてくれ。」

一瞬その気迫に身震いしたが、すぐに答えた。

「分かりました。その方法は？」

「君たちには対近界民戦闘訓練をしてもらう。」

「分かりました。それで結果を出せば、俺たちはボーダーに入れてもらえるんですね？」

「いや、この結果に依じて、本当に戦闘経験の持ち主だと我々が判断したら、君達を入隊

させる事を許可することと、実力に応じた階級に即入隊させ、A級に上がった時に君達専用のトリガーを用意しよう。」

それは思いがけない提案だった。ボーダーに入れてもらえる上、まさかこちらでも sa o の様な戦闘ができるのだから。

「分かりました。早速始めましょう。」

そして時は流れ、俺は今、大きな訓練室の中にいる。右手には自分が先程決めたトリガーを握っている。

(えっと、確か起動の方法は・・・)

起動の合言葉を思い出し、それを唱える。

「トリガー起動！」

それを合図に、自分の肉体が先程までの華奢な体から、sa o 時代の様な肉体に換装されていく。今のままの姿では格好がつかないので、体も自分で望んだ通りに換装する様頼んだ。

「おお・・・これがトリガーか……………」

自分の肉体だけでなく、身体能力も sa o 時代と同等になっている事に驚く。

「ええっと、レイガスト！」

俺が今回選んだトリガーは、レイガストだ。他に、孤月やスコープオンなどが

あったが、孤月は刀の形状だし、スコピーオンは耐久性が低い、何よりこの二つは重さが足りないからな。

あの近界民が実体化されていく。あれ？俺達が見た奴より一回りでかい様な…：気のせいかな。

『対近界民戦闘訓練、スタート』

それを合図に俺は駆け出した。恐らくあの目の様なところが弱点だろう。俺はレイガストを持つて上空へと飛び上がり、一閃をぶちかました。

——片手剣ソードスキル、ソニックリープ

流石にシステムアシストがなかったので、完全再現は不可能だったが、それでも充分すぎるほど効果はあった様だ。

スパツという効果音と共に、近界民は倒れた。

『記録、2. 26』

外の城戸さん達が驚いている。そんなに凄い結果だったのか？

そうして、俺の入隊試験は、幕を下ろした。

—————

——赤司 side——

——さて、そろそろキリトの試験開始か。キリトは考える仕草をしていたので、起

動の仕方を忘れたのではないかと不安を抱く。

「トリガー起動！」

不安は杞憂に終わったようで、ほっと胸を撫で下ろす

「ええつと、レイガスト！」

キリトが選んだのはレイガスト。孤月もあつたつていうのに、本当に重さ第一だな。

そんな事を思っていると、近界民が実体化された。俺達があつたやつより一回り大きいな。

『対近界民戦闘訓練スタート』

キリトがスタートと同時に駆け出した。あの形は、あの技を使う気だな・・・全く無茶なやつだ。

キリトはソニックリプを見事にやってのけ、近界民を倒した。

『記録、2. 26』

「なっ！」

「2秒!?」

「あり得ない・・・」

鬼怒田さん達が驚いている。どうやら相当凄い記録の様だ。城戸さんは真顔だけ

ど。そうしていると、キリトが訓練室から出てきた。

「よっ、セイ。」

「お疲れ、キリト」

「桐ヶ谷君、君はどうやってあんな体さばきを？」

「あれはSAOの技で、それを再現してみただけです」

「しかしSAOにはシステムアシストがあつたらしいが、トリオン体にそんな機能はないぞ!?」

「そこは、まあ、工夫して・・・」

「そっ、それに「あの、セイが始められないんで、セイのが終わった後でいいですか？」

あ、す、すまない・・・」

「いえ気にしないで下さい。」

「キリト、いい心遣いだ。」

「へーへーありがとうございますよ。」

「お礼にお前より早いタイムを出してやろう。」

「やれるもんならやってみろよ。」

適当に軽口を叩きながら訓練室に入る。すると、

「セイ、このトリオン体っての、SAOと同じ様なもんだぞ。」

「へえ、そうなのか。まあ僕には関係ないがな。」

「どういう事だよ。」

「始まるまでのお楽しみだよ。」

その会話を最後に、訓練室の扉が閉まる。

さあ、次は俺の番だ。

さて、じゃあ始めるか。

「トリガー起動！」

ふむ、これがトリオン体か、確かにs a oと同じだな。

そんな事を思っていると、近界民が実体化されていく…… 今日はこの台詞ばか

り言っている気がする。

『対近界民戦闘訓練、スタート』

俺は事前に決めていたトリガーを起動した。

「バイパー！」

馬鹿でかい四角の塊が展開される。凄いな……

それと同時に俺はその先を『視た』。俺のこの能力『エンペラーアイ天帝の眼』は、少し先の未来が視える。俺の……消えてしまったもう一人の俺の力だ。

(……足元に四発、正面に四発！)

視えた動きに沿う様に、俺はバイパーの射線を引いた。凄まじい速さで分割された塊が飛んでいく。

近界民の足は粉碎され、その体が集中放火した目を通って貫通されている。

「・・・少しやりすぎたか」

『記録、1.97』

よし、キリトの記録を抜いたぞ。外ではキリトが驚いた様な顔をしている。いい気味だ。

そんな事を思いつつ、俺の入隊試験は幕を下ろした。

—————

——キリトside——

ーそろそろ始まるな、セイはどんなトリガーを選んだんだろう。

「トリガー起動！」

セイがトリガーを起動した。武器を出さないな・・・スコープオンか？

そんなこんな考察しているうちに、近界民が実体化されていく…………… 今日これ

ばつか言ってるな。

『対近界民戦闘訓練、スタート！』

すると、すぐさまセイが叫ぶ。

「バイパー！」

なるほど、セイは射手用トリガーを選んだのか。まあセイの天帝の眼にはぴったりだな。

そう思いながらセイの方を見て、驚愕した。

ーデカイな・・・

四角いトリオンの塊が出てきたのだが、問題はそのデカさだ。セイの足から腰までぐらいのデカさがあるぞ。

そう考えていたら、セイがあのだかい塊を八つに分割してブツ放った。足に四発、目に四発。

すると、足は跡形もなく粉碎し、目の方は胴体までも貫通していた。エグい。

「なんだあのデカさは・・・出水以上だ・・・」

「しかも弾速が恐ろしいほど速い・・・」

「狙いも的確だ・・・」

やっぱ凄かったらしい。俺の時より驚いている。セイの奴、俺の注目をかつさらいやがって・・・

『記録、1.97』

しかもマジで俺の記録抜きやがった。・・・もう一回やらせてくんないかな・・・

「ただいま、キリト」

「お疲れ、セイ。マジで俺の記録抜きやがってこのヤロー」

「有言実行が俺のポリシーだからね」

なんかムカつく。まあとにかく、これで俺達のトリガー製作はしてもらえるんだろ
うか……

キリト達が城戸司令達と向き合う。

「桐ヶ谷君、赤司君、君たちの実力は充分見させてもらった。」

「ありがとうございます」

「それでトリガー製作についてだが……」

ゴクリと唾を飲み込んで、答えを待った。

「君達の実力は素人や常人が出せるものではない。よって、君達の事を信じ、君達専用ト
リガーを開発しよう。」

キリトは思わずガツポーズをした。赤司は当然といった様な表情だ。

「やったな!」「ああ」

そういつて二人はハイタッチをした。

「君たちの住まいは君たちの隊の隊室ということでもいいか? 勿論衣服や初給が出るまで
の食事も保証する」

「はい！ありがとうございます！」

よく考えたら、住むとことかどうやって食っていくかを考えていなかった。持っているの患者服だけだし。

「君達の実力なら、直ぐに結果も出せるだろう。こちらも早く、トリガーを完成させておく。君達の要望を元にトリガーを作るので、これから開発室に来てもらえるか？」

「はい！」

（普通の隊員が訓練するよりも大きいサイズのものを使ったのに慣れない武器ではじめての環境であるの記録とは・・・この二人は対近界民に対して大きな戦力になってくれるだろう）

こうして俺達は、ボーダーに入隊した。

だがまだ問題は収まっていなかったことを二人はまだ知らない。

新たな転生者

——キリト side ——

あの日から3日後、俺達は頼んでおいたトリガーを受け取るために開発室に向かっていた。

「いやーまさか専用トリガーを用意してもらえるなんてな！」

「俺はノーマルトリガーで十分だから作ってもらってないけどね」

「キリトはどんな改造をもらったんだい？」

「見てからのお楽しみだよ！」

そんな風にウキウキしながら歩いて行った。

ウーーン「失礼しまーす」

「おお桐ヶ谷、それに赤司か、待っておったぞ」

扉を開けると鬼怒田さんと忍田本部長がいた。

「鬼怒田さん、忍田本部長、こんにちは」

「忍田本部長はどうしてこちらに？」

「実は司令は勢いであんな事を言っていたが困ったことになってしまっただけね」

俺達は首を傾げる。困ったこと？

「どういうことですか？」

「本来なら隊員はC級から順にA級に上がって行かなければならないのは知っているだろう？」

「ええ」

「君たちのことは他県からの助っ人という事にしていたんだが、他の隊員達から批判の声が上がったんだよ。『俺たちは必死に頑張ってA級を目指しているのになんでせいっただけ』ってね」

「じゃあ俺たちはやっぱりC級から始めろって事ですか？」

「いや、安心してくれ。対策はすでに考えてある」

「本当ですか？？」

良かったうまい対策はされてあるみたいだ。

「3日後に私と君達二人で模擬戦をしてみよう」

「・・・ええ？」

ワオ！息びつたり！じゃねえ一体どういうことだよ

「えっと・・・他の隊員さん達を納得させることと模擬戦が何の関係があるんですか？」

「何、簡単なことだ。ここの隊員は皆素直な者たちだ。私と戦い君達の実力を見せつ

ければ納得するだろう」

「なるほど、そういうことですか」

確かに玉狛支部の皆さんは面白いしキバオウみたいなことを言う奴はいなかったしな。

「でもそれなら、本部長が勝つたらどうするのですか？」

「大丈夫だ。俺はギリギリのところまで手加減する。そうでないと流石に君たちには俺は倒せないだろうからな」

それを聞いて俺たちは少しイラつときて、声を低くし言い放った

「俺たちの戦いはいつだって命がけでした」

「手加減なんてせずに」

「全力で来てください」

俺たちがそういうと忍田本部長はフツと笑って、こういった

「すまない、失言した。それならば俺は君たちを全力で叩きのめしに行こう」という事で3日後、俺達対忍田本部長の模擬戦が決定した。

「クツソく何でこんな大事な時に防衛任務があるんだ？」

「しょうがないさ。最優先なのは、三門市の安全だからね」

俺達は今、防衛任務をしている。にしても入隊早々とか………

「そんな桐ヶ谷にいい知らせだ。今日ここで面白い事が起きるよ」
「迅、何が起こるって言うんだ？」

「それは分からない。でもお前らに関係がある事だよ。なぜなら「俺のサイドエフェクトがそう言ってる、だろ？」俺の決めゼリフ取らないでよ。赤司。」

「だってお前はそればかりだからな」「そうそう」

あ、迅が萎えた。まあいいや、ほつとこう（ゲス顔）それにしても面白い事って何だろうな

「つーかさ！俺もキリトとセイって呼んでいい？」

「ん？ああ、別にいいよ。なあセイ」「ああ、構わないよ」

「よっし！じゃあ俺のことも悠一って呼んでいいよ！キリト！セイ！」

そう言った悠一は子供のように喜んでいる。お前は本当に16なのか。

『キリ君くセイ君く迅君くそんな事やつてる間に来たよく誤差4、51、ちよつと遠いから頑張つて〜』

「今日はえらいゆるゆるですね。ゆりさん」

この人は玉狛第一のオペレーター、林藤ゆりさん。頼れる腕利きさんだ。つて俺誰に説明してるんだ？

『だってどうせ迅さんもいるしキリ君オリジナルトリガーもらったんでしょく余裕

じゃなくい』

そう。あんな話があった後だから軽く忘れかけていたが、折角オリジナルのトリガーを作ってもらったので、ランク戦では使わずに防衛任務では使つていいと言う事になった。

「つと・・・雑談してる間についたな・・・」

「悠一！こいつら俺に狩らせてくれよ！5体なら余裕だし、新しいトリガー使いたいたいんだよ！」

「なんか俺も子供だな。まあ14からずっと囚われてたから仕方ないとも言えるけど」

「分かった、分かったから。お前もいいだろ？セイ」

「ああ、構わないよ。ていうかこいつはダメって言つても引き下がらないからね」

「さっすが相棒！分かってんじゃん！」

そう言つて俺は近界民に向き直る。バムスター2体、モールモッド2体、バンダー1体か。30・・・いや20秒あればいいな。

ドンツ！という音を立てて、俺は走り、背中の剣（レイガスト）を抜刀する。これが俺の改造トリガーその1、レイガスト《片手直剣・黒》だ。

そして上体を傾け、剣を肩と並行に構える……………

『スラストアーON』

その声が響き、剣が加速する。

「うおおおおおおおおお!!」

——片手直剣重単発ソードスキル、ヴォーパルストライク

この一撃によつて、直線上にいたモルモッド2体は真つ二つに割れた。

これが俺の改造トリガーその2、スラストアー(改)。システムアシストのように、ある一定の形をとるとスラストアーが起動するようにした。もちろん、自分で起動する事も出来る。

「つつ………!」

後ろからバンダーが砲撃を用意していた。不味い、やられる!……… 何つつて

(テレポーター起動!)

これが俺の改造トリガーその3、テレポーター(改)だ。俺にはサイドエフェクトが存在していた。その名を『システムスキル』s a o時代に俺が使っていたあらゆるスキルが使える……… よく考えたら隠蔽あるからバッグワームいらねえじゃん(メタい)

とにかくこのスキルの中の索敵とテレポーター(改)は非常に相性がいい。360度3m圏内ならどこにでも移動できるし、索敵は敵がどこにいるのか分かる。これほど相性がいいとは思わなかった。

「悪いな、一発で決めるぜ！」

「スラストアーON！」

今度は自分でスラストアーを起動させた。距離的に当てられるソードスキルがなかったからだ。

スラストアーの推進力で俺は一直線にバンダーの目に向かう。砲撃のチャージより俺の方が少し早かったようだ。

そして俺はすぐさまテレポーターを起動しバムスターの目の前に来た。ここで俺のオリジナルソードスキル（仮）発動だ。俺は飛び上がり、上段で剣を構えた。今は両手で剣を持っているが、s a oじゃないんだからスキル中断なんてのはない。

「スラストアーON！」

これが俺の新しいソードスキル……………名付けて、風車だ！

スラストアーの推進力で体を回転させ、凄まじい破壊力になってバムスターに突撃する。要するに気〇斬って事だ。

さて、ここで問題だ。スラストアーの凄まじい推進力で、それも回転なんかしたらどうなるだろう。正解は……………

スパアアアアン！スパアアアアアン！と気持ちの良い音を立てた。

スタツ「こうなるわ……………」

後ろを見ると首から上が綺麗に刈り取られたバムスターが転がっていた。なにこれ
キモい

「流石だな。キリト。」

「おおセイ、これの後片付け頼めるか？」

不本意そうな顔をされたが、呆れた顔でこう返された。

「仕方ない……………こんなの放置してもただただキモいだけだしな……………」

流石俺の相棒。俺と思考がピッタリリンクしてるな。

「バイパー！」

全ての残骸をセイが見事に焼き払った。フウ々スツキリスツキリ！と、気持ちよく
なっていたら悠一が疑問を浮かべた表情で聞いてきた。

「なあキリト、なんでお前目回ってないの？」

「まあ鍛えたからな」

強引な理由でねじ伏せた。本当は御都合主義なんだk（自重

『みんなく近くにもう一個門出て来たよ』

またかよ……………今やったばっかなのに……………

『……………待つて、これトリオン兵の反応じゃない！人の反応だよ！』

「何っ!?」 「まさか人型!?」

俺達はすぐに現場へ向かった。

「なっ……」 「あれは……」

そこで俺達が見たのは、信じられない光景だった。

「アリス!!？」

猫のアリス、s a oでアルゴとゴールデンコンビを組んでいた情報屋だ。その容姿と性格で、アスナと同等の人気を得ていた。

「アリス! どうしたんだ! しっかりしろ!」

「う……ん……あれ? キリトさん、それにセイさんも」

「大丈夫か? 何でお前までこの世界に?」

「この世界? どういう事ですか? ここは現実世界じゃないんですか?」

「アリス、お前の一番新しい記憶はなんだ?」

セイがアリスに聞いた。やっぱりこういう事にはこいつが適任だな。

「私は……さつきゲームがクリアされたというアナウンスを聞いて、その後意識が揺らいで……気がついたらここにいたんです。」

「そうか……悠一、この世界の事を少し話してやってくれ」

「OK こんにちはえつと……」 「あつ有栖川京花です。気軽にアリスとお呼び下さい」 分かった。アリスちゃんここは……」

「キリト、これはつまり……」

「ああ、そういう事らしいな」

俺達はアリスの話を聞いて、ある結論に至った。

「アリスも俺達と同じで、S A Oからこの世界にやって来たってことは、他の生還者が飛んでくる可能性もあるし、もしかしたら他の世界に飛ばされている可能性だってある」

まさか俺達以外にも被害者がいたとは……一体あの時S A Oで何が起きたって言うんだ……？

「とりあえず、本部に報告しないとな」

「よし、それじゃ行くぞ。悠一、アリス」

「うん」「はいっ！」

そして俺たちの波乱の初防衛任務は幕を閉じて、運命の歯車が、また一つ回り始めた。

決戦! 忍田本部長 v s 桐ヶ谷隊

俺はいま、忍田本部長の前にいる。理由は言わずもがなアリスの事についてだ。

「忍田本部長、ちよつと相談なんですが・・・」

「どうした? 桐ヶ谷君。」

「実は先程、俺たちの仲間が一人、こっちの世界に来たんです」

「なんだって!?」

驚くのも無理はないだろう。俺たちがこっちの世界に来た時点で不思議なことなのに、もう一人被害者が増えてしまったのだから。

「とにかく、今から会って貰えないでしょうか」

「いいだろう。これからもう用事もなしな」

「ありがとうございます。ではこれから連れて来るので」

「よろしく頼むぞ」

俺は一言と一礼を返して、セイ達の元へ向かった。

「おかえり、キリト。どうだった?」

「ただいま、セイ。アポ取れたぞ。今から会ってくれるって」

「ううっ・・・緊張して来ました・・・」

「そんな緊張すんなよ。忍田さんはいい人だから」

「ほら、二人共、行くぞ」

そして俺たちは三人で本部長室へ向かった。

「失礼します」

「桐ヶ谷君、ご苦労だった。そちらが君達の仲間と言っていた方だな。」

「はい！有栖川京花と言います」

「それで忍田本部長。最初に言った相談なのですが」

「何？有栖川君の事ではなかったのか？」

「はい。明後日の模擬戦の事です」

「ここで俺は本題を切り出す。」

「有栖川をオペレーターとして、桐ヶ谷隊として模擬戦に挑みたいんです」

このことはアリスが提案した。そう言った時のアリスからは自分も役に立ちたいという気持ちかひしひしと伝わってきた。

「別にいいが、大丈夫なのか？オペレーターは仕事が多く、大変な役割だが」

「いえ、それについては問題はありません」

と、セイが答える。

「有栖川は、s a oでは情報屋という役をしていました。それで培った広い視野と情報処理能力は折り紙つきです」

その言葉に、アリスが続ける。

「何より、桐ヶ谷さんや赤司さんの役に立ちたいんです!」

忍田さんは穏やかな顔になって言った。

「大丈夫だ。こちら側には断る理由などないからな。有栖川京花、君をオペレーターとしてボーダー入隊を許可する」

アリスの表情が険しい顔からパアアアと明るい表情になり「ありがとうございます!」と言って深く頭を下げる。

「では明後日楽しみにしているぞ。桐ヶ谷隊!」

「はー!」

こうして俺達桐ヶ谷隊は結成した。

残りの時間、防衛任務以外の空いている時間は全て特訓と作戦会議に回した。アインクラッドでは夜中に熟練度上げなどをしたりアリスは情報を嗅ぎまわっていたので多少の夜更かしや徹夜は朝飯前だった。

そして今日、俺達の第一歩を踏み出す。

「さあーて!またまたB級ランク戦昼の部の時間がやって来ましたー! 実況は私、武

富桜子がお送りしまーす！」

「本日の解説はーぼんち揚食う？でおなじみの玉狛支部S級隊員の迅隊員と、頭がダ
ンガーな戦鬪狂、太刀川隊員にお越しいただきましたー！」

「よろしくお願いしまーす」

「俺の紹介酷くね?!？」

事実だからしゃーない

「それでは早速実況・・・といきたいところなのですが！」

「今日は最初に忍田本部長と他県からのスカウト隊員のエキシビションマッチをお送
りいたしまーす！」

「なんだそりゃ？聞いてねえぞ？」

「太刀川さんは会議中寝てたからね〜」

「寝たい時に寝る。それが俺だ」

なんとも清々しいドヤ顔である

「なんともこの隊はこの試合に勝つたらA級入りだとか」

「何っ?!?てことは相当強いのか?!？」

「近い近いです太刀川さんその辺は迅さんの方が詳しいんじゃないんですか〜」

「おいじん「見てからのお楽しみ〜」なんだよ?!?よってたかって俺をいじめやがって

!?？」

「それでは間も無く転送開始です! (無視) 5、4、3、2、1、エキシビジョンマツチスタート!」

キリト達の転送が完了し、すぐさま各々がバググワームを起動させる。

(バググワーム起動!) (スキル《隠蔽》発動!)

キリトは隠蔽を使いこなし、隠蔽をバググワームとして使える様になっていた。

(《索敵》発動!)

キリトは忍田の位置を把握するため、索敵を最大範囲まで広げる

『アリス、セイの居場所をマーキングして俺に送ってくれ。それが終わったらそこから忍田さんの居場所を予測して俺とセイに送ってくれ。』

『了解』

『セイは俺の索敵とリンクして常に俺とお前の位置が分かるようにしろ。見えたら天帝の眼を即発動させて細かい指示をしてくれ。お前なら援護と同時進行でも出来るだろ?』

『了解。俺は遠くからバイパーで援護するから存分に斬り合ってこい』

『ああ、頼んだぜ相棒!』

その時セイは嫌な予感がして索敵の範囲を狭めて精度を上げた。50 mくらいに狭めて集中すれば、バググワームを使っている敵の位置も知ることができるといいう優れものである。

『・・・！キリト、こつちに向かってきた。移動しながら射撃してそつちまで誘導するから、このポイントで隠蔽使つて待つてろ』

『了解！』

赤司 side

「さて、ちよつとやるかな」

「見つけたぞ！赤司君！」

忍田本部長も走つて行く赤司の姿を目撃していた。

『セイさん、本部長との距離30 mです』

『分かった。旋空の射程圏内に入ったら警告頼む。こつちはやることがあるからな』

『了解』

(こつちから一つ置き土産でもしていくか。)

赤司は天帝の眼で忍田を見た。そして控えめに出したトリオンキューブを4×4×4に分ける

(こつちとそつちと・・・こつちにも置いておくか。)

そして赤司はまた走り出した。

「さて、後は頼んだぞキリト」

そのキリトは今まさに忍田を目撃していた。

(見つけたはいいがこっちまで来ないな・・・もどかしい)

どうすればいいかと考えていると赤司が自分の前を通り小声で指示を出していった。

(10秒後忍田さんがそのストレートに出てくる。角から出た瞬間に隠蔽を解いて忍田さんに切り込め)

(了解!)

そう言つてセイは近くの高台めがけて走り去つて行つた。

あと5秒・・・4、3、2、1・・・来たっ!

俺が隠蔽を解いて忍田さんに走り込んで行つた瞬間、忍田さんのいた真下の地面が急に爆発した。

そう、今のはセイが天帝の眼で完璧なタイミングで爆発するように仕組まれた置きメテオラである。

キリトはニヤツと笑い、こう言い放つた。

「やっぱりウチの指揮官は、仕事の質が違うなっ!」

『スラスタ―ON』

そう言いながらキリトは地面を蹴って忍田さんにソニックリープをぶちかました。

ガキイイイン「くっ！」

キリトのソニックリープをモロに食らった忍田さんは仰け反り、孤月が刃こぼれる。

（これが桐ヶ谷君が言っていた赤司君の天帝の眼か・・・恐ろしいまでに完璧なタイミングだ。桐ヶ谷君のレイガストも何という威力だ。一撃が重い）

（今だ！隠蔽スキル完全開放！）スーーーーー

「なっ！消えた!??カメレオンか!??」

そう、隠蔽スキルはこんな使い方もあるのだ。カメレオンと同じ様に姿を消す。さらにーーーー

（だが、カメレオンが発動している間は他のトリガーは使えないはず、そこを叩く：！）バツ

その瞬間、忍田は後ろに跳んだ。すると忍田が先ほどまでいたところは一筋の閃光が走り、忍田の右足には深い傷が入っていた。

「すみませんね忍田さん、俺の隠蔽はトリガーじゃないんで他のトリガーも使えるんですよ！」

そう、隠蔽を使っても他のトリガーを使えるのだ。だがハイスペックな分トリオン消費が多い。

(もう隠蔽は使えないが……忍田さんの機動力を削れた。このまま一気に押し切る!)
キリトは隠蔽を解き2本目の剣を抜いた。

「もう透明タイムは終わりか?」

「さあどうでしょうね」

本当は使えないからホラを吹いて見たが通じていないだろうな。

「いいだろう、かかってこい!」

「行きますよ!」

俺は全力で突進すると同時にヴォーパルスドライブを発動した。

「くっ!」

忍田さんは孤月で受け太刀をし、今度は体制が崩れる事はなかった。

(このまま斬り合っていたら埒があかない……距離をとって旋空でケリをつける!)

「旋空孤月!」

「!」(テレポーターON!)

「どこに言っても同じだ!」

忍田はキリトがレポートする位置を完璧に予測して二発目を撃ってきた。

(流石だ……移動した場所を予測してすかさず切つてやがる……これじゃあ近寄れないぞ……)

と、その瞬間

「バイパー！」ズガガガガガ

「セイ！」

「俺の事を忘れてもらつちや困るな。」

セイの放つたバイパーは完全に忍田の逃げ場を失わせ、その瞬間キリトはヴォーパルストライクを発動させる。

(知らずの内に赤司君の射程に入っていたか……桐ヶ谷くんの攻撃を食らったら即ベイルアウトになつてしまう……なら!)

「ただでは削らせんぞ!旋空孤月!」

「なっ!」

2発の旋空を撃ち込んで勢いの逆噴射でギリギリ腕を失うまでで済む体制まで身体をそらした。さらに撃つた旋空は正確に一撃で赤司の足を斬り、2発目で胴体と足を切断した。それと同時にキリトの攻撃はかろうじて忍田の左腕を捉えた。

「俺だつて、ただじゃ落ちませんよ!バイパー!」

最後の悪あがきでも狙いは正確で、忍田にバイパー全弾直撃した。誰もがキリト達が勝ったと確信した。だが・・・

煙が晴れたとき、忍田は立っていた。

「全防衛フルガード・・・!」

「全く・・・完敗です忍田さん。後は頼んだぞキリト」

『戦闘体活動限界。緊急脱出ベイルアウト』

「これで一対一だな」

「ですね」

普通なら勝てる状況ではないが、今の忍田さんは右足と左手が使えない状況だ。

お互いトリオン量は既に底を尽きかけている。もって後1分というところだろう。だがこの状況でも二人の目は相手だけを見つめ、勝利を掴むことだけを考えた。

（絶対に勝つてやる!）

キリトは2本の剣を構える。忍田は居合いの体制だ。

「旋空孤月!」

「ダブルサーキュラー!」

旋空をダブルサーキュラーで捌く。そして忍田の方へ跳ぶと、忍田さんが上段斬りの

体制に入っていた。

(アレをやるか……)

キリトは地面とほぼ平行な状況から無理やり右足を踏み込み、ソードスキルを発動させた。

『スラストーON』

「うおおおおおおお!!!」

「はああああああ!!!」

二つの剣がぶつかる。キリトが発動させたソードスキルは、ソニックリープ。鏢迫り合いが終わると、両者の剣は……

ドスツ　チャキツ

後の音はキリトが水色の剣を鞘に収めた音、先の音は――――

「システム外スキル『武器破壊』アームブラスト」

――忍田の孤月が地面に突き刺さった音である。

「フツ……私の負けだ」

「お手合わせありがとうございました」

その言葉を最後に、キリトは忍田さんの胸に剣を突き刺した。

『戦闘体活動限界。緊急脱出ベイルアウト』

黒の直剣を鞘に収める。

「ふう〜終わった。」

「決着——！勝ったのは、桐ヶ谷隊だ——！」

「どうでしたでしょうか！解説の太刀川さん！」

「あいつ超強いな。戦って見たい」

「どうでしたか！迅さん！」

「二対一とはいえ、入隊したてで忍田本部長に勝つとは凄いですね。彼らはまだまだ伸びそうです」

「とか言って結局サイドエフェクトで視えてたんだろ？」

「いや、ここまでの快勝は予測できませんでした」

「今回のバトルの見所は一体どのようなどころでしたでしょうか？」

「順を追って説明するなら、赤司隊員の置きメテオラでしょうね」

「あれすごかったよな！出水よりデカかったし、時限爆発だったのにタイミングバツチリだったし！」

「恐らく赤司隊員のサイドエフェクトでしょう。未来が視えるサイドエフェクトだそうですね」

「じゃあお前のキャラが薄くn「風神起動しますよ?」スイマセン勘弁してください」
「次に桐ヶ谷隊員のレイガストですね、アレはかなり強い」

「そうだな。勝手にスラストスターが起動して剣技になつてるのも面白かった」

「アレを生かすための剣という事ですね」

「アレを使えるだけでシールドモードに出来ない事を差し引いてもお釣りがくる」

「今後はレイガストブームが来るかもですね!」

「いや、本人が使いこなすのは相当難しいと言っていたので、彼以外には無理でしょう」

「やっぱ一回バトって見たい。行つて来ていいか?」「ダメです」

「彼の強さはまだまだ先がありそうですね」

「次のA級ランク戦が楽しみですな!それでは引き続きB級ランク戦昼の部を取り行いまーす!」

「ふいゝ何とか勝つたな」

場所は変わり、ここはキリト達の住まい兼隊室である。

「お疲れキリト」

「キリトさんお疲れ様です!」

「ああ、これで俺たちもようやく肩の荷が降りるな」

「失礼する」

「あっ忍田本部長!ありがとうございます」

「いや、3人共中々楽しませてもらったぞ」

「本当に色々とお世話になりました!」

「礼には及ばないよ。三門市の平和を守るためならこれくらいするさ」

「はい!これからは俺たちも全力で取り組ませてもらいます!」

「そうかそうか。それでようやく色々終わったところで悪いが、これで桐ヶ谷隊は晴れてA級チームとなったので、エンブレムや隊服を決めなどまだ色々やる事があるから近々開発室に来てくれ」

「分かりました。」

「それでは私はこれで、失礼した」

「忍田さん!」

「「ありがとうございます!」」

そのまま忍田さんは無言で去って行った。

ある休日の出来事

薄暗い隊室の中で俺達は大きな壁にぶち当たっていた。

「だーかーらー真っ黒にしようって言ってるだろ！」

「キリトさんそれしか無いんですか!? 黒から離れてくださいー！」

「そうだぞキリト、お前ちよつと黙ってる話が進まん」

「うぐぐ…。」

そう、俺達は今隊服決めをしているのである。だが中々俺の言う事を聞いてくれない。

「ならお前らなんかあるのかよ」

「エンプレムの案ならありますよ」

「5、6個ぐらい」

チームメイトの発想力に色しか考えてない俺は驚愕し、投げやりにこう言った。

「だーもうーじゃあアリス！お前はエンプレム作っててくれー！」

「りよーかーい」

気の抜けた返事を返してアリスはコンピュータ室に引っ込んで行った

「よしじゃあ・・・セイ力貸して」

「はあ・・・全くしようがないな」

「だって俺も一応男だぜ？女の子の前だったらカッコよく見せたいじゃんか」

「別にカッコよくなかったぞ」

「うっ」グサッ

「逆にワガママばつかでカッコ悪かったぞ」

「グッ」グサグサッ

「ここで俺に助けを求めていることは聞こえているから評価は下がる一方だ」
効果は抜群だ！

「ベイルアウト！」泣

キリトはベイルアウトを使った！

「ここがベイルアウト先だしそもそもトリオン体じゃないだろ」
相手のセイには効果がないようだ……

「セイ・・・あとは・・・頼んだ・・・」バタッ

キリトは目の前が真っ暗になった。

〜30分後〜

「あれ・・・？俺は何を・・・」

部屋に備え付けられているベッドから体を起こすと、コーヒー片手に本を読んで
いるセイがいた。

「起きたかキリト」

「セイ・・・そうだ隊服決め！」

「隊服なら出来上がってるぞ」

「え、」

机を見るとそこには隊服のデザインの描かれた紙が置かれていた。

「あれ？これは俺の・・・」

キリトの s a o 最終装備に、ブラックとクリムゾンレッドが混ざり合って、黒コート
の袖には金色のラインが引かれている。(ここはご想像にお任せします。汗)

「お前の意見も少しは尊重してやろうと思ってるね。あとは適当にそれっぽく混ぜ合わ
せただけだよ。アリスの金色は入れすぎたらごちゃごちゃになるから控えめにしたけ
どね」

「いや、そんなもんじゃねえよ・・・すげえカッコエじゃんか！」

「一応リアルでは育ちは良い方だったんでね」

「流石はセイ・・・いや赤司財閥の御曹司様だな！」

「よせよ、今はそんな肩書きなんの意味もないさ」

やっぱり我が相棒は頼りになると思いながらセイを軽く小突くと、セイはそれを読んでいるかのように（実際読んでいるのだが）立ち上がった。そのせいで俺の攻撃は空振りに終わりドサッとソファアーに寝転がった。

「それよりほら、アリスの方を見に行こう」

「そうだったな。あいつには押し付けるようにしちゃったから謝らないと。」

ソファアーから起き上がってコンピューター室へと向かう。

コンコンコン しっかりノックは3回である。2回だとトイレの確認になってしま
うらしい

「あ、はくいどうぞー」

「アリス、お茶持ってきたぞ」

いつものまに淹れたんだこいつ。

「あ、ありがとうございます〜」ズズズ

「で、調子はどうだ？」

「それならもう終わりましたよ〜」

「マジか！早いなあ」

キリトは今日いいところなのである。

「ていつてもこっちは服のデザイン考えたりするほど複雑じゃないので簡単でしたよ

く

それでも何も無いところから考えるのでエンブレム作りも相当大変なはずである。

俺はエンブレム作りの速さに驚愕して忘れていたが、やらなければならぬことがあつたのを思い出し、深く頭を下げる。

「アリス、今日はあんな怒鳴ったりしてゴメン！」

そういうと急にアリスも申し訳ない顔になつて頭を下げる。

「そ、そんな！私こそ生意気言つてすいませんでした！」

「いや、俺は年上でしかも男なのに女の子に対してみつももないことをしてしまった。ごめん。許してもらえたらなんでもするよ」

「えっなんでも？」

なんでもという言葉に反応したアリスに少し恐怖を覚えるが、返ってきたのは全然なんでもない内容だった。

「なら、今度セイさんのデートをセッティングして下さい」

「え？そんなことでいいのk「そんなこと？」全力でやらせていただきます！」

低いエコーのかかった声で威圧された。S A O時代睨んだだけでボスが死ぬとも言われた魔王アリスは健在のようだ。

「何を喋ってるんだ？二人でボソボソと」

「別に何も」

二人は首を振って全力で否定する。この人にはバレそうだからマジで怖い
「?まあいいだろう」

「それじゃあアリス!早速エンブレムを見せてくれよ!」

「いいですよー!余りの出来にひっくり返らないでくださいねー」

3人はコンピューターに集まり画面を覗き込む。

「これは……」

画面に映ったのは、二本の交差する直剣とその真ん中を貫く一本の槍。そしてその後ろには――

「アインクラッド……」

3人が二年間暮らしたアインクラッド。命をかけて戦い、多くの命が失われたこの浮遊城は、最早3人には現実よりも大切な場所にもなっていた。

「私達の象徴になるんだったら、これしかないでしょ?」

「ああ、最高だ……」

「流石はわれらが情報屋だな」

「そんなく恥ずかしいですよ」

「よし!じゃあ開発室に行こうぜ!」

「はい！（ああ）」

俺は隊室の扉を開けた。早く隊服が着たくてうずうずしてるのは2人には内緒だ。

「失礼しまーす」

開発室の扉を開けると、鬼怒田さんが昼寝をしていた？

「ん・・・おう、桐ヶ谷か。何のようだ」

「隊服のデザインとエンブレムができたので、作って貰おうかと思って」

俺は鬼怒田さんに隊服とエンブレムのデザインを見せた。

「おお、中々の出来ではないか」

「まあ俺の仲間達ですからね」

そういうとセイは無表情のままだがアリスが誇らしげになっている。

「よし待っておれ。すぐに作ってやる」

「ありがとうございます」

「それじゃあ二人の寸法を測るぞ。有栖川くんは右の部屋に女性の開発員がいるから

そつちで測ってきてくれ。

「はい、分かりました」

そういうとアリスはその部屋に入って行った。

「あ、後もう一つ作って貰いたいものがあるんですがいいでしょうか」

セイが鬼怒田さんに尋ねる。何を作って欲しいのだろうか。

「なんだ言ってみろ」

「槍型の武器を作ってもらえますか？」

「ほう・・・槍型か」

セイの発案に鬼怒田さんが興味を示す。

「はい。俺は元は槍を使った近距離戦闘を主とするスタイルなんです」

「天帝の眼は一对一でこそ真価を発揮するものだしな」

「そうなのか？ワシにはシューターの方が向いてるように見えるが？」

「アレは、バスケをやっていた時に培ったんですよ。アリスが入ったことでこの前の模擬戦ではかなり余裕を持って動くことができたので、近接を混ぜてもやっていけると思っただけです」

「なるほど・・・よし分かった作ってやろう」

「後、自分で考えたオプシヨントリガーがあるので、見てください」

「こいつとんだだけ考えてんだよ・・・」

「何々・・・？孤月の切っ先を変えることができる幻踊孤月か・・・面白い」

鬼怒田さんがニヤリと笑った。それにしてもここまで考えているなんてやっぱりセイは天才だな。

「じゃあ小一時間ほどで出来るからどこかで暇を潰しておれ」

「分かりました」

「じゃあ俺はその開発見学してていいですか？」

俺は機械いじりが好きだったのでトリガー開発に興味があった。

「・・・？構わんぞ。邪魔をせんければな」

「ありがとうございます」

（普通戦闘職の人間はこっちの技術には興味を示さんのに・・・変わったやつだな）

――ー時間後

「出来ましたか？」

「おう、来たかセイ」

「おいキリト、何勝手に先に試着してるんだよ」

「早く来なかつたお前が悪い」

「はあ、全く。それで鬼怒田さん、俺のトリガーはどうですか」

「出来ておるぞ。ほれ」

鬼怒田さんは一つのトリガーホルダーを取り出した。

「槍孤月と幻踊だけが入っておる。ちよつとそこの訓練室で使ってみろ。」

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ俺が相手になってやるよ」

「ああ、頼むよ」

10本勝負キリト8 セイ2

槍孤月初戦は俺の快勝という形で終わった。

「どうしたんだセイ。全然じゃないか」

「やつぱりソードスキルを使えないのが辛いな。それにまだ幻踊に振り回されている感じがする」

たしかに。SAO時代のときの戦績は五分五分だったのに今回は全然だったな。幻踊も使いこなせていなくて簡単にかわせたし

「何かいいアイデアは……！鬼怒田さん！俺のトリガーに旋空も入れて下さい！」

「いいが。何故だ？」

「名案が浮かんだんです」

「キリト。旋空は操作時間と長さが反比例してるって言ってたよな」

「そうだけど。それがどうしたんだ？」

「そして、切っ先に行くほどスピードはどんどん速くなる」

「それがどうしたんだ？」

「ここから先は体で感じてもらう」

10本勝負 キリト0 セイ10

「圧勝だったな」

「まさか・・そんな手があるなんて・・・」

「旋空ソードスキル作戦大成功だったな」

セイの考えたカラクリはこうだ。旋空は操作時間と長さが反比例していくため、操作時間が短ければ短いほど剣は長くなる。

逆に言えば、長さが短ければ短いほど、操作時間が長く、剣が速くなる

「流石はセイだな。幻踊ももう使いこなしてる」

「いや、そんな事ないよ」

本当に圧倒的だった。元々鋭かった槍攻撃が死ぬほど速くなってるとし、受太刀をしても避けても幻踊が形を変えて襲ってくる。これに弾丸トリガーまで加わったら・・俺も少しトリガー構成見直そう。

「赤司。幻踊は旋空に比べてトリオン消費が多いから注意しろよ」

「分かりました。鬼怒田さん」

「あつそうだ！鬼怒田さん！俺たちがトリガー起動する時の掛け声変えてくれませんかね？」

「おう、そのくらいならすぐに変えられるぞ。で、どんなのにするんだ？」

「リンクスタートって言ったたら起動するようにしてください！」

「分かった。お前らのトリガーを貸せ」

そして調整を終えたトリガーを持って俺達は早速隊服に身を包んでアリスの元へ帰っていった。

赤司と書いてチートと読む

隊の事のゴタゴタが治って、俺達はようやく一息つく事が出来た。

「よし、コレで今日の仕事は一通り終わったな。」

「私はこれから、オペレーターの方々とお茶会の約束があるので」

「ああ、気をつけてな」

「じゃあ、俺はソロランク戦に行ってくるよ」

「あ、俺もいくからちよつと待っていてくれ」

俺は荷物を机に入れて、出口へと向かった。

廊下を歩いていると、ある人から声をかけられる。

「ちよつといいか、桐ヶ谷」

「あなたは……？」

「俺は風間隊長風間蒼也、19歳だ。」

驚いた。この見た目で19とは……

「今から、俺と手合わせしてもらえないだろうか。」

No. 2アタッカーが俺に勝負の申し込みなんて、嬉しい限りだけど……

「すみません、今日は先約があるので」

そう、今日俺には先に予約していた人がいるのだ。その相手とh「キリートー！」

「げっ太刀川さん」

「おい遅いぞキリト。何道草食ってんだよ」

今日の相手とは太刀川さんのことである。忍田さんとの一戦以来、よく模擬戦を申し込まれるようになった。その流れでキリト呼びも既に定着しつつある。

「そういう事なので、今日はすみません。太刀川さん中々帰してくれないので」

太刀川さんとはいつも互角なので10本勝負で7本取らせるまで帰してくれない。

「おい太刀川、仕事に慣れてない新人を困らせてるんだ」

「ひっ風間さん!!?ま、まあいいじゃないですか。こうしてゴタゴタは終わってるんだし」

「まあ太刀川には後でお灸をすえるとして、今日はこれで失礼する。邪魔をして悪かったな」

太刀川さんの死刑が確定したところで、セイが口を開く。

「それなら、俺の相手をしていただけますか?」

「何?お前はシューターだから、出水とかとやった方がいいんじゃないか?近接には桐ヶ谷もいるだろう」

「シューターだからと言って、近接をしないわけじゃありませんよ。それに、風間さんはこの脳筋とは違うタイプなので、色々と勉強させていただければと」

「ありがとうございます」

「よしじゃあ早くブースに行こうぜ！」

太刀川さんが声を上げると、風間さんにうるさいとタイキックをくらっていた。

「相手はNo. 2アタッカーだぜ、頑張れよ」

「ああ」

そうして俺達ランク戦ブースへと向かっていった

ブースは人で賑わっていた。

「先にやらせてもらうが構わないか？」

「ええ。構いません」

太刀川さんは不満のようだが

「えー!? 風間さん後からなのにそれはずるいつてー」

「お前は黙ってろ」

あ、太刀川さんがしょんぼりした。それを気にせず風間さん達は個室へ向かっている

「10本勝負でいいな？」

「はい」

そろそろ始まるみたいだ。セイが風間さん相手にどこまでいけるかな？

―赤司 side―

風間さんとの模擬戦だ。相手がどんな戦法をとるのか分からないが、天帝の眼を使えば何とかなるだろう。

『10本勝負、開始』

機械音の開始の合図とともに、風間さんが消えた。

そして次の瞬間には俺はブースのベッドに横たわっていた。

「なるほど、これは俺には不利だな」

天帝の眼は対象の姿が見えなければ効果を發揮できない。つまりカメレオン使いの風間さんは俺にとっては天敵と呼べるほどの存在なのだ。

「だが、分かっていたら対応はできるさ」

次こそ一泡吹かせてやる。

『2本目、開始』

さつきと同じように開始と同時に風間さんが消えた。俺は新しく作った孤月（槍）を出す。

臨戦体制をとっていたがすぐに後ろから刺された。これで俺は2本目を取られてしまった。

「なっ!?？」

ということではなく、幻踊で刃の形を変えた槍が同時に風間さんの首を貫いた

『風間、赤司ベイルアウト、1対0風間リード』

『今のはどういうカラクリだ?』

『ふふ、秘密ですよ』

次は確実に一本取ってやる。

3本目が始まってまた風間さんが消えた。今度は左から首を刺そうとするところを俺はエスカードで止めた。

「ンンだ！」

瞬時にメテオラを展開しエスカードごと風間さんを吹っ飛ばした。

(風間さんが浮いた!今なら!)

「旋空孤月！」

俺は旋空で浮いた風間さんを真つ二つにした。

『風間ベイルアウト、1対1』

『今のはいい一手だったぞ』

『ありがとうございます』

幻踊で風間さんを惑わしながら試合を進めていき、勝負は5対3の一分けで最終戦を

迎えた。

(もう勝ち越しはできない．．．なら思いついたことを全部試してみよう)

風間さんはカメレオンを使わずにそのまま突っ込んでくる。4戦目あたりでカメレオンが完全に効かない事が見抜かれたのだろう。

俺は右手でバイパーを、左手でメテオラを打ちつつ後退している。

「どうした？攻めてこないのか？」

(後3秒．．．．．2．．．．1．．．)

「今だ！」

俺は4×4×4分割した弾を半分は地面に、もう半分は風間さんに向けて放った。上

手くいくか？

(バイパーか！)

風間さんは弾を避けて突進してくる。だが俺が放ったのはバイパーではない、

その瞬間、風間さんの後ろで爆発が起こった。

「何っ？トマホークだと？？」

そう、俺が放ったのはトマホークである。俺は後退しつつバイパーとメテオラを半分ずつ風間さんに撃つてもう半分は体の後ろで合成してトマホークを作っていたのだ。

それを今作った感じに手を上に出した。

「今だ！」

風間さんに槍突進を仕掛ける。だが二度も同じ手を食らう風間さんではない。心臓の前にスコープオンを生成して止められた。

「これで終わりだ！」

右手でスコープオンを突き立ててくる。だが俺には二の矢が残っている。

「それはこっちの台詞ですよ。風間さん」

直後、風間さんの体が爆発した。半分外したトマホークがこのタイミングで返ってくるよう設定したのだ。

俺は爆発をするタイミングでちょうどせり出すように出しておいたエスクードの陰に隠れた。

『風間ベイルアウト、5対4、1分け、風間勝利！』

『まさかあんな事ができるとはな』

『空間計算は得意なので』

風間さんがフツと笑ったのが聞こえた。

『次のランク戦を楽しみにしているぞ。今度はチームでお前達に勝つ』

『俺達も負けません』

負けはしたが、得られたものは大きい。これはもつと特訓だな。

余談だが、太刀川さんは受験勉強で風間さんに引っ張られていったため、キリトは灰にならずに済んだ

可愛い弟子が出来ました

「赤司さんー」「桐ヶ谷さんー」

「俺を弟子にして下さいー!」

…… どうしてこうなった。

時は5分前に遡る。

俺達がこの世界に来て半年が経った。俺は太刀川さんを主にいろんな人とのランク戦でいつのまにかアタッカーランク三位にまでに上がっていた。

セイも孤月（槍）を使つて万能手の資格を得ていた。

防衛任務が終わり、学校もない俺達は（ボーダーに就職している事になっている）隊室でまったりお茶を飲んでいた。

俺はお茶菓子の袋を開けながら言った。

「いやーこっちの生活にも大分慣れたな」

セイはお茶を置いて答える。

「そうだね。僕は学校がないってのが少し心細いけど」

「そうか？俺は共感できんな」

確かに学校には行っていないが、給料で参考書などを買って風間さんにも教えてもらっている。

「キリトはコミュ障だからね」「うっせえ」

セイが痛いところを突いたコメントをしてくる。確かにその通りだが・・・話を逸らそうと俺は必死に話題を考える。

「まあ、現実も中々いいもんだよな」

「ここはリハビリの施設もいいから、体も元に戻ってきたしね」

俺達は半年間コツコツとリハビリを続けた結果、ここで目覚めた時とは比べ物にならないぐらい正常な体に戻りつつある。

「ゆくゆくは、筋肉ムキムキマツチヨマンの変^ト「自重」サーセン」

調子に乗りすぎた。馬鹿馬鹿しい話をしていると、来客が来たようだ。

俺は隊室の扉を開けて誰かを確認する。

「どちら様ですかー?」

「あつあの!桐ヶ谷さん!」

扉のところをいたのは真面目そうな少年と、いかにも活発という感じの天パの少年だった。

「ん?君は?」

「B級三輪隊隊長！三輪秀次です！」

「同じくB級三輪隊の米谷陽介です！」

「今日は桐ヶ谷隊のお二人にお話があつて参りました！」

「うん、とりあえず入つて？それとそんなにかしこまらなくていいから」

「はい、すいません失礼します」

「どうしたんだ？キリト」

部屋に戻ると、セイはお茶菓子を食べ尽くしていた。コノヤロウ。

「で、話つてなんだ？」

セイへの怒りで一瞬忘れかけた本題を切り出す

「担当直入に言います」

「赤司さん！」「桐ヶ谷さん！」

「俺を弟子にしてください！」

そして今に至る。

「えーと、それでなんで俺達なんだ？」

二人が目をキラキラさせて答える。

「お二人に憧れました！」

「そうか・・・」

こんなに熱意のある目を見るのは、月夜の黒猫団以来だ・・・

一瞬セイとアイコンタクトを取る。相棒もやはり同じことを考えていたようだ。ほんとに思考が同じすぎてエグい。

「よし、分かった引き受けよう」

「ありがとうございます！」

「だが、あいにく訓練室は一つしかないんだ」

どうするものかと困っているところ、三輪が勢いよく手を上げた。

「ウチの訓練室を使ってください！」

おお、それは助かる。

「それじゃ、行こうか」

俺と三輪ペアは、三輪隊の隊室に向かった。

「お邪魔しまーす」

隊室の中に入ると、誰もいなかった。

「今はみんな学校にいます。俺と米谷の学校は今日創立記念日で休みなんです」

なるほど、そういう事か。もう2年半も学校なんて行ってないからすっかり忘れて

た。俺は案内された訓練室に入り、稽古を開始した。

「さて、それじゃあ君の剣の太刀筋を見せてもらおうかな」

と言いつつ俺はコンピュータを模擬戦モードにする。

「分かりました……って、え？」

ニヤリと俺は笑った。

「大丈夫だよ。俺は剣一本とスラスターしか使わないし、サイドエフェクトも使わないから」

「そういう事なら……」

三輪は渋々了解した。それじゃあ、模擬戦開始だ。

「リンクスター！」

今までは体のヒヨロさをごまかすために常時トリオン体でいたが、最近は生身で過ごすことも多くなってきたので、やっとこれを言えるようになってきた。

『模擬戦、開始！』

開始の合図と共に、俺は三輪の首を飛ばした。片手剣ソードスキル、ヴォーパルストライクだ。

流石にやりすぎてしまったようだ。

「ごめん三輪」

「いえ、反応できなかつた俺が悪いんです。もう一本お願いします」

三輪はいい心を持っているな。こいつはきつと強くなれる。

『模擬戦、開始！』

俺はもう一度ヴォーパルストライクを放つ。二度目は避けられてしまい、銃を向けてきた。

俺はテレポーターで少し前に行き銃弾を避けた。

三輪は発砲を続けるが、俺はそれをソードスキルを駆使してことごとく切っていく。

「なんだよそれっ・・・チートかよ・・・」

全くその通りである。

「バイパー！」

三輪は作戦を変更して、バイパーを足元に撃つて砂埃を上げた。

その中を通って三輪は攻めてきたが、俺は受太刀をする。三輪の猛攻で、ソードスキルが使えなくなってしまう。

「クソッ」

俺は一旦三輪がいた所まで下がった。だがそれは失敗だった。

「アステロイド！」

下がった所には拳銃が埋められてあった。俺が踏むと引き金が引かれるようになっていたのだろう。（方法は分からないが）

そのアステロイドで、俺の体は貫かれた。

その後何戦かし、結局三輪が勝ったのは最初の一本だけだった。

「結局、全然、勝てませんでした」ハアハア

「でも、剣の太刀筋は中々良かったぞ。銃の扱いも上手いし、よく頭を使った戦法も出る」

キリトは息一つ切れていない。

「でも、剣一本の桐ヶ谷さんに負けるなんて・・・」

キリトはニヤリと笑って言った。

「三輪、お前に必殺技を教えてやる」

桐ヶ谷隊の隊室に残った俺達は米谷に槍の使い方を見せていた。

「持ち方が甘いぞ。それじゃあ直ぐに弾かれてしまう」

「すいません!」

「もう一回やってみてごらん?」

バババツバツ

米谷の腕から鋭い斬撃が繰り返される。こいつはかなり筋がいい。

「よし、後はその基本を一時間繰り返しませ。絶対にフォームを乱すなよ。水分補給もしつかりするんだぞ」

そう言って、俺は訓練室から出ようとした。

「えっ?」

米谷が不思議な顔をする。もう一度俺は向き直って言った。

「こういうのは基本を染み込ませる事が大切なんだ。基本が出来なきや応用はできないだろ?」

「分かりました・・・」

米谷がしょんぼりした顔を見せる。ちよつとやる気が出るおまじないをかけておくか。

「基本がちゃんと出来れば、俺の必殺技を伝授してやる」

米谷の顔が一瞬で明るくなった。そして元氣よく

「はい! 頑張ります!」

と返事を返した。この方法は単純な奴には効果的だからな。

〜一時間後〜

「お〜い調子はどう・・・!」

訓練室に入ると同時に俺は驚愕した。

セイほどではないが、米谷の槍のスピードは格段に上がっていた。さらに、教えてない事まで自力でマスターしていた。

(1 教えたら10覚えるタイプだなこいつは)

「ん？あれ？赤司さんいつの間に」

「ああ、さつきからだ。それにしても一時間でこの成長スピードとは凄いな」

「そうですか？普通だと思います」

普通じゃない事は分かって貰いたい

「それじゃあ、必殺技の伝授に入るぞ」

「え？基本技のテストは？」

「それはもういい。さつきの特訓の様子を見させて貰ったからな」

そう告げると米谷は目に見えて喜んだ。やはり少年だな。

「それじゃあ、俺の必殺技を教えてやろう」

「はい！よろしく願います！」

それから時は流れ、特訓を終えた俺たちはランク戦ブースへ向かっていた。

「あの桐ヶ谷さん、どうしてブースへ向かっているんですか？」

「まあ、着いてからのお楽しみだ」

ランク戦ブースって時点で察しはつくだろうが。

「おいキリト、遅いぞ」

ブースへと行くと、セイが出迎えてきた。

「悪い悪い、ちよつと長引いちまってな」

どんなことをしていたか話し合っていると、弟子達二人がまだかまだかという視線を送ってくるので、咳払いしてから答える。

「よし、じゃあ特訓の最終試験をするぞ」

「はい！」

「ほんじゃ、二人でガチで一本模擬戦をやってくれ」

待つてましたと言わんばかりに顔を見合わせる二人。そこで俺はニヤリと笑って提案をする。

「負けた方には、加古さんの炒飯な」

あれだけ目をキラキラと輝かせていた二人から血の気が引いていく。それもそうだろう。加古さんの炒飯は通称「ロシアン炒飯」と呼ばれるほど当たり外れの差が激しいのだ。

ある青年は、こう語る。

「これは本当に人が作れるものなのかと思いましたがね。もうおいしい○ぼの料理と同じくらいの凄さでしたよ」

またある青年は、こう語る。

「見た瞬間に驚愕しましたね。あれを食べた後の意識は残ってないです。魔界あたりではきつと人気なのでしょうね」

という意見が残っている。俺も何回か食べさせてもらったが、ハズレを引いた時は記憶が残っていなかった。セイは味の違いが分かる男なので俺より招待されている数は多いはずだが、ハズレを引いたことは一回もないらしい。

二人の目からは、絶対に負けられないという闘志の炎が上がっていた。

「おいキリト、それは流石に加古さんに失礼じゃないのか？」コソツ

「お前はハズレを引いたことがないからそんなことが言えるんだ」コソツ
コソコソ話に食いついてきた二人が振り返ってくる。

「どうしました？」

「どこかお体の具合が悪いんですか？」

「いや、大丈夫だ。いってこい」

俺はふとあることを感じ、セイに問いかける。

「なあセイ、俺らのSAO時代の戦績ってどんなんだったっけ」

「ん？720戦中360勝360敗だ？」

「よし、じゃあ自分の教え子が勝つかどうか賭けしようぜ。」

若い者を商売に使おうとする相棒のため息をつけてからセイは答えた。

「しょうがないな。負けた方はコーヒー奢りだからな」

セイの口元かすかにニヤついている。何だかんだ言ってもセイも乗り気なのだ。

「OK、望むところだ」

弟子達二人の決闘が、今始まる。

俺と陽介はフィールドへと転送された。この勝負は負けられない。だってまだ死にたくない（切実

『模擬戦、開始』

その機械音と共に、俺達はお互いの懐へと突っ込んでいった。俺は孤月で陽介に斬りかかる。

「はあっ！」

だが陽介はいとも簡単にそれを止め、幻踊で追撃をかましにくる。

「くっ・・・」

俺はギリギリの所でそれを避けて、後退する。

最初の一撃の後、陽介がどんどん攻め込んでくる。このままでは反撃ができない……

「おいおい秀次？防戦一方じゃねえか？」

陽介の言う通りだ。俺は一度距離をとって拳銃を構える。

「アステロイド！」

俺はアステロイドを陽介に向かって放った。すぐそこにまで迫っていた陽介は驚い

た表情を浮かべる。とっさにシールドを張って防いだが最後数発地面に向けた弾で砂埃が上がる。

「どうやら防ぎきれなかったようで脇腹に一発当たっていた。

「おおく危ねえ危ねえ。後ちよつとで死ぬとこだったぜ」

陽介は全く余裕の表情を崩さない。だがこれでいいのだ。少しの瞬間こちらに余裕ができれば。

砂埃を抜けて、陽介の元に多数の弾丸が迫る。ただその弾は、曲がるもの、一直線に突き進むものの二つに分かれている。

（おいおい・・・同時に二種類とか聞いてねえぞ）

砂埃が晴れると、そこに立っていたのは――

「ハハツこりやおもしろえわ」

――二丁の拳銃を構えて立つ三輪の姿だった。

「さあ、新スタイルその1、早速実践だ」 side out.....

米屋 side

台詞を言ったその瞬間、俺の前から秀次が消え去った。どこへ消えた？

「上か！」

案の定上には秀次がいた。あのままなら動くことはできまい。秀次が上から拳銃を

撃ってくるが体制が不安定でかすりもしない。

「くらえー!」

俺は飛び上がったて銃を突き刺そうとする。その刹那、いきなり体制が崩れた。下を見
ると片足がなくなっている。

「バイパーか!」

そう、三輪がさつき放つたのはバイパーである。当たらなかつた時はそれぞれ軌道を変えて戻ってくるようセットしておいたのだ。

拳銃を構えた秀次が落ちてくる。このままではやられる……

「アステロイド!」

無数の弾丸が迫ってきて勝負が決まったと思われたその瞬間。

「両防御フルガード!!?」

背中全体にシールドを張った。スナイパーの弾丸は防ぎきれないが、これくらいは防
げるだろう。

防ぎきれたので、両者地面に着地する。

「中々しぶといけど、それじゃあもう素早い動きはできないな」

「へっそれはどうだか・・なっ!」side out……

三輪side

右足一本で地を蹴ってこちらに向かつてきた陽介。だが避けられない攻撃ではない。俺は孤月を抜いて応戦する。

「でやつー！」

これは孤月で受け止められた。拳銃でトドメを刺そうとしたその時、光の刃が俺を襲ってきた。

「っ！不味い！」

とっさに避けることが出来たが、腹部に深い穴が空き、トリオンがそこから漏れ出す。光の刃の正体を確かめようと前を向いた。

「なるほど、それがお前の特訓の成果か」

陽介の足から生えていたのは——

「お前ばっか進歩してた訳じゃねーんだぜ？」

——杭のように尖った形をしたスコーピオンだった。

「面白い、お前がそうくるなら、俺も最後の力を使おう」

俺は拳銃をしまい、もう一本の孤月を背中に出現させ、抜刀した。

「これが新スタイルその2、二刀流だ」

「さあ……」

「くくぜー！」

一直線に切り込んでいく。右足一本しかない陽介の動きはやや鈍くなっているが、スコーピオンの攻撃でカバーしている。

(トリオンはもう残り少ない……ここが正念場だ！)

「はあああああつ！」

二刀流の連撃で詰め寄っていく。地道に削れてはいるが、陽介の幻踊とスコーピオンでこちらも削られている。

「くっ……」

陽介が浮き上がったその瞬間を、俺は見逃さなかった。

「旋空孤月！」

どうする事も出来なかったようで、苦し紛れに槍をなげてきた。相打ち狙いということだろう。

「残念だが、そうはさせない！」

俺はもう一度左手で拳銃を構え、槍に向かって打つ。弾が当たった瞬間、槍は急に重力に従って落ちていく。

「鉛弾かよ……こりやダメだわ」

陽介の顔にピキピキとヒビが入っていく。

「俺の勝ちだな」

『戦闘体活動限界、緊急脱出ベイルアウト!』

俺たちの生死をかけた戦いは、俺の勝ちで幕を閉じた。

キリト side

勝負を終えた三輪たちが俺たちの元に戻ってきた。

「かく負けちった〜」

「お疲れさん。米屋、ロシアン炒飯おめでどう」

俺がそう言うのと米屋はビクツツとして念仏を唱え出した。

「ハズレ怖いハズレ怖いハズレ怖いハズレ怖いハズレ怖いハズレ怖い……」

(ほっておくのが一番だな)

「三輪、良くやったな。師匠として鼻が高いぞ」

「はい!ありがとうございます!」

「だがまだ新スタイルが安定してないな。これからもっと特訓していくぞ」

「はい!」

隣ではセイも米屋にアドバイスをしているようだ。どうやら立ち直ったようだな。

「よし!それじゃあこれから飯でも行くか!」

「もちろんキリトの奢りで、だろ?」

痛いところを突いてくる。弟子二人がいるのでかつこ悪いところは見せられない。

「あ、ああ！もちろんだとも！」

「二人とも、今日は遠慮なくじゃんじゃん食べてくれよ。育ち盛りなんだから」

「やったー！」「えっ、でもそんな、悪いです」

三輪は申し訳ないと言った表情だが、米屋は乗り気のようだ。三輪をようやく説得して、俺たちは食堂へ向かおうとする。

「そんじゃ、行くか！」「はい！」「ああ」

その瞬間だった。

「あら？桐ヶ谷くんに赤司君、奇遇ね」

「」

「あ、ああ、加古さん。お疲れ様です」

「あ、ああ、加古さん。お疲れ様です」
「ダークマター製造機（加古さん）が現れてしまった。米屋が恐怖でカタカタ震えている。」

「新作が出来ただけど、二人共試食しない？」

「ヤバイ、ここで死ぬわけにはいかない。というところでやつとさっきの会話を思い出す。」

「すいませんけど、俺たちこれから食堂に行くところなんです」

「あら、そうなの？」

「そのかわり！コイツを連れてって下さい！」

俺はそう言つて生贄（米屋）を差し出す。

「あら？誰かしら？その子」

セイがさつと出てきて答える。

「俺の自慢の一番弟子です。米屋というB級隊員です」

米屋が嬉しそうな顔をする。微笑ましいがここで俺たちがさらわれる訳にはいかないのですっかりと意識を米屋に誘導する。

「こいつ！加古さんの炒飯超食べてみたいって言つてたんですよ！」

「まあ！そうなの！じゃあウチの隊室に来て！歓迎するわ」

襟元を掴まれて引つ張られて行く米屋を見て、俺と三輪は合掌する。赤司は一人頭の上にて？マークを浮かべている。

「さ、さあ！食堂へ行こうか！」

その一時間後、気絶した米屋が三輪隊の隊室に運ばれて来たとか来てないとか。

A級ランク戦、開幕

「ついにこの日がやって来たな……」

「ああ」「はい！」

今日はキリト達の初のA級ランク戦の日である。

赤司に司会をしてもらって最後の作戦会議を始める。

「今日の相手は太刀川隊と二宮隊、そして風間隊だ」

「A級の中でも実力者が多い部隊ですね」

「ああ、今回は二宮隊にしかスナイパーがいないから射線が通りにくい工業地帯Cで行く。キリトはスナイパーの位置がわかり次第こっちに連絡してくれ」

「OK」

「アリスも情報管理は任せただぞ」

「はい！任せました！」

心なしか頬を染めて答える。

「ボーダーでは俺達はまだまだ新人だが、俺達にはs a oで培ってきた戦闘経験がある」

「全力で勝ちに行くぞ！」

「おおー！」

その頃他の隊では……

「キリトのSEと剣技は厄介なところがあるからな。俺が切りに行く」

太刀川隊ではキリトを切る作戦のようだ。

「始まつたらすぐ位置を特定するから任せてね」

オペレーター・国近柚宇がゆるふわな雰囲気で答える。

「赤司先輩はどうするんですか？」

そう尋ねたのはボーダーのトップクラスシューター、出水公平である。

「別に放っておいて構わない。だが射程圏内に入ると常に周囲に気をつけておけ

よ。どこに置き弾があるか分からないからな」

「了解っす」

「後の二つはいつもと同じだ。鳩原に気をつければ勝てる試合だ。勝ちに行くぞ！」

「おおー！」

二宮隊にて

「今回注目するのはなんとと言っても桐ヶ谷隊だ」

そう言ったのはA級2位二宮隊の隊長にしてNO1シューターの二宮匡貴である。

「桐ヶ谷先輩のあのSEはかなり厄介ですよねー」

「赤司先輩のゲームメイク能力も侮れないぞ」

上から二宮隊の犬飼、辻が意見を言う。

「お前達は二人で出水を落としに行ってくれ。俺はステルスの要になる菊地原を落とす」

「今回はスナイパーのいる俺たちが有利なんだ。俺は鳩原と連携して早めに菊地原を落とし赤司を落としに行く」

「桐ヶ谷先輩はどうするんですか？」

「あいつはあのバカが勝手に落としに言ってくれるだろ。」

他の隊員はあのバカという単語で誰か察したようで、苦笑いを見せる。

「新入りに格上としての力を見せてやれ」

「「はい！」」

一方風間隊……

「今日の相手は知ってるの通りだ」

そう言ったのは風間隊隊長、風間蒼也だ。

「キリ君達は結構強いよ、太刀川さんや風間さんと互角にやりあうくらいだからね」

そう答えたのは風間隊オペレーター宇佐美葉だ。

「そう？太刀川さんはともかく風間さんは初見でやられただけでしょ」

「こら、そんなこと言うんじゃない菊地原」

目に余る毒舌を言うのは風間隊菊地原、そしてそれを叱るのは歌川だ。

「その通りだ菊地原、俺は互いの実力をさらけ出した上でギリギリの勝負をしたんだ。

あいつは強い」

風間がそういうと菊地原がシユンとなる。そんなことはおかまいなしに宇佐美が作戦の概要を話す

「今回はウチの戦法が通りやすい部隊ばかりだからね、ステルスが有効になると思うよよ」

「だからこそ今回をステルスは有効活用するぞ」

「了解！」

「よし、今度こそ1位に食い込むぞ」

その後場所は変わり観戦室

「さあやってまいりました。A級ランク戦のお時間です」

「今日の実況は私三上と期待の新人B級隊員烏丸隊員と、スナイパーランクNO1の当真隊員にお越しいただきました」

「どうぞよろしく」

「今日の目玉はなんと言っても桐ヶ谷隊ですね！」

三上の問いかけに当真と緑川が答える

「そうだな。俺はランク戦ブース最近行ってねえから知らねえけど、かなり興味あるな」

「俺は桐ヶ谷先輩と何回か戦ったことあるつすよ。一回も勝ててないつすけど」

「桐ヶ谷隊のチームとしての戦闘は、忍田本部長との一戦以来ですね！どんなバトルになるか楽しみです！」

「「おお．．可愛い．．」」

三上のあどけない笑顔に男どもが頬を染める。

(（このロリコン共め．．）)

密かに実況席の二人がそう思ったのは内緒だ。

「？」

三上は不思議そうに首を傾げている。

「気を取り直して、実況に入りましょう！転送開始まで後10秒！」

各作戦室では．．．．

桐ヶ谷隊

「よし、下剋上行くぜ！」

「ああ！」「おおー！」

太刀川隊

「上の実力を見せつけてやろーぜ」

「はいー！」

二宮隊

「全て蹴散らすつもりで行くぞ」

「[[[[はー]]]]」

風間隊

「勝ちに行くぞ」

「[[[[はい]]]]」

実況席に戻る…

「3、2、1、転送、開始！」

転送がされ終わると、俺は真っ先に隠蔽を使った。

「さて、スナイパーを探すとするか」

続けて索敵を使う。精度を上げるため探知範囲を狭め、集中力を高める。これで相手の位置はバッグワームを着けていても分かる。

「これがセイだから……マップ的に考えると、狙撃ポイントはこれぐらいしかないからこの中にはいないな。走りながら探そう」

そう思いながらマップ内を20mほど走ったところで、最悪の敵に見つかってしまった。

「ようキリト、元気そうだな」

「……あんたもね、太刀川さん」

「さあ、戦ろうぜ」

『すまないセイ、情報送るのが遅れる』

『分かった。気にしなくていいから死なないように気をつけろ』

『了解！』

通信してる間に太刀川さんが斬り込んできた。

「敵に見つかってから通信とは、ずいぶん余裕だな」

太刀川さんが笑みをこぼしながら言葉をかけてくるので、俺も笑みを返して答える

「報・連・相は重要なことですよ、太刀川さん！」

俺は太刀川さんを剣で押し返して距離を取る。

「さあ、いくぜ！」

今度はこつちから攻める。だが太刀川さんは余裕の表情だ。

「どうしたキリト？いつもより剣が鈍いぞ？」

「クツ……」

どんどん後ろへと下がっていく。まだまだ・もう少し粘れ……

（キタツ！全員が索敵範囲に入る瞬間！）

「ここだ！」

俺は足元にグラスホッパーを起動する。飛び上がり周囲を確認して……

（いた！スナイパーだ！）

『セイ！スナイパーは南側の貯水槽がある工場の屋上だ！マーキングしてアリスに送るから確認してくれ！』

『了解！アリス！』

『レーダー転送！』

『よし、転送完了だ。あとキリト、今のは流星石にバカすぎる。狙撃されたらどうするんだ』

『ごめんって！説教は後で聞く！』

よし……これでもう索敵も隠蔽も使う必要はない。俺は2本目の剣を抜く。

「さあ、ここからが本番だぜ太刀川さん！」

「そうそう、それを待ってたんだ」

太刀川さんも両手に二本の刀を構える。俺は左手の剣を前に、右手の剣を地面と平行になるように構えた。

「はあっ!」「おりゃあ!」

互いに斬り合いを始める。俺は体を型にはめてソードスキルを使う

「シャープネイル!」

続いて左手の剣を型にはめる。キリトがこの半年で生み出したソードスキルとソードスキルを繋げる『スキルコネクト』技の初めと終わりと同じ型のもので構成するため、選択肢は少ないが技を使った後の隙は少ない。

「メテオブレイク!」

スラストターの推進力で回転した力を加えて体当たりの追撃を食らわせる。体術スキルとソードスキルの混合技だ。

俺の連撃を剣でいなししていく太刀川さん。だがその顔からは笑みが消えている。

(後少しだ・・・後少し・・・)

その焦りが俺の隙を生んでしまった。太刀川さんはそれを見逃さず俺に向かって鋭い斬り払いをかけてきた。

(グラスホッパーで避けられる!)

足元に斜めに設置したグラスホッパーを踏み飛んで回避する。だが太刀川さんはそ

れを読んでいたかのように――

「旋空孤月！」

旋空孤月を放つて俺の足を斬った。

「その足じゃあもうあんな速い動きはできないな」

「それはどうか、太刀川さん！」

俺はテレポーターを使った。太刀川さんの周り四方八方様々な方向に転移する。

「なっ！」

隙を見て背中に斬り込む。片手剣スキル、スラント

「グハアツ……」

「これでおあいこですね」

「ああ、そろそろ決着つけようぜ」

太刀川さんの両手の剣を片手一本で抑える。二本だとバランスをとれないからだ。

テレポーターを駆使してなんとか避けまくる。このままだと不味い。俺は太刀川さんに向かってホリゾンタルスクエアを放った。

「どうした？そんなもんか？」

足が一本使えない分動きが鈍くなっていて簡単にいなされてしまう。

「こうなったら、いくぜ！」

テレポーター移動で完全に背後を取ったー

「・・・ガハッ」

ーはずだった……

「お前のテレポーターの弱点、見切ったぜ。それは……」

「立体移動ができないことだ」ニヤッ

見抜かれてしまった。俺のテレポーター最大の弱点。俺のテレポーターは360度の移動と引き換えに、立体移動の機能をなくしてしまったのだ。

(クソッ・・・トリオンの消費量的にもう無理は出来ない・・・次の一発が全てだ!)
俺は起き上がりグラスホッパーを起動する。これが決まらなきゃ俺の負けだ。

「上に行っても無駄だ!」

俺は剣を下に向けて落下する。これが外ればもう勝てない……

太刀川さんは上を向いて剣を構える。ここで俺をしとめるつもりだろう。

「旋空孤月!」

その瞬間、俺は勝ちを確信してこう叫んだ。

「太刀川さん!俺の勝ちだ!」

「なに?」

俺は太刀川さんが剣を振り抜く前に俺は剣を引き絞り左手を前に構える。体がカ

チツとハマるような感覚の後、剣が光輝く。

「うおおおおおおあああ！」

ジェットエンジンのような轟音の後、体が加速する。重さと体の加速で凄まじい速さになる。

「だが旋空でお前も道連れだ！」

太刀川さんが剣を振り抜いたタイミングで、俺は剣を――

「な!?？」

――空に放り捨てた。俺の放った剣は旋空を突き抜けて太刀川さんの体に突き刺さる。

誰もが俺の体が旋空で真つ二つになる光景を目に浮かべただろう。だが俺は剣を放り捨てたことで身軽になったので強引な回転で横に回避し、体の向きを変えて着地した。

「ふっ、完敗だ。キリト」

太刀川さんの体にピキピキとヒビが入っていく。俺は全力で戦ってくれたお礼にこの言葉を言った。

「黒の剣士に敗北の二文字は、ない」

『戦闘隊活動限界、緊急脱出ベイルアウト！』

「さて、セイの加勢に行くとするかな」

俺は索敵を使って敵の位置を確認し、グラスホッパーを起動してそこに向かった。

赤司 side

転送が開始されると、俺は会場の一角にいた。バググワームを起動し、敵部隊を探す。

「さて、キリトからの連絡を待つか」

そうしていると、菊地原を見つけた。

（一応視ておくか……… 《天帝の眼》 発動）

視えた映像は、とても興味深いものだった。俺は自分がにやけるのを感じる。

（とするとあと少しで………）

と考えている間に、お目当ての人物はやってきた。

「よう、菊地原」

「どうも、二宮さん」

この光景はさつき見た。恐らく………からな。もう少し見ていよう。その時、キリトから連絡が遅れると通達が来た。まあこつちに集中できるからいいだろう。

「悪いが落とさせてもらおうぞ」

「それはこつちの台詞ですよ」

菊地原がステルスを起動して斬り込んで行く。それを二宮さんはまるで見えている

かのようにかわし、鳩原さんがスナイプする。

すぐさま狙撃方向を見るが、もう姿をくらましてしまったようだ。キリトの連絡待ちしかないか……

「フン、まだまだまだひよつこだな」

「そつちこそ……読みが甘いですよ」

二宮さんの背後から歌川と風間さんが現れ、両腕を斬り落としてしまった。

やはり……全員戦いが始まった直後に合流し、ステルスの要の菊地原を囲にして二人はカメレオンで隠れていたのだろう。

「だが、これで俺の作戦は整った」

その場の全員をSEを使って視る。行動の予測は完了した。外すことはない！

「バイパー……」

無数の弾丸を四人に向かって放つ。いつもの大玉ではなく、 $5 \times 5 \times 5 \times 2$ の計250発が降りかかる。

歌川と菊地原は避けきれずに貫かれたが、二宮さんと風間さんには避けられてしまった。

『戦闘隊活動限界、緊急脱出ベイルアウト！』

「このそれぞれ複雑な軌道、そしてこの正確さはお前しかないな」

俺は建物の陰から出る。

「赤司」

「どうも、やはり避けられてしまいましたね。だが、傷を負うのは避けられなかったよ
うだ」

風間さんは片腕を失っていた。二宮さんはNOOシューターだけあつて全て避けて
しまったようだ。

「じゃあ、やりましょうか」

「ああ、存分にやりあおう」

「お前とはまたやりたいと思ってたんだ」

俺は孤月に持ち替える。さあ、どこまでやれるかな？

「はああー！」

俺は風間さんに向かって突きを放つ。受太刀をしたようだがスコープオンは折れた
ようだ。すかさず追撃をくらわそうとしたが

「アステロイド」

二宮さんがアステロイドを撃ってきた。下手に接近したら二人ともやられる
な…… 風間さんもカメレオンで消えたし、ここは間合いを取った攻撃をするしか
な

いな

「旋空孤月」

俺はソードスキルではないノーマルの旋空で二宮さんに攻撃する。当然避けてしまったがそれでも間は詰められた。孤月を三叉槍に変形させて攻撃する。

「流石に良い動きをするな、赤司」

「ああ、いい突きだな。とても入ってすぐの動きとは思えない」

全て躲かされてしまう……シューターだけに動体視力は神がかつてるとして訳か。N Oー1は伊達じゃないな。狙撃で動きも制限されるし、風間さんにも少しずつ傷を付けられている。

「じゃあこれなら……どうですか」

槍を元の形に戻して、もう一つの技を使う。

「旋空剣技」

両手槍ソードスキル、トリプルスラスト。基本技の延長だが、今まで何百、何千と放ってきた技だ。ちなみに剣技とはソードスキルの略称だ。

「クツ、速い！」

よし焦ってきたぞ。ここからじわじわ最後まで削り取る！最後の一発が首にかすたが、まだ足りない。クソツ狙撃が邪魔だ・・

と思っていると、相棒がバカな行動をしているのが見えた。空でキョロキョロしてス

ナイパーを探しているようだ。

『セイ！スナイパーは南側の貯水槽がある工場の屋上だ！マーキングしてアリスに送るから確認してくれ！』

狙撃されたらどうするんだバカが

『了解！アリス！』

『リーダー転送！』

マーキングされたリーダーが、俺の頭に流れ込んで来た。いた！あそこだ。俺はスナイパーを視界に入れると、すぐさまSEを発動させた。

『よし、転送完了だ。あとキリト、今のは流星にバカすぎる。狙撃されたらどうするんだ』

『ごめんって！説教は後で聞く！』

だがそんな時にも、二人が攻撃の手を休める事はない。

『こんな時に呑気に通信か？アステロイド！』

俺は身体を屈めて手を地面につける。一見ただ避けたようにも見えるが、避けた先にいるのは——風間さんだ。

「クツ、だがこれで倒したつもりか！」

風間さんはアステロイドを全てスコープオンで斬ってしまう。だが俺の狙いはそこ

じゃない。

後ろから風間さんを無数の弾丸が襲った。

「なっ!?」

『戦闘隊活動限界、緊急脱出ベイルアウト!』

風間さんはその弾丸によつてベイルアウトしてしまった。二宮さんが驚いた表情をしている。

「種明かしをしましょう。今のバイパーがどこから出て来たか」

俺はさつき二宮さんがアステロイドを放った瞬間、避ける時に地面に手をついた。

「理由は二つ、立ち上がりを速くするため、もう一つは「地面から弾を撃つため、だな?」(こ名答です)」

地面から弾を通らせて移動させる。風間さんが使うモールクローの応用だ。

「残念ですが、これで終わりです。それでは」

俺はスナイパーの方向へと向かう。よし、射程に入った。

「バイパー!」

バイパーで確実に仕留めようとした時、ほとんどの弾が空中で弾けてしまった。

「悪いが、お前の好きにはさせないぞ」

クツ、二宮さんか・・・これではスナイパーが仕留められない・・・

「なんてね」

スナイパーのいるビルが突然弾けてそこから光の柱が立つ。ベイルアウトの光だ。
「なっ!」

「二宮さん。俺の芝居に付き合ってくれて、ありがとうございました」

「どういう事だ?」

「別に何もおかしい事はありませんよ。ただ、バイパーだけを放った訳ではない。それだけです」

二宮さんはしばしの間考え、一つの結論に至った。

「なるほど、トマホークか」

「その通り、正解です」

俺は最初に歩いている時に、8つのトマホークを作って色んな場所に設置しておいたのだ。俺が最後に放ったバイパーで仕留めようと思ったと思ってくれた二宮さんには、路地裏で複雑な動きをするトマホークには目がいつていなかったようだ。

「さあ、これで対一です。二宮さん」

「フン・・・悪いが勝つのは俺だ」

『犬飼、辻、こつちに来てくれ』

そして俺たちの射撃戦が始まった。やはり二宮さんには撃ち合いでは勝てない。片

腕、片足、どんどん削られていってしまおう。

「どうした？もう終わりか？」

「大丈夫です。もう球筋は掴みました」

俺はエスクードをせり出して盾にする。

「そんな盾で俺の弾は防げないぞ」

アステロイドは容赦なく俺のエスクードを貫いてくる。

(クソツ、ダメだ。気休めにもならない・・・これしかない)

旋空剣技で二宮さんに斬り込む。片腕なのでバランスを取ることが出来ないが、旋空の補助で何とか技を使う。

「クツ・・・やはりそれは驚異だな」

(二宮さんの足を削ることが出来た。これであつちは片足のみ。勝てる！)

だが最悪のタイミングであいつらが来てしまった。

「お待たせしました！隊長！」

「助太刀します！」

(ここまでだな。すまないキリト・・・後は任せた・・・)

その瞬間、犬飼達の横を、一筋の黒い閃光が駆け抜けた。

(やっと来てくれたか)

黒い閃光は犬飼達の前で着地し、地面に剣を突き刺してこう言った。その閃光とは……

「悪いな、ここから先はー」

桐ヶ谷隊隊服のコートを翻した、黒の剣士だった。

「ー通行止めだ」

俺は安心した表情で、キリトに向かってこの言葉をかける。

「遅いぞ、相棒」

さあ、最終決戦ファイナルバトル開幕だ。

三人称 side

「桐ヶ谷先輩……」

「どもつす♪桐ヶ谷先輩♪」

辻が苦虫を嘔み潰したような顔で言うのに対し、犬飼は楽しそうに挨拶をする。

「よう、二人共」

「悪いですけど、貴方に構っている暇はありません」

二人は左右の道から同時に抜け出そうとしたが、その瞬間、二本の剣が飛んでくるのを感じた。

「行かせねえって言ってんだろ……」

キリトは残像が見えるほど凄まじいスピードでテレポートして剣を引き抜く。

「なるほど、これは無視するのは厳しそうだ」

諦めたようで二人共戦闘態勢に入る。

キリトは右手を引き絞り左手を前に添える。

「さあ、始めるぞ」

カチツとハマるような感覚を感じた後、刀身が鮮やかな光を放つ。

「…不味い、避ける!」

犬飼がそう言った頃には、もうキリトは辻の目の前にいた。

「ふっ!」

ギリギリで避けた辻が、空中から無防備なキリトを狙おうとする。だがその瞬間、もう一刀の剣が刀身を出した。

「スラストーON!」

スラストーの推進力で強引に身体を捻って、辻の振り下ろした剣を迎え撃つ。

辻の剣は弾き返され、体制を崩す。すかさず追撃をしようとするキリトだったが、

「やらせませんよ!」

犬飼の弾幕に阻まれてしまった。すかさず二人とも体制を立て直し、距離を取る。

「ならこれはどうかかな?」

二刀の剣を構えて突撃していく。辻は迎撃体制に入るが、剣が触れるその瞬間に、
「テレポーター！」

辻をテレポーターで避けて犬飼の真正面に来た。とっさの判断で犬飼が銃を撃つが、キリトはシールドで防いでしまう。

「ハハツ♪サイコー♪」

犬飼は色んな方向へ向けて銃を撃つ。シールドで防げる数では事足りない数なので、誰もが決まったと思った。だが、

「ハアツ！」キキキキキキン！

妙な金属音が鳴り響いた後、そこに立っていたのは――

「超規格外つすね♪」

口元に笑顔を浮かべたキリトの姿だった。

「上手くいったな。セイの特訓のおかげだ」

とキリトが言った瞬間、二人は全く同じことを考えていた。

（あの人どんな特訓させてんだよ・・・）

作者（まったくもって同意見です）

何とキリトは犬飼の放った全ての弾を斬り落としていたのだ。この男、規格外なり。

「さて、そろそろ決着ケリつけようぜ」

キリトから全力の殺気が流れ出す。この感じになる時は本気の時だけだ。太陽が雲の中へと隠れて行く。

「ふうく……行くぜ」

その瞬間、二人の視界からキリトは消え去った。

「……上か！」

犬飼は上を向き、空を探す。太陽が雲から現れた瞬間、その光で目を閉じてしまったその刹那——

ズバツ！

その音だけが聞こえ、気がついたらキリトが地上に降り立っていた。

「な、何が起こったん 『戦闘体活動限界、緊急脱出ベイルアウト！』」

急に犬飼の体が三つに割れ、ベイルアウトしていった。

「何だと！」

いきなりの事で、冷静さが売りの辻でも動揺しているようだ。

「スラスターON！」

辻に向かってキリトが剣を投げた。スラスターの推進力によって、剣は真っ直ぐに進んでいく。

（避けたら確実に追撃を食らう事はさっきので分かる……何とか受け止めないと！）

投げられた剣を受け止めようと剣を左手に添えて迎え撃とうとしたが、

「グラスホッパー！」

その左手にグラスホッパーを仕掛けられてしまい、剣は刃先から弾かれ、両腕を広げた状態になってしまう。

「いつけえええええええ！」

キリトの剣が辻の心臓に深々と突き刺さった。

「はあ・・・負けちゃいました」

そう言う辻に、笑顔で語りかける。

「お前たち、かなり強かったよ。流石A級二位部隊だな」

「すいません二宮さん。先に落ちます」

傍でずっと赤司と撃ち合いを続けていた二宮は言葉を返さないが、その顔からはこう言っているように感じる。

【後は任せろ】

「頼みましたよ・・・」

『戦闘体活動限界、緊急脱出ベイルアウト！』

辻が光の柱となって飛んでいった。キリトは一息ついてこう言う。

「悪いなセイ、こつちももう限界みたいだ」

一方その頃赤司達はずっと撃ち合いを続けていた。

(何て正確なバイパーだ・・・出水や那須に続くリアルタイムバイパー使いと聞いていたが、弾の扱いではアイツらを上回っているかもしれない)

二宮は徐々に押されていつているようである。一方赤司はというと

(不味い・・・少しSEを使いすぎてしまった・・・ もうトリオンが残り少ない)

どちらも不安を胸に抱えているようだ。そんなところに救世主が割って入る。

「すまない遅れた！助太刀する！」

「キリト！」

集中力が乱れ、アステロイドを少し食らってしまう赤司。傷からトリオンが漏れ出ていく。

『おいセイ、大丈夫か？』

『結論から言うと、かなり危ない状態だ。もうトリオンが残り少ない』

『マジかよ・・・こつちもだぜ』

『しょうがないから一か八かの賭けに出るぞ。作戦は――』

『了解！』

キリトは右手に剣を構え、セイは槍を出現させる。

「何だ？もう終わりか？」

二宮はポーカーフェイスを崩さずに問いかける。セイもポーカーフェイスを保ちながらこう答える。

「ええ、コイツとやるなら、これが一番なので」

「そうか、まあ始めるか」

二宮はアステロイドを展開して、小さく分けてキリト達に放っていく。

「GOO！」

セイがそう言うと同時に、二人はそれぞれ反対方向に駆け出した。

依然二宮は弾を撃っているが、二人にはカスリもしない。だが二人とも遠くにいるので、攻撃を当てることができない。

「よし、このまま・・・3、2、1、GOO！」

二人が一気に懐へと入っていく。残りのトリオン量的にも、ここで決めるつもりだ。

「うおおおおっ！」

二人の剣が交差する・・・誰もが決まったと思ったその瞬間、

「両防御フルガード！」

その攻撃は防がれてしまい、アステロイドで二人を撃ち抜く。だが撃ち抜かれていたのは――

「何？」

「赤司だけだった。」

『戦闘体活動限界、緊急脱出ベイルアウト!』

作戦室にいる鳩原が二宮に叫ぶ。

『二宮さん!後ろー!後ろー!』

キリトがテレポーターを使って後ろから突撃してくる。

「これで終わりだ!」

とその瞬間、地面から出てきた弾が、キリトの心臓を撃ち抜いた。

「なん・・・だと・・・」

その場にボタンと崩れ落ちるキリト。顔にピキピキとヒビが入っていく。

「その程度読めないとも思ったか?」

「お前達の敗因は2つある。」

二宮がポケットに手を入れて話す。

「一つはトリオン量が残り少なかったことだ。トリオンさえ残っていればこっちが危

なかった。そして二つ目は・・・」

キリトはゴクリと唾を飲み込む。

「お前達は近距離戦では負けなしだろうが、中、長距離戦ではまだまだ経験不足だ。

もつと経験を積んでこい」

ハハッと笑ってキリトが言う。

「なるほど、ごもつともだ。でも今回の勝負は、俺達の勝ちですよ」

「ああ、その通りだ。だが次は勝つ」

『戦闘体活動限界、緊急脱出ベイルアウト！』

こうしてキリト達の初陣は、幕を閉じたのだった。

観戦室にて

「決着！最終スコアは7対5対0対0！桐ヶ谷隊の勝利です！」

ランク戦室の様々な場所から歓声が上がる。

「いや〜凄い試合でしたね。瞬き厳禁って感じでした」

と、台詞とは裏腹にクールに烏丸が言う。

「今回の見所はどのようなところだったでしょうか？」

「そりゃー勿論桐ヶ谷隊だろ。キリトは太刀川さんをタイマンで落としてるしな」

と当真が言う。すかさず烏丸も

「あの二人の戦いを見て、二刀流使いが増えそうっすよね」

「それと、グラスホッパーの使い方が面白かったよな。相手の手の平に設置したりと

か」

（ ）で三上が話題を変える。

「赤司隊員の方はどうでしたでしょうか？」

「赤司先輩も凄かったつすよね。風間隊全員と鳩原先輩落として単独4点取った上に二宮さんとも互角に渡り合っていましたし」

「そうだな。あいつのSEは未来が見えるとか言ってたからな。弾の扱いでは既にトツプクラスって事だろ」

「でもあいつらの弱点も見つかったな。中長距離戦の戦い方がまだまだ甘え」

「そこが今後の課題となつてきそうですね。次の対戦が楽しみです」
それぞれの隊室では・・・

太刀川隊隊室

「お前いつのまに落ちたんだよ！」

「ギブギブ！太刀川さん痛いつて！首絞まつてるつて！」

「あははくこれは仕方ないねく」

二宮隊隊室

「すいません二宮さん・・・」

「すいません・・・」

「いや、お前らは言った通りの働きはした。お前達のお陰で桐ヶ谷を仕留めることが出来た。感謝している。それより今度は負けないように修練に励め」

「はいー!」

「二宮さん……」

「お前もよくやってくれた。そんなに悔やむな」

「でも……私……」

「はあ……」ナデナデ

「……!あの、二宮さん?／／／」

「お前は大丈夫だ、悔しかったらそれ糧に精進しろ」ナデナデ

「はい!／／／」

風間隊隊室

「すいませんでした!」

「うるさい、うるさい、もういいから頭を上げろ」

「でも!俺達!」

「わかった。なら今日ラーメンを奢れ。そこで反省会をするぞ」

「はい!」

「うんうん、青春だね」

桐ヶ谷隊隊室

「すまない、皆」

「いや、キリトはよくやってくれた。負けたのは俺の作戦が悪かったんだ」

「中長距離戦の戦い方・・・マスターしないとな」

「ああ、これからも皆んなで頑張っていこうぜ」

「はい（ああ）！」

「それと、キリトは後で俺とアリスから無茶な行動をしないための講座をするから、覚悟しとけよ」

「お、おう！」

場所はランク戦室に戻り・・・

「それでは半年に一度のA級ランク戦、これにて終幕です！」

あの激闘から一年が経ち・・・俺達はA級二位にまで上り詰めていた・・・

これまで色々な事があつた・・・広報部隊嵐山隊のA級昇格や・・・カゲの暴行事件・・・
それによるB級降格・・・

そして一般人へのトリガー流出・・・そして近界への渡航・・・そしてその事件に鳩
原さんが関わっているという事・・・

それを知った二宮さんの顔はポーカーフェイスが崩れ、とても悲しい顔をしてい

た・・・

本当に色々な事があつたが・・・俺たちは日常を変わずに過ごしていた・・・俺はこの一年ずっとこの三門市を守るために剣を振ってきた・・・過酷な戦いもあつたけれど・・・いつも隣にはセイが居てくれた・・・いつまでも・・・いつまでも・・・この日常が続いて欲しいと願っていた・・・だがこの日常は・・・これから始まる長い長い戦いの序奏に過ぎなかつた・・・この世界は・・・俺の願いを裏切つて・・・この日常を壊していく・・・物語が・・・終結へと・・・加速していく・・・

原作前々SAOの悪夢再来編

思いがけない敵、驚異の始まり

俺たちがこの世界に来てから一年半が経った。俺たちはA級2位の肩書きを守りながら生活をしたきた。そのおかげで色々なことをすることができた。休みの日に3人で旅行に行ったり、海に行ったり山に行ったり、こっちの世界を満喫していた。

調べてみて分かったのだが、この世界は単純に俺たちが歩んできた世界とは違う世界だったということだ。この世界のSAOはクリアされなかったという事実を思い出して欲しい。プレイヤーの殆どが、2025年5月〜7月の間に亡くなっていたのだが、この世界のヒースクリフが死んだのは2024年11月7日14時55分。そう、これは俺とセイが元の世界でヒースクリフを倒し、ゲームがクリアされた時間である。俺たちはこの事から「あの戦いはこの世界でも行われたのではないか」という仮説を立てた。そこから俺たちは、「もしかしたら自分たちの家も残っているのではないか?」ということも考え、自分の出身地へと飛んだのだが、俺たちは自分の家を見つけることができなかつた。いや、セイとアリスの家は存在すらしていなかつた。どちらもデカイ財閥の跡取りで、見つからないというわけはなかつた。それが気になり、ネットで調べた

り、ボーダーに調べてもらったりしていたのだが、日本どころか世界に名を連ねている二人の家の名はどこにも見当たらなかった。

そこで俺たちは、SAOの被害者リストに目をつけた。まさかとは思ったが、どこを調べても『赤司征十郎』『有栖川京華』の名を見つけることはできなかった。この世界には二人の存在すらなかったのである。

ん？俺の名前はあったかって？俺の名前は被害者発見することができた。なのに家が存在していないのはどういうことかと思ったが、名前の下に書いてあった住所を見て驚愕した。『三門市〇〇—X—△△』この住所は警戒区域内のもので、その住所に行くと、崩れ去った家の中に俺やスグ、母さんが写っている写真などを発見することができた。度重なる戦いがそこで行われていても、奇跡的にその写真だけはボロボロになっていなかったので、今ではそれは俺の唯一無二の宝物になっている。

そして現在に戻るが、俺たち桐ヶ谷隊は今、駅ビルに来ている。俺たちはこの春に大学の編入試験を受けるため、参考書を買うために買い物に出ようとしたのだが、「それならついでに最後に遊びましょうよ！これからは受験一色になって遊べなくなるんですから！」というアリスの提案でここに来た。俺たちは早く勉強したいんだけど
な・・・

何はともかく来たからには結構乗り気で遊んでいる。最近では風間さんや二宮さ

んに訓練でも勉強でもしごかれて結構疲れが溜まっていたので、いい息抜きになった。

「この日常が、いつまでも．．．いつまでも続けばいいのにな．．．」

「ん？何か言ったか？」

隣を歩いていていたセイが問いかけてくる。

「いや、なんでもないよ」

「キリトさーん！セイさーん！何やってるんですかー！早く早くー！」

かなり前を歩いていたらアリスが大声で呼びかけてくる。全くアイツは．．．

「分かったよー！今行くー！」

その瞬間、アリスの頭上でバリバリと音を立てて時空の歪みが生まれる。そこから吹き抜けの天井まで届く大きさの円が形成される。

「！アリス！逃げろっ！」

どうやら俺の声は届かなかったようで、頭上に？マークを浮かべている。クソツ！間に合え！

「リンクスタート！」

俺は光の如き速さで自分のポケットに入れてあったトリガーを起動させ、戦闘体へと換装した。

記憶が、ハッキリと覚えている。

「アレは……」

あの体を、あの目を、あの威圧感を、あの声を、全てを覚えている。

そうだ、アレは……

「イルフアング・ザ・コボルドロード……！」

完全に噛み合い、回り出した全ての歯車が、新たな道を形成していく。

俺たちの繰り返ししてきたあの日常は、今、この瞬間から、全く違うレールを進み

始める……

蘇るコボルドの王

「イルファンング・ザ・コボルドロード……！」

重い叫びを轟かせたコボルド王は自らの手に持つている斧を振りかざし、キリトの方へ突撃して来る。

（落ち着け、焦るな。冷静に考えろ……この状況で最善の手をー！）

キリトもすかさず前に走り込み、二本の剣を構える。コボルド王が斧を振り下ろしてくる。

（斧単発の振り下ろし、これは受け止められる！）

と思い、剣を交差させて防御の体制をとる。が、コボルド王の繰り出してきた攻撃は、予想に反するものだった。

（左から殺気……？）

キリトが感じた殺気は、上からのものではなく、左から。咄嗟にそれを感じたキリトは、テレポートでギリギリ殺気の範囲外まで飛んだ。

先ほどまで自分がいたところを見てみると、ありえない光景が広がっていた。

「3本目の腕……？」

正確にはそうではない。コボルド王は4本の腕を持ち、斧と盾を二つずつ装備している。

「バカな!? S A Oの時はそんなのなかったぞ! いや、S A Oの時でさえ、見た目そのものを変えるなんてことはしなかった!」

予想外の出来事で錯乱状態になっている。こうなってしまうえば思考が纏まるはずもない。次の一撃が迫ってくる。

「ヤバイ、フルガード!」

咄嗟にフルガードで防いだ。とにかくこの絶望的状况を打破しなければならぬ。

(あの腕なら足元は死角になる。機動力を削いでから一気に大技を叩き込む!)
そう判断し、迫ってくる攻撃をテレポートで回避しながら敵の足元へと走り込んで行く。

「グレアツ!」

体の1mほど右に斧が迫る。素早くもう一度テレポートしてもまた斧。斧。斧。しかもそのタイミングと位置は、回数を重ねる度に近づいて行く。

(よし!あと一回だ!あと一回だけ……)

そして最後のテレポートをした瞬間、コボルドの攻撃も完全にキリトを捉えてい

た。

（！まずい！避けられ．．．）

キリトは完全に避けられない事を察して、できれば少しだけでも当たる場所を変えようと右の剣のスラスターを起動させた。

「グラアッ！」

損傷はゼロには抑えられず、左手の肘から下を切り取られてしまった。トリオンの漏出が傷をつけられたという事を理解させる。

（落ち着け、とにかく敵を倒すんだ、敵を、倒せ！倒せ！倒せ！）

右手に力を集中させ、出来る限り最高の剣速で体をねじらせ、スラスターを起動させる。水平な体制から一気に回転し、敵の斧を狙った攻撃をぶちかます。

（当たれ！当たれ！）

「当たれええええええええええ！！！！」

その叫びに呼応したかの様に、キリトの剣は敵の斧を半ばから切り落とし、キリトは倒れた。

そんなキリトをこの化け物が見逃すはずもなく、もう一本の斧で攻撃して来る。

（読み切れなかった！ヤバい、貫つてしまう！）

「エスクード！」

切り取った斧の腹から壁のような物が突き出てきて、キリトはその物体に突き飛ばされた。

「スイッチ」

声の主は颯爽と前に出てきて、槍を振りかざす。

「旋空孤月」

そこから放たれた光の刃はコボルドの盾を突き抜け、残った力で腹に深い傷をつけた。コボルドが苦しんでいるところにもかかわらずセイは攻撃の手を止め、へたり込んでいるキリトに近づいてきた。そしてキリトを見下し、言った。

「なんだあのザマは」

「え？」

受け取った言葉は、失望。今までのセイから一度も聞いたことのなかった言葉を受け取り、またも頭が混乱する。

「あの戦いは一体どういう事だ。アレが本当にお前なのか？」

セイの言葉に苛立ちを感じたキリトは立ち上がり、文句を返した。

「何がだよ。俺はしっかり戦っていた。敵を倒すために「そこだ」は？」

キリトにはセイが言っていることの意味がわからなかった。

「敵を倒すことの何が悪いって言うんだよ！」

「それがお前の戦い方なのか？」

セイの一言にハツとするキリト。

「お前はいつだって自分の命を人のために使うような、人の事を原動力にして動いているようなやつだった。だから一層の時もビーターを演じてヘイトを自分だけに集め、五層で抗争をさせないためにバファイテムを自分で取りに行き、七十四層で軍の連中を見捨てなかつたんだ」

「お前、負けても命が取られるわけじゃない環境に溺れてしまったのか？」
「負けてもリスポーンするだけの生活に平和ボケしたのか？」

「そうだ、確かにそうなんだ。あの頃はいつだって命がけだった。だからいつも最善手を考え、生存率、成功率の高い方を選んで実行してきたんだ。」

「今のお前は、グリーンムアイズと戦った時と同じだ。」

「自分の命を簡単に投げ出すんじゃない。見ろ！」

セイの指差す先には、コボルドに怯え、避難ができていない民間人がいる。

「お前には今も守るべき人がいるんだ。自分を見失うな！お前にはお前の戦いがあ
るんだ！」

目の前に槍を突き出され、風が起きた。頭のモヤモヤが一気に晴れた気がする。

「すうううくはあああく……」

大きく深呼吸をした後、敵を睨み付け、何かを決めた表情になる。

「セイ、サポート頼む」

「了解。決まったようだな、覚悟が」

敵を見ると切った箇所が再生していた。でもそんな事関係ない。キリト達は敵へと向かって、走り出した。

「セイ！」

「ああ！」

そう叫んだ瞬間、コボルド王の足元からエスクードがせり出し、一瞬よろける。その隙を見逃さずキリトはグラスホッパーを起動し、敵に一瞬で詰め寄りエスクードで浮いた足を切り取る。これで機動力を削いだ。

「スイッチー！」

レイガストを刀身を鞘に収め、体を軽くした状態でグラスホッパーで敵から離れる。

キリトが離れた僅か0.1秒にも満たない時間でコボルド王の体の様々な箇所を光の弾が撃ち抜いた。

「結構反応遅かったな」ズサッ

「ああ、次はもう少し大玉でもいいかもな」

これが二人が浮遊城で2年、三門市で1年半培ってきた連携術である。二人が揃えば正面戦闘で負ける事はまずない。ある時は剣と剣、ある時は剣と弾丸。一人一人の神速の攻撃に加え、キリトの攻撃が終わればセイが、セイの攻撃が終わればキリトが攻撃する。この攻撃に耐えられた者は今までの中で数えるほどしかない。

そこでコボルド王が漸く野太刀を抜いた。

「油断するなよキリト、奴はまだソードスキルを一度も使っていない」

「分かっているよ。ここからが本番だ」

セイは槍を手に取り、二人は揃ってコボルドへと突っ込んでいく。コボルドが野太刀を叩きつけてきたところで二手に分かれ、側面を取る。

二人が身体を型にはめると、双方の武器の刀身が光を放ち始めた。

片手直剣八連撃技、ハウリング・オクターブ。槍刺突九連撃技、バニッシュ・スラスト。

二人のソードスキルがコボルドに直撃した。そのタイミングでキリトはグラスホッパーでのピンボール、セイはバイパーをまるで檻のような形にしコボルドを閉じ込めた。

「今のうちに！逃げてください！」

セイがそう叫ぶと、取り残されていた人々は一斉に逃げ出した。

「グレアアアア！」

コボルドが刀を振り回す。だがその攻撃は全てキリトが勢いが乗る前にパライで跳ね返している。

「キリト！ 避難完了だ！」

「了解！ こいつも今体制崩してる！ お前も加勢に来てくれ！」

すかさず次の攻撃を入れようとしたところ、殺気を感じたキリトは素早くその場から離れた。

キリトがいた場所には三本の光の筋が通っていた。

コボルドが使ったのは、カタナ三連撃、緋扇。

「ついにソードスキルを使ってきたか・・・」

「まあそれなら好都合だ。システムで決まった動きは読めるからな」

「じゃあ今からは連携でいくぞ」

「ああ、お前もちゃんとついてこいよ？」

「おいおい、何年一緒にやって来たと思ってるんだよ」

その瞬間、キリトとセイがその場から消えた。いや、早すぎて見えなかつただけである。キリトのSEをセイにもリンクさせる事でキリトのトリオン消費量が2倍に

「ウ……ガアアアア！」

コボルド王が悲鳴を上げながら倒れた。

「何とか倒せたな」

「ところどころ危ないところはあつたけどな。本当にお前は……これからは気をつけろよ」

「へーい」

レイガストの刀身を収めて鞘に入れようとしたその時、コボルド王が最後の力を振り絞るかのように立ち上がった。コボルド王が向いたその先にいたのは中学生くらいのメガネをかけた少年だった。

「あんなところにまだ住民が!?？」

「瓦礫で足を怪我して逃げられなかったのか!」

コボルド王はその少年に向かって野太刀を振り下ろした。

（マズイ! あのままじゃあの子が!）

レイガストを抜刀し、斬りかかろうとした。だが相手は射程内におらず、これでは剣が当たらない。

（こっぴどなつたら!）

SEのシステムスキルを起動し、刀剣スキルを選択した。これで命中率の補正が

少しはかかる。

「スラストーON！」

(俺にできることはこれしかない！)

「あたれええええええええええ!!!」

最大限に集中し、レイガストをぶん投げた。投げたレイガストに一瞬青白い光が灯り、剣がもう一段階加速した。その剣は見事にコボルド王の手首を切り落とし、攻撃を止めることができた。

力尽きたコボルド王が倒れ、SAOの時と同じようにポリゴン状になって消えていった。するとコボルドの足元に蜘蛛みたいなトリオン兵がいた。

「なんだこいつ？セイ、とりあえずあんまり壊さないように倒して鬼怒田さんに持って帰ろう」

「分かった。バイパー」

セイはミリ単位にしたバイパーで蜘蛛(仮)を正確に射抜いて行動不能にした。

「ふう、無事か？メガネ君」

「あつ、はい！ありがとうございます！」

「とにかく早く病院に行こう。その足を直してもらわなければ」

「はい。ありがとうございます」

中学生なのに礼儀正しい子だな。俺の中学生の時とは大違いだ。

「じゃあ俺がおぶるよ。お前より俺の方が早そうだしな」

「へいへい。俺はどうせひ弱なネットゲーマーですよーだ」

「ログアウト」

俺たちは換装を解いて元の姿に戻った。そろそろトリオンが切れそうだったので、少しでもトリオンを回復させておくためだ。

「おい桐ヶ谷！赤司！応援に来たぞ！」

隣を見ると嵐山隊が駆けつけて来てくれていた。

「ああ、嵐山。もう大丈夫。倒したから」

「えっ？じゃあ残骸はどこにあるんだ？」

「まあそこらへんのこととは後々話すよ。多分近いうちに会議が開かれると思うから。あと、せっかく来たんならこの子を病院に連れて行ってくれるか？俺たちは今からアリスを連れて本部に行かなきゃだしな」

「そうか。まあお前が言うなら分かったよ。よし君、病院へ急ごう。結構重症みたいだしな」

「はい。ありがとうございます」

俺たちはメガネ君を引き渡してアリスへと合流してから本部へと歩いて行った。

その道中キリトはずっとあることを気にしていた。

（レイガストを投げたあの時・・・剣が光ったのは一体どういうことだ？）

コボルド王の最後の攻撃を止めた時、刀身が青白く光りさらなる加速を生み出した。それはまるでそう、本物のソードスキルのような。

（まさか・・・いや、そんなことないか）

キリトは気付いていなかった。自分が使っている力は本当の力には程遠いと。完成形に達した時の力は、あのヒースクリフにも匹敵するほどの力だと。

緊急対策会議

ここはボーダー本部会議室。ここに集まっているのはボーダーの中でも精鋭のA級隊員を束ねる隊長格の者と、ボーダー幹部の中でも城戸、忍田、そしてS級隊員の迅のみ。

「で、緊急会議とはどういうことだ？キリト」

A級1位太刀川隊長、太刀川慶。

「なんかこの前イレギュラー門が発生したとか言ってたから、そのことじゃないのか？」

A級3位冬島隊長、冬島慎次。

「そうでしょうね。太刀川、餅を食うな」

A級4位風間隊長、風間蒼也。

「まあまあ、いいじゃないですか風間くん。とにかく話を聞きましょう」

A級5位草壁隊長、草壁早紀。

「桐ヶ谷、イレギュラー門が開いているのなら住人に早く避難勧告を出した方がいいんじゃないのか？」

A級6位嵐山隊隊長、嵐山准。

「桐ヶ谷くん、この後私の新作食べに来ない？」

A級7位加古隊隊長、加古望。

「加古さん、会議中だぞ。口を慎め」

A級8位三輪隊隊長、三輪秀次。

「桐ヶ谷さん、嵐山さんの言う通りだと思います。被害はなるべく抑えたいです

から」

A級9位片桐隊隊長、片桐隆明。

「俺も嵐山の意見に賛成だ。被害が出てからでは遅い」

玉狛支部所属玉狛第一隊長、木崎レイジ。

「俺もだ。慎重すぎるのはいい判断とは言えない」

B級6位東隊隊長、東春秋。

「とりあえずみんな、キリトの話聞いてみようよ」

玉狛支部所属S級隊員、迅悠一。

「よし、みんな集まってるな。後加古さん、新作は遠慮しときます」

A級2位桐ヶ谷隊隊長、桐ヶ谷和人。

ここに集められた選りすぐりの精鋭たちが、皆キリトを真剣な眼差しで見ている

る。

「えーでは、今回の会議の司会進行を務めさせていただく、桐ヶ谷和人です。早速ですが、本題に入ろうと思います」

「だからイレギュラー門の事だろ？わざわざ会議なんて開かずに原因突き止めるか避難させるかした方がいいんじゃないのか？」

と、太刀川が言う。

「それだけなら簡単なんですけどね・・・今回の事は今までちよくちよく起きてきたこととは訳が違います」

「どういうことですか？」

と三輪が言う。

「今までこの三門市に出現してきたトリオン兵を思い出してみてるか？」

「今まで出現したトリオン兵？」

「そりゃ、バムスターとか、モールモッドとかだろ？」

「あとあれだ、バンダー」

「たまくにイルガーとか出てきたよな」

「そうそう、見つけたやつはその日一日運がいいとかいう噂流れたよな」

皆がそれぞれ思いつくトリオン兵を口に出す。ちなみにイルガーの噂を広めた

のはキリトだがその事は皆知らない。

「じゃあ、みんなそいつらに1対1で苦戦したこととかあるか？」

「いや？」

「全く」

「強いて言えばイルガーはちよつとキツイ」

「若い頃はあつたけどな」

ボードアの精鋭達はみんな口を揃えて同じようなことを言う。あと太刀川さん、あなたは顔は老けてるけどまだまだ若いぞ

「そうだろうな。そいつらに苦戦することなんて、ものすごい数で不意打ちされるぐらいの時しかない」

「じゃあ今回のイレギュラー門からは一度に大勢のトリオン兵が出てきたのか？」

「そういう訳じゃないんです、風間さん。今回の敵は数ではなく力。つまり圧倒的な力を持つ個体が出てきたということなんです」

「圧倒的ってどのぐらいですか？」

「そうだな片桐、俺が1対1で危うく、セイと2人でやつと倒せるくらいかな」
その場にいる全員の身体が固まる。そりやあボードア最強を誇るタッグがやつ

と倒せるレベルのトリオン兵が出たとあつては一大事だろう。

「えっ？ そんなに強いのか？ おいどんなのだつたんだよ教えろよキリ」黙れクソ脳筋」誰がクソ脳筋だよ風間さん！」

「太刀川さんうるさい話が進まない。まあでもその説明は今からするつもりです。そのトリオン兵はあるゲームの中に出て来る敵キャラ、ボスの存在がそのまま出てきた感じですよ」

「え？ そんな感じの印象のトリオン兵つてこと？」

「違うよ悠一。本当にゲームの中の奴が出てきたんだ」

「すまない桐ヶ谷。話が全く見えてこないんだが。なぜそんなトリオン兵が出て来るんだ？」

「俺には分かりません。ですが一つだけ分かるのは、俺たちが遭遇したのはまだ弱い方の個体で、これからどんどん強くなっていくと思われまます」

「で、ここからが本題です」

ゴクリと全員が唾を飲む。

「まず、セイにここに来てもらつて、全隊長にここでそのトリオン兵全75体及びその取り巻き達や中ボスクラスの戦い方、弱点を頭に叩き込んでもらいます。その間に、他の隊員にはイレギュラー門の原因を仕留めに行ってもらいます」

た。

「まあ、頑張れ」

キリトはこの人たちを元に戻すのは不可能だと思い、しれつと隊室に戻っていつ

半年間の軌跡

あれから6ヶ月経ち、あの会議の後、結局S A Oボスは一体も出てこなかった。まあ出てきた時は非番であろうがなんだろうが緊急出勤するって条件だったから良かったけど。こっからすつ飛ばしてもいいんだけど、流石に読者さんが怒りそうなので6ヶ月の間にあつたことを見ていこうと思う。

6月

コボルドが出現した月だ。あの小型トリオン兵はおよそ500体くらいしかおらず、3時間くらいで終わることができた。ちなみにみんなのモチベーションを上げるために俺が「討伐数一位の奴にはソロポイント+3000または俺と好きだけ個人ランク戦できる権利をやるう」と言ったら意外にも目を血走らせて狩りをしてた。数日後結果集計をしたところ見事討伐数一位を勝ち取ったのは小南で、もちろん個人ランク戦権を選んだ。そのあとすぐにブースへと連れていかれ、灰になるまで続けさせられた。

あ、あと俺がちよくちよく相手してた荒船と村上って奴がいるんだ。村上は『強化睡眠記憶』ってS Eの持ち主で、みるみる俺や荒船のテクニクを吸収していったん

だ。もう途中からは荒船も勝てなくなってきて、俺も10本中3本は取られるくらいになった。そのうちの荒船が狙撃手に転向するって言い出したんだ。その時はちようど村上が上に上がってきた頃で、村上が「俺がみんなより成長が早いから、みんな俺のせいで自分に自信をなくして辞めていくんだ。俺のせいで・・・」とか何とか抜かしてやがったから、1発デコピンしてやった。体術スキル込み込みのどでかい1発で。後から荒船に俺がさりげなく聞いてみたら、元々攻撃手でマスター級に到達したら他のに転向するつもりだったらしい。そこで荒船の野望についても聞かせてもらったが、なんともおぞましいものだった。パーフェクト万能手を量産とか・・・あの筋肉オバケが艦隊になったりしたら恐ろしいぞ。それを村上に教えてやったらめっちゃキラキラした笑顔に向けてお礼を言ってきた。でも結局「いつまでも桐ヶ谷さんのお世話になるわけにはいきません。それに弟子の三輪に嫉妬されちゃいますからね」とか爽やかな笑顔でバイバイ宣言してきた。まああいつも今回の一件で成長したってことだな。

7月

この月は最早思出したくない。だつてみんな俺たちだけ置いて海に慰安旅行なんて行くんだもの。悠一も悠一だろ!??なんでわざわざこの時期に提案するんだよ!??いやその日は一個も門が開かないってのは納得できたよ!??つかお前大学行かねえのかよ!??それでみんなもみんなだよ!??「おっいいねー行こうぜ!」じゃねーんだ

よ餅川！わざわざ全隊長と幹部集めて会議まで開いていつ行くかとか決めてさ？俺も割とウキウキで日程決めてたけどさ？忍田さんが「我々は残るが、一応もしものために一部隊は残しておいた方がいい」とか言い出してさ？俺が「じゃあどこが残る？」って言った瞬間みんな俺の方向いてきてさ？俺もまさかとは思って聞いてみたんだよ。「えっ？俺？」ってな。そしたらみんながみんな「試験控えてる桐ヶ谷達でいんじゃないか？」とか「幹部達残るんなら勉強も見てもらえるしさ！」とか言い出してもう俺らに決定になったんだよ。強制的に。だからみんながバカンスしてる間俺たちは本部ですつと勉強してた。しかも忍田さんと城戸さんが思いのほかスパルタで死ぬかと思っただけでもない。もう思い出したくない。

8月

この月はみんな泊まりで本部にいた。この月は異常にトリオン兵の発生率が多くて、隊員を総動員しないと倒しきれないレベルの数があったからだ。8月の泊まりは流石にキツかったけど、太刀川さんとか仲のいい人たちが部屋に遊びに来てトランプやったりして結構楽しかった。トリオン体だと暑さを感じることもなかったし。お盆には休暇をもらえて3人で旅行に海の旅館に旅行に行った。いろんな交流ができて、意外とこの6ヶ月で一番楽しい月だったかもしれない。

9月

この月は迷う月だった。ボーダーの仕事で色々と忙しくて編入試験の出願届けをすっかり忘れていた。とりあえず出したけれど、かなり迷った。俺はボーダー提携の嵐山と同じところに決めたけど、セイとアリスは国立の大きい大学に行くらしい。まあ二人なら学力も問題ないし、いつも貰ってる給料はしつかりこの時のために貯金していたし大丈夫だろ。あつ、そうそう入隊試験にあの時助けたメガネ君が来ていたんだ。結果はどうだったか知らないけど、多分俺たちに憧れてボーダー入ろうと思ったんだろうから、入って欲しい。ゆくゆくは俺の弟子にしたい。でも、こういう時に人を助けたって実感が湧くんだよな。

10月

正式入隊日のある月だ。その中を必死に目を凝らして探してみると、あのメガネ君の姿を発見した。あとで声をかけてみようと思っただけど、入隊早々声をかけるのも悪いと思っただけでやめることにした。早くB級に上がってきて欲しい。そんなことをしていたら、壇上に嵐山隊が出てきた。あいつら……毎回毎回大変だな。そんな感傷的になっっているうちに、対近界民戦闘訓練が始まった。俺がこつちの世界に来た時にやった入隊試験と同じやつだ。……あれ？俺たちがやった時と大分サイズが小さいな。まあいいか。今回の新人にはあんまりピンとくるやつがいなかった。せいぜい早くて1分切るくらいで、まあ緑川とか木虎が早すぎただけなんだけど。そうこうしてる間にメガネ君

の番が始まった。・・・あれ？おかしいな。目悪くなったかな？・・・いや、見間違いない。あいつ訓練用のバムスターに傷一つつけられてない。入隊できるほどのトロン量があったら傷をつけるくらいできるはずなのに。結局メガネ君は時間切れで終わってしまった。あまり納得できない結果だったが、入隊できたということはそれなりの実力を他に持っている」と結論づけてその場を去った。メガネ君のことは、これからも応援し続けようと心に決めて。

11月

この月はずっと勉強、勉強、勉強の月だった。編入試験が2ヶ月前に迫り、俺たちは中学2年生の秋からずっと勉強をしていなかったので、効率的かつ能率的な勉強法で復習をしまくっていた。もちろんスケジュールはセイの考案である。でもこれまでの学習のおかげで高卒認定は楽勝に取れるようになっていたので、セイには感謝しかない。瞑想スキルは結構な汎用性があって、集中力向上に使えるところがまた良かった。ずっと瞑想↓勉強↑エナジードリンクの繰り返しで精神的に疲れたが、入試範囲のほぼ9割を頭に叩き込むことができた。忍田さんや風間さん達が作ってくれた疑似模試では俺は7割、アリスが9割、セイが全問正解だった。恐らくセイは首席合格確実だろうな。

そして現在12月。編入試験まで残り数週間になった時、悠一が「そろそろお前

達にに面白いことが起こるよ」と意味深なことを言ってきた。詳しくは教えてくれなかったので、別に悪いことではないだろう。何かは分からないけど、俺たちは今は受験一色なので別になんだっていい。

でもこの出来事は、俺たちにとってどこるか三門市全体にも影響を及ぼす出来事になるとは、誰も、いや、悠一だけしか知らなかった。

邂逅編

○○凜花①

「遊真！急がないと遅刻するよ！」

三門市立第三中学校の制服に身を包んだ2人の中学生が道を走る。

「分かっているよ凜花」

と言いつつのんびりと歩く白髪の少年。

「分かっているじゃない！」

と白髪の少年を叱るのは腰まである髪をなびかせる茅色の髪の少女。

「転校初日に遅れるなんて、洒落にならないよ！」

「ふむ、それじゃあ急ぐとするか」

白髪の少年——遊真はそう言った途端、車並みのスピードで駆け抜けて行っ

た。

「遅いぞ凜花」

「ちよっ！遊真！待ちなさい！」

「全く、急げと言ったり待てと言ったり忙しいやつだな」

「そうじゃなくて！右！右！」

「右？」

そう言われて遊真が顔を右に向けると、そこには自分に向けて突撃してくる車が目に入った。

「うわあああああ!!!」

と叫び、遊真は車に跳ねられてしまった。

「大変だ！救急車！」

「警察にも通報だ！」

「ヒィー!!人をはねちゃった!どうしようどうしよう」

「おい大丈夫か!おい!おい!」

「……………跳ねられてしまったのだが、

「あーあ、やつちまった。運転手さん、車を壊して申し訳ない」

遊真はケロつとして立ち上がり、運転手に向かって深く頭を下げた。

「え!??い、いや、大丈夫なの?」

「大丈夫。ヘーキヘーキ」

遊真の体には大怪我はなく、それどころかかすり傷一つなかった。

「コラ!遊真!だから待ってって言ったでしょ!」

「げ、凜花。ごめんごめん。許してよ」

「全く・・・だいたいアンタはねえ」

と、凜花が遊真を叱りつけていると、時期に救急車と警察が到着してきた。

「車に跳ねられた少年というのはどちらですか？」

「はい、俺です」

遊真は自分から手を挙げて主張する。

「え？でも君は怪我なんてしてないじゃないか」

「いやいや、俺ですって周りの人にも確認してみたら？」

遊真が周りの人たちに視線を向けると、皆がうんうんと強く頷く。

「まあ、そういうわけだし、俺もう行っていい？」

「い、いや、まだにわかには信じられないが、とりあえず書類を作るので、名前と住所を教えてくださいませんか？」

遊真は肩にカバンを担ぎ直してから言った。

「空閑、空閑遊真です。住所・・・住所？」

『三門市麓台町8―5―1』

「三門市、麓台町、8―5―1」

「分かった。これからはくれぐれも気をつけるんだぞ」

「はーい」

「ご迷惑かけて申し訳ありませんでした」

と言つて、2人は駆け出していく。

「ほら、急ぐよ遊真！本当に遅刻しちゃう！」

『残念だがリンカ、既に25分の遅刻だ』

「ウソ!?じゃあなおさら急がなくなっちゃー！」

「そうだな。レプリカ?トリガー使つていい?」

『それを決めるのは私ではない。ユーマ自身だ』

「そっか、じゃあやめとく」

修side

僕の名前は三雲修。三門市立第三中学校に通う中学三年生だ。今日は朝から気分が悪い。同じクラスの不良たちがクラスメイトをいじめているのを見て助けたら文句を言われる。理不尽な世の中だ。

そんなことを思っていたら、先生が入ってきてHRが始まった。既に開始の時間から40分も過ぎてているが、そのあとはどうせ学活で転入生への質問時間だったので、別にそこまで問題はないだろう。

「はーい、皆んな静かに。転校生を紹介するわよ」

「おつ、きたきた!」

「先生! 男子? 女子?」

「静かにしなさい。今から入れるから。2人とも入ってきて」

先生がそういうと、男子と女子の2人が入ってきた。女子の方はともかく……なんだアレ……白髪? やっぱボーダー関係者なのか?

「それじゃあ2人とも、簡単な自己紹介をお願い」

「ふむ、じゃあ俺から。空閑遊真です。背は低いけど15歳です。遅れてしまつて申し訳ない」

「フフツ申し訳ないって」「いつの時代?」

教室に笑いが起きた。不思議なやつだな。

「じゃあ、次はボクだね。私の名前は○○凜花。遊真と同じく15歳です。凜花って呼んでください。ボクたちのせいで授業を削ってしまつて本当にごめんなさい!」

今度は教室で「可愛い」の声が飛び交った。あの子もボーダー関係者なのかな?

「先生! その空閑つてやつ指輪してまーす!」

「何?」

「空閑君、アクセサリーは禁止なのよ」

「先生に渡しなさい」

「・・・え？無理です」

「何？無理じゃない。渡しなさい」

「いやいや無理ですって」

「渡しなさい」

「ほんと無理です」

「この学校に通う以上、校則には従ってもらおう！」

「そつ、そんな！じゃあ学校は諦めます。お邪魔しました」

「ええ!?？」

あんな奴が指輪ごとくにあれだけ固執するなんて・・・なんかおかしいな。凜花もやれやれといった顔をしている。

「先生！何か特別な理由があるんじゃないでしょうか？」

「特別な理由？そうなのか」

空閑は指輪を一瞥して、「親の形見です」と言った。

それを聞いた不良グループが調子に乗って、漫画やらゲームやらを形見形見言
い出してきた。

「そんなでまかせを信じるわけないだろう！」

「本当です」

空閑は無言で先生を見つめ続けた。

「わ、分かった。先生、ちよつと」

「あつ、はい。じゃあ空閑君は三雲君の隣、凜花さんは三雲君の後ろね」

「分かりました」「了解した」

先生たちが教室から出て行き、2人が席へと近づいてきた。

「よろしく」

「よろしくね。さつきは遊真のフォローしてくれてありがとう」

「いや、僕は当然のことをしたまでだよ。こちらこそよろしく」

軽い挨拶を交わした後2人は自分の席に座った。

空閑が座って教科書を読んでいると、後ろの席の不良たちが紙を投げつけてき

た。

「これは一体どういうことだ？」

「挨拶だよ。日本式の」

「ほう、そうか挨拶か」

というと、空閑が紙を丸めだした・・・と思いきや、僕の横からものすごい速さで直径1cmくらいに丸めた紙が3つ飛んでいった。

「「いつでえ！」」

「忠告しといてあげる。遊真に手を出したら許さないから」

「なんだと！てめえ！」

不良グループの1人が手をあげようとした時、空閑がその手を止めて握り込む。

「俺も同じ。凜花に手を出したら俺が許さない」

やっぱり変な奴らだ。と思いながら僕は一部始終を見ていた。

キリトside

「・・・疲れた」

「わがまま言うなキリト。後1ヶ月なんだぞ編入試験は」

「そうですねよキリトさん。だいたいキリトさんのところはボーダー隊員は二次試

験ないんですからいいじゃないですか」

「まあそうだけどさあ・・・俺はお前らと違って頭の出来が違うんだよ」

「キリトさんも結構頭いい方だと思いますよ」

「それにそのセリフは頭いい奴が頭悪い奴に向かって言うセリフだ」

セイとアリスに総ツツコミを食らった。廃人ネットゲーマーに勉強なんて辛す

ぎんよお・・・

「それにしても悠一が言ってた面白いことって一体なんなんだろうな」

「そうだな。近いうちにと言っていたが、もうあの日から1週間経っているしな」
時計を見ると、今は12月10日3時。つてもう3時かよ。

「そういえば今日はイレギュラー門の発生回数多かったよな」

「ああ。確か今日は6個ぐらい開いてたな」

「まあ私たちはずっと基地にいたので出番なしでしたけどね」

「それを言うなよ・・・はあ、そろそろ陽の光を浴びたい」

そんな雑談をしているとウィイインと門発生の警告音がした。これが鳴るとい
うことは門が発生したのは警戒区域ということである。

『桐ヶ谷、出勤だ。受験勉強中だと思うが今駆けつけられるのはお前達だけだ。

頼む。』

『了解です忍田本部長』

「セイ、出勤だ。基地南西地区の端っこだったよ。急行するからグラスホッパー
使っていくぞ」

「了解」

「じゃあアリス、ちよつくら行ってきまーす」

「はーい」

そう言っただけで俺たちは窓から飛び降り、落下中にトリガーを構えて唱えた。

「リンクスタート」

俺たちの肉体がトリオン体へと換装されていく。そこから俺はグラスホッパーを起動して現場へと急行した。

修 side

「トリガー起動！レイガスト！」

僕は自分のトリガーを起動してバムスターに立ち向かう。バムスターの口元に斬りかかり、食われかけていた不良を話させる。

「早く逃げろ！」

バムスターから振り落とされた不良は、取り巻きを連れて逃げていった。怪我をしていたようだが取り巻きに連れていってもらったようだ。

「なんだ、メガネ君ボーダーだったのか」

『だがパワーが足りていない』

「うん。あれじゃあバムスターの装甲は突破できないよ」
バムスターに吹っ飛ばされ、壁に激突した。

「レプリカ、トリガー使っていない？」

『それを決めるのは私ではない。ユーマ自身だ』

「そっか、じゃあそうする。トリガー起動」

「じゃあ、ボクも。ーーーーー」

2人はバムスターに飛び出してきた。2人ともトリガーを使っている。

「バウンド！」

『心得た』

空閑が謎のトリガーで飛び上がった。その間に凜花は剣を持ってバムスターの足を斬り、行動不能にした。

「ブースト、二重！」

「せーのっ！」

空閑がバムスターを殴りつけると、バムスターの体は分解され、破片がそこら辺に落ちた。

「やったな凜花」「遊真もね」

2人を見ると呑気にハイタッチをしている。この2人がさつきみたいな凄いことをしたなんて信じられない。

「よう、無事か？メガネ君」

「・・・メガネ君じゃない。三雲修だ」

「ほう、修ね」

「コラ遊真。よくしてもらってるんだから名前ぐらい覚えとかなきゃダメじゃな

「い」

「お前たちもボーダーの人間だったのか」

「ん？ いや、俺たちはボーダーじゃないよ。俺たちは俺の親父がボーダーに知り合いがいるって言うから俺が死んだら日本に行けって言われたんだ。だからここにきた。」

「えっ、でもトリガーを持つてゐるってことはお前達とお前の親父さんもボーダーなんだろう？」

「いやいや違うって。ボーダーなのは俺の親父の知り合い。親父はボーダーじゃないって」

空閑の言つてゐることにますます頭が混乱してくる。

「だつてトリガーを持てるのはボーダーの人間だけだろ？」

「いやいや、それはこつちの世界の常識だろ？」

「え？」

「ボクたちは門の向こう側から来た」

「君たちの言うところの、近界民って奴だよ」

「どういふことだ．．．？空閑と凜花が．．．近界民？」

「その話、詳しく聞かせてもらおうか」

横からいきなり男の人の声が聞こえて来た。この声は……

「あれ？メガネ君じゃん。どしたの？」

僕の憧れの人だ。

キリト side

現場に到着すると、既に近界民は倒されていて、そこには3人の中学生がいた。まあ空からその内の2人がバムスターを倒していたのは見えていたのだが。問題はその後だ。この2人が近界民ということ。

「で、さっきのは一体どういうことだ？君たちが近界民って」

「なんでお前に話さなくちゃ」「ちよつと待つて遊真」凜花？

その凜花と呼ばれた少女は俺たちの前まで来て、自分のトリガーを見せてきた。

「……えつと、凜花さんだっけ。これは？」

「これは私の父から貰ったものです。何かあったらこれを持って日本へ行け。そしてある2人を探せ、と」

「それが俺たちつてことか？なにかの間違いじゃなくて？」

「はい。間違いありません。それは私のトリガーを見ればわかると思います」

「リンクスタート」

その掛け声とともに凜花さんはトリオン体へと換装していく。リンクスタート

の掛け声だけでも充分な驚きだったが、その後の姿を見て俺たちは更に驚愕した。

「バカな……………」

「その姿は……………」

全身を包む赤い鎧と、身長の3分の2ぐらいの大きな盾、そして鞘に収められた剣。その姿はまさに、血盟騎士団団長、《神聖剣》のヒースクリフ。

「申し遅れました。私の名前は茅場凜花。あなた達と戦い、敗れ去ったヒースクリフ、茅場晶彦の娘です」

茅場晶彦①

「茅場凜花……？」

俺たちは目の前の少女を凝視していた。そして次の瞬間光のような速さで得物を抜き放ち、少女の顔の前に突き出した。

「おい、凜花に何を「黙れ」……！」

セイが威圧で白髪の少年を黙らせた。そして俺は問う。

「君が茅場の子どもであるとはいえ、俺たちの前でその名前を出したってことは……」
「相応の覚悟があつてのことなんだろうな」

少女は俺たちの威圧に表情筋を全く動かさず言った。

「こうなることは重々承知の上でした。ですがこれだけはハッキリさせておきます」

「私、いえ、私たちはあなた達の敵ではありません。また、味方でもありません。今のところはの話ですが。あなた達が私の話を聞いてもなお、父を……茅場晶彦を憎むというのであれば私たちは容赦なくあなた達の敵となります」

少女は淡々と述べた。だがその言葉の一つ一つに悲しみの感情が込められていたように感じる。

俺たちはアイコンタクトをして殺気を消し、剣を下ろした。

「分かった。じゃあまずはその話とやらを聞かせてもらおうか。つと、その前に自己紹介だな。俺の名前は桐ヶ谷和人。こっちは相棒の赤司征十郎だ」

「赤司だ。よろしく頼む」

そうすると相手もさっきの冷たい感じを取っ払い明るい表情になった。

「じゃあこっちも自己紹介しなきゃですね！ボクは茅場凜花！まあさっき言ったけどね。歳は15！で、こっちがボクのいとこの空閑遊真！」

「どうも、空閑遊真です。背は低いけど15歳です」

二人ともさっきの殺気が嘘のような明るい声で言った。空閑に至っては目が三で口が3というよく分からない顔になっている。

「ぼつ、僕は三雲修です!!みっ三門市立第三中学校3年!とつ、歳は「わかったわかったとりあえず落ち着け三雲」あつ、すいません」

「じゃあとりあえず空閑と話そうか。君たち二人のことについてね」

「遊真って呼んでくれよ。キリト先輩?」

ニマツと笑って言う遊真に対して、俺もニマツと笑い返す。

「そうか。分かったよ遊真」

と言ったところでセイが尋ねる。

「まず、遊真たちが人型近界民というのは事実なのか？」

「うん。そうだよ。セイ先輩。嘘なんか言つてない」

「あの、一ついいでしょうか？」

三雲が手を挙げて尋ねてくる。

「なんだ？三雲」

「人型近界民と言つていますが、近界民というのはさつきみたいな化け物を言うんじゃないのですか？」

その質問に遊真が手をぶんぶん振つて答える。

「いやいや、全然違うよ。あれは捕獲用に作られたトリオン兵つて言つて、近界むこうにいるのは俺みたいな人間だよ」

「ボーダーで習うのはB級からだからな。知らなくても無理はない」

そこで俺が話を本題に戻す。

「で、お前は何で三門市みつちに来たんだ？さつきの戦いを見る限り、凜花の護衛つてわけじゃないみたいだし」

凜花は一人でも戦える戦闘力を持っているので、遊真の力を借りずともこの三門市でも生きていけると思つたので、遊真には何か別の理由があつて三門市に来たということ
を察した。

「俺がこっち側に来たのは親父の知り合いがボーダーにいるって言うてたからその人に会いに来たんだ」

「へえ、そうなのか。で、その人の名前は分かるか？」

「親父は、モガミソウイチって言うてたよ」

「モガミソウイチ……！セイ！」

「ああ、俺にも分かったよキリト」

その時の二人の脳裏にはある一人の人物の名前が浮かび上がっていた。『迅悠一』の名が。

「遊真。俺たちはその人については知らないけど、その人に詳しい人を知ってる。だからあとで一緒に会いに行こう」

「おお！ありがとう！キリト先輩！」

遊真がキラキラと目を輝かせている。子供の笑顔ってこんなにも眩しいのか。「じゃあ、ここからはボクの話ですね。遊真。ちよつと離れてて」

「三雲もだ」

その場から2人を離れさせる。この話は聞かれてはマズイものだからだ。

「……では、話に移らせていただきます」

先程と同じ雰囲気になった凜花の話が始まる前にセイが手で凜花を制した。

「ちよつと待った。一つ聞いておきたいんだがいいかな?」

「はい、なんでしようか」

「茅場はキリトのみではなく、俺たち2人を指定したのか?」

「はい、その通りです。父が言ったのは黒の剣士キリトこと桐ヶ谷和人さん。真紅の槍術士セイこと赤司征十郎さん。あなた達の名前です」

俺はセイの言うことに思わず?を浮かべる。

「何言ってるんだセイ。茅場を倒したのは俺たち2人だけ。生きているとするなら、俺だけ選ぶなんてことするわけないだろ」

するとセイはため息をついた。なんだよ。意味がわからん。

「バカかキリト。思いだせ。この世界のSAOのことを」

「この世界のSAO?・・・あつ、そうか。この世界ではお前たちは存在していなくて3人の中でSAOにいたのは俺しかいなかったんだよな」

「その通りだ。で、茅場が頼れと言ったのは俺たち2人だ。つまり?」

「・・・なるほど。つまり凜花の父親である茅場晶彦は俺たちの世界線の俺たちが戦ったヒースクリフってことだな」

「お見事。流石の思考力ですね。父から聞いていた通りです。これで説明の手間が少し省けました」

「では、お話しします。私の父、茅場晶彦のことを」

茅場晶彦②

「父は今から22年前、近界の戦地で目を覚ましました」

—————

「ここは……?」

茅場は身体を起こして辺りを見渡した。そして目の前に広がっているのは見たこともない材質でできた荒地だった。

「電脳世界へのデータインストールが成功したという事か」

自分の白衣を見て安堵の表情を浮かべた茅場はSAOで最早習慣となってしまうた探索をしようと立ち上がるとした。

「ん?なんだこれは、身体が重い……」

茅場の思う通りここが電脳世界ならば身体の自由などどうとでもなるはずだったが、いかんせん身体が重く足が身体を支えられなくなっていた。

「ということとは、ここは電脳世界ではないということか?」

訳がわからず、それならばなおさら探索をしなければと言う事を聞かない身体に鞭打って立ち上がり歩き始めた。

少し歩いた先の崖の下から爆撃が上がり、気になって崖まで駆け寄ると、そこには見たことのない光景が広がっていた。謎のバケモノの大群、謎の光る武器、光る弾丸。そしてそれを駆使して二つの軍勢が戦っている。

「これは・・・戦争？」

「お前、何者だ」

すると、背後から声が聞こえる。振り返ろうとすると喉元に剣を突きつけられ、動くことができない。

「もう一度言うぞ、お前何者だ」

(・・・日本語か。と言うことはここは日本か。だがそれならばさっきの光景はなんだ？日本が戦争を始めたのか？いや、ここはこいつの言うことに従っていた方がいいかもしれない。ここで死んでしまつては元も子もない)

「・・・私は茅場晶彦という者だ」

するとそいつは剣を遠ざけ、大きく息を吐いてから言った。

「やっぱ日本人か。なんでこんなところにいるんだ？」

茅場は振り返り自分を抑えた人物を見た。自分と同じくらいの年齢に鍛えられた身体。恐らく戦闘員の誰かだろうとここまで思考を巡らせてから質問に答える。

「気がついたらここにいて、ここがどこか分からないんだ」

「まあそんなところだと思つたよ。まあまずは俺たちのアジトへ案内するからついてきな」

「こちらもそうさせてもらえるとありがたい。ここの勝手はまだよく分からなくてね」

男は大きくため息をつき、茅場の方を向き直つて言った。

「あのなあ、もつと疑つたりしろよ。そんなんだとこつちじゃ生きてけないぜ」

茅場は笑いを返して言った。

「君からは敵意を感じない、なんてことを言うつもりはないが、いざとなれば私なら君を倒せると思つただけさ」

すると目の前の男はあつげらかんといった表情になつてからブフツと吹き出し、高笑いをはじめた。

「ハハハハハハ！そりゃいいーや！俺もそれなりに強いと自負していたつもりだが、お前みたいなヒョロヒョロに倒すと言われるとはな！」

「何、本当の話さ」

「じゃあいつか証明してみろよ。俺は空閑勇吾だ。よろしくな」

「ああ、よろしく」

—————

「それが父と勇吾さんの出会いでした」

「なるほど。それが空閑のお父さんってわけか」

「はい。そういうことです」

「ん？その勇吾さんは近界民ではなく日本人なのか？」

「その通りです。勇吾さんは当時のボーダー、今で言う旧ボーダーを設立した1人であり、それを終えた後に近界へと渡って来て旅をするようになったのです」

「へえ、そうなのか。でも、茅場のやつよくあんな大ボラ吹いたよな」

「ああ。いくら茅場でもそんな歴戦の強者に現実で勝てるわけないのにな」

「勝ちましたよ？」

「え？」

声を出したのはキリトだけが、セイも同じ顔をしている。

「父は本当に勇吾さんに勝ってしまったんです」

「マジか」

「本当にあの男はどこまでも規格外だな」

3人揃って苦笑した。

「そこから2人は共に近界の戦地を巡り、そこで手を貸し、生き抜いてきました」

「なるほど、正にポ○モンみたいに旅をしていたわけか」

「ポケ○ンは流石に自重しろアホキリト」

「そして出会いから5年が経った頃、立ち寄った国である双子の女性に出会いました。私たちの母親にあたる人物です」

「なあアツキー、今つて俺たちどの辺にいるんだ？」

惑星と惑星を繋ぐ門を潜り抜けた先で勇吾がそう尋ねる。茅場は地図トリガーを起動して答えた。

「今は大体キオンとレオフアリオの間くらいだな。2年くらいはどっちも軌道が近づく事はないからしばらくここに滞在だな」

「そうか。まあ最近戦い続きで息抜きなんてできなかつたし、たまには惑星一周食べ歩きでもやろうぜ！」

「それは休んでいるのか？」

ははははと笑いながら渡航船を降りて歩いていると、一つの酒場に着いた。

「へい！らっしやい！テキトーな席に着いてくれや！」

二人が国に着いた後には必ずやる事があつた。そのためにまず探すべき人がいた。二人は席を見渡し、その条件に当てはまりそうな人物を探した。

「おい空閑、あいつはどうだ？」

茅場の目線の先には鼻の下と顎にヒゲがマリモの様にまとわりついた太り目のオヤ

ジだった。

「おついいねえ。あいつならいいカモになりそうだ」

二人はその席に近づき、「相席いいか？」と尋ねて了承を得て座った。

「おつちゃん！酒二つ頼む！」

「悪いなオヤジ、俺たちここに来たばかりで心細いんだ」

そのオヤジは胸をドーンと叩いて答えた。

「そうなのか。そう言う事なら俺に任せてくれ！この国に生まれてこの国で育ち、この国の為には戦って来た！俺に知らねえ事はねえぜ？」

「ハハツ、それは頼もしいな」

そこにビールの様なものが二つ運ばれて来て、空閑がそれをゴキユツゴキユツと飲み干してから言った。

「じゃあオヤジ、一つ聞きたいんだけどよ」

「おう！何でも聞きやがれ！」

「この国での戦争するのはどこで行われてんだ？」

その瞬間酒を飲んでいたオヤジの手がピタツと止まる。

「・・・悪いが、それは教えられねえな」

「だろうな。俺たちが敵国のスパイである可能性だつて捨てられる訳じゃないしな」

「そういうこつた。まあそれ以外なら何でも聞いてくれて構わねえぜ？」

「じゃあ、美味しい店を教えてください」

「おう、任せろ！　面白いや自己紹介がまだだったな。俺の名前はグルビだ。よろしくな
！」

ニカツと笑つて両手を差し出して来た。二人は一つずつ手をガツシリと掴んで握手をした。

「俺は茅場晶彦だ」「俺は空閑勇吾！　よろしく！」

その後三人は町の美味しい飯屋を巡り、朝まで飲み明かした。

「いやー飲んだなあ！」

「ああ！」

「おい、飲み過ぎだぞ空閑」

「いいじゃねえか！　お前が飲まなすぎなんだよアツキー！」

「グルビ、お前までアツキーと呼ぶのはやめろ」

三人で肩を組みながら（と言っても二人の体を茅場が支えているだけだが）歩いてい
ると、向こう側から二人の若い女性がこちらに走ってくるのが見えた。

「グルビ兄！　何やってんの？！」

「おお！　アルミナにネオンじゃねえか！　なんでここに！」

「なんでじゃないわよバカ兄貴。アンタが帰らないから迎えに来てあげたんでしょ」

「ああ、あなた方がグルビが話していた妹さん達ですわね」

「はい。私はアルミナと申します」「私はネオンです。バカ兄貴がご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、そんなことありませんよ。ご丁寧にも。私は茅場晶彦と申します」

「俺は空閑勇吾だあ！よろしくなあ！」

「では、ここで。兄を見ていてくれてありがとうございました。ほら、帰るよグルビ兄
！」

「おう！そうか！じゃあここでお別れだな！じゃあなユーゴー！アツキー！」

「ああ、妹さん達を大事にしろよ」

「とまあこんな感じで母達とは出会いました」

「な、なんか雑だな」（読者の代弁）

「まあ、所詮思ひ出ですし。この後はグルビおじさまが父と勇吾さんを気に入って、父がアルミナ母様と、勇吾さんがネオンさんとイチャイチャして結婚するだけなので、端折ってもいいですよわね？」

「是非端折ってください」

「じゃあ、ここからは私たちが生まれる直前の話です。あの日から約2年後、父と勇吾さんは技術面、戦闘面で国を更なるところまで高める働きをして、国の英雄と呼ばれるようになった」

「え？スパイ云々は？」

「私も聞いて見たのですが、勇吾さんが『男は一晩酒を飲めばそんなの取っ払えるんだ』って言ってました」

「ああ・・・近界でもそういうアレあるんだな」

—————

「よし、アツキー。出来たぞ！」

「ああ、ようやく完成だな」

汗だくの二人の前にあるのは黒い炊飯器のようなものに耳が生えた物体だ。

「よし、お前の名前はなんだ？」

『私はレプリカ。自立型トリオン兵だ』

「俺たちがこれまで行つた国を順番に言ってみてくれ」

『二人が合流してからならハイドラジェン、カーバン、ナイドラジェン、(中略)、サルファー、そしてクローリーンド』

「684297×3674985÷742835×2479524∥？」

『思考中・・・8394139164545。8016652だ』

「宙に浮いて俺たちの周りを飛び回ってくれ」

『了解だ』

レプリカが二人の周りを何周も時にあらぬ角度で旋回して飛び回り、勇吾の頭の上に着地する。

「ラグなし、インプットデータの算出時間ほぼ0秒、正答率100%、思考中の最高タイムラグ3.89秒、空中での動き方にも問題なし」

「問題なしだな」

「よし、完成だ！」

二人が開発機械の前でガツシと握手すると、開発室のドアが開き、二人の女性が入ってきた。

「晶彦さん！ご飯ですよ！」「勇吾さんもあんまり根詰めすぎない方がいいわよ」

「ああ、アルミナ」「おう！今行くぜネオン！」

勇吾たちの方に目を向けたネオンが、あるものに気付いた。

「ねえ勇吾さん、それは？」

「ああ、俺たちが今まで10年以上に渡って開発してきた俺たちのナビゲーターだ」

『はじめましてアルミナ、ネオン。私はレプリカ。自立型トリオン兵だ』

「どうだ！ 上げえだろお！ ．．． っでどうした？ 二人とも黙りこくって」

二人は声を発さず肩をプルプル震わせていた。何か気に触ることでもあったかとお安になつてゐると．．．

「か」

「か？」

「かわいい〜!!」

「へ？」

なんか二人が言うには女の子はこういうのがいくつになつてもこういうのが好きなんだそうだ。

「あ〜二人とも？ 俺たちお腹空いたんだけど．．．」

「あつ！ ゴメンゴメン！ すぐご飯にするからね！」

「二人とも身体を大事にするんだぞ。無理をしたらお腹の子にも悪いからな」

「大丈夫だよ！ 晶彦さん達も体大事にね！ 最近完成間近だつて徹夜ばかりだったし！」

「本当だよ。二人も頑張つてるのに私たちが頑張らないわけにはいかないつて」

それから四人は仲良くご飯を食べて、茅場と勇吾の二人は仕事に出かけて行った。

「行つてきます」

「いつてらつしやい」「気をつけてね」

ギイイイイイバタン

「……ふう、なんとかババらずに済んだな」

「ああ、妊娠10ヶ月の二人に今日が戦場に行く日なんて言ったら絶対精神的に強張つて子どもが危ないからな」

「ほんじゃそろそろ行くか」

「ああ、転移、アジト」

茅場の目の前に門が出現し、二人はその門を潜った。

「おう！来たな！アツキー、ユーゴ！」

「ああ。来ないわけがないだろう」

「で？今回の戦場は俺たちの家があるとこの裏つかわのところでよな？」

「おう、そうだ。今回も軍勢が多いからな。期待してるぜ英雄殿？」

「やめてくれ。それより早く行こう。これが俺たちのこの国での最期の戦いになるんだからな」

そういうとグルビの顔が曇り、茅場達に疑問をぶつけた。

「なあ、お前から本当に行つちまうのか？」

「ああ、これを逃したら今度はいつになるか分からないからな。大丈夫だ。お前らと戦

うことになるようなところには行かないよ」

「そうか。いや、愚問だったな。そんなことは本当はどうでも良かったんだ。二人とも妹達とその子供たちを苦しませたら承知しねえぜ？」

「大丈夫。ここにもちよくちよく顔見せに戻るよ」

「おーい！ゲルビ！カヤバさん！ユーゴさん！そろそろ出るってよ！」

「分かった今行くよ！ほんじゃそろそろ敵落としたな」

「じゃあ行くか」

そう言ってクロリーンの戦闘隊は門を潜って敵の撃退に向かった。

茅場晶彦③

「では、今回の作戦の確認をしよう」

半径5mほどのある円卓に茅場、勇吾、グルビ、茅場の丁度向かいにこの作戦の隊長、そしてそれぞれの隊の隊長を務める者が座り、その周りに他の兵が各隊の隊長の元に集い皆が茅場の話に耳を傾けていた。

「まずは変装トリガーで敵になりました私と空閑が両サイドから敵を切り崩す。その後は真ん中の部隊が両サイドに分かれたらそのままこちらの部隊が突撃。少なくとも敵は一部隊は確実に両サイドに寄越す筈だ。その分けた隊の数に応じてこちらの部隊も投入。足止めしてる間に残りの部隊は敵の本軍に突撃して出来るなら潰せ。出来なくても出来るだけ本軍を掻き乱せ。短期決戦、臨機応変に、迅速に、作戦に忠実に行こう」

「カヤバ、そのことについて聞きたいことがあるんだがいいか？」

手を挙げて主張したのはグルビ達の父であり今作戦の隊長を務めるラドイである。

この者は最初は茅場と勇吾を娘達を誑かした輩と全く信用せず挙げ句の果てには濡れ衣を着せるまでのことをした人物だが、グルビの過剰なまでの信頼とアルミナ達の自然

な笑顔を見る事で少しづつ認める様になり、今では二人を理解し、誰よりも信頼する人物である。だが今回の作戦には疑問を持ってしている様だ。

「ラドイさん、何かあるか？」

「その二人が両サイドから切り崩すというのにはもう少し人員を割いた方がいいんじゃないのか？ その方が気付かれる前にも気付かれた後にも多くの敵を落とすことが出来る。何より気付かれた後のお前らの負担が大きすぎるんだ。いくらお前らだってサイドの敵を全員相手にするのは荷が重いだろう。もしもの事があつたら私はアルミナ達にどう顔向けすれば「まあまあ落ち着けてラドイさん」ユーゴ・・・」

ヒートアップして話を進めるラドイを止めたのはいつのまにかラドイの席の後ろまで来て背中を勢いよくバンバンと叩いた勇吾であつた。

「俺たちの事なら心配ねーよ。いざとなつたら門トリガーでアジトまで逃げ帰るからよ。まあもしそうなつたら戦線復帰はできねえからその時は頼んだぜ！」

「勇吾の言う通りだ。大体、これは潜入作戦だからな。五人や六人で行つたら明らかに数がおかしくなつて怪しまれる。これは一人ずつで行かないと意味がないんだ」

二人がそういうとラドイは納得したような不満なような顔で「分かった」と頷いた。

「じゃあ、作戦は以上だ。ここを守りきればもう接近期間内攻められる事もない。相手をよく見て、最後まで全力で戦い抜くぞ！」

『おおー！！！！』

そうして作戦の確認は終了し、作戦開始まで自由行動となった。船の中の大部屋でコーヒーを飲んでいる茅場と勇吾にグルビが近づいてきて言った。

「いやあ、いつ見てもお前らの統率力には驚かされるよ」

「そんな事ないさ。私なんてまだまだ未熟だよ。前にいたところではこういう事はパートナーに任せつきりだったからな」

「はあ!?」

そう言った茅場にグルビが驚きの表情と驚愕の声を同時に出す。

「パ、パートナーって、ユーゴが?」

「違うよ。空閑は確かに私の大事なパートナーだが、私が言ってるのはもう少し前の話や」

「そ、そうか。そうだよな」

グルビがさっきのラドイとは対照的に物凄い納得の表情を見せる。

「じゃあアッキー聞かせてくれよ。俺の前のパートナーの話をさ」

茅場は時計に目を向けて時間が充分にある事を確認してからフツと笑って言った。

「・・・まあ、いいだろう」

それから茅場はアインクラッドでの日々を包み隠さず全て話した。強力なボスモン

スターを前にしても全く挫けずに解放の為に戦った者、大切な人を守る為に戦った者、アスナやキリト、クラインやエギルにアルゴやアリス。あの世界ではプレイヤー全員が輝いていたと話している中で再確認した。

「なんか・・・いい話だな」

「ああ・・・そうだな」

そんな儂げな表情を浮かべる二人に向かって照れ隠しのように「時間だ」と言つて茅場は立ち上がった。すぐ隣に二人が付いてきて、船の入口へと向かった。

「じゃあ、ここからは別行動だな」

「ああ、生きろよユーゴ、アツキー」

—————

「というのが最後の会話だったそうです」

「え？死んだの？」

「いや、生きてますみんな」

「紛らわしい言い方すんなよ・・・」

「じゃあここからは回想なしで行きますね。その方が早いですし」

「お、おう」

「二人は難なく潜入をやつてのけて、完璧に場の制圧に成功したんです。でも・・・」

「なんだ？」

「その後の記憶が、父にはないそうなんです」

キリトは驚愕をあらわにした。なぜならここからとても面白くなりそうだったのに作者の頭の悪さのせいで先が分からなくなってしまうただのだから。

「まあ作者の技量不足はそうなんです、記憶がないというのは別の理由があるんです」

「そうなのか？」

「あの時父は、何者かに攫われたと言っていました。その攫われた時からの記憶がなく、目が覚めた時には病院にいて、勝利報告と共に私たちが生まれました」

「そして私は幼少期の頃からその話を叩き込まれてきました。何故だと思えますか？」

「そりゃあ、真相を突きとめろって事だろ？」

凜花は首を振り、また向き直って言った。

「少し違います。真相を突き止めるのは確かに目的の一つですが、もう一つはこの話を貴方達に少しの間違いもなく伝える為です」

「それだ。ヒースクリフ・・・茅場はなぜ、俺たちがこの世界にいると分かったんだ？あいつがいたのが近界なら、すぐに俺たちのいた世界とは違うと気付いたはずだ。そんな状況で茅場が情報収集を怠る訳がない。空閑の親父さんとちよくちよくボーダーの様子を見に地球に戻って来ていたなら、この世界に俺たちがいないことぐらい分かってた

だろう」

「それについて聞かれたら、こう答えると言われてきました。これは遊真や勇吾さん、母や叔母様ですら知らない、私だけが知っていることです」

『私は亡くなった記憶の中で、ただ一つだけ覚えている事がある。それは、不思議な格好をした女……まるでゲームの様な格好をした女が言っていた言葉だ。その女は、こう言っていた。「剣士キリト、槍術士セイ。白き塔を昇りし先で貴方達の世界が貴方達を待っています」と』

「は？白き塔？なんだそりゃ」

「やはり……貴方方もご存知ないのですね」

「ああ。さっぱり分からん」

「だが、一つだけ分かる事があるな」

「ああ」

二人は顔を見合わせて言った。

「「そいつは俺たちの事を知っている人間で、白き塔を昇った先に俺たちの帰る場所がある」」

「という事は」「俺たちは利害の一致関係にあるって訳だ」

キリトはニカッと、セイはいつもの爽やかスマイルで凜花に手を差し伸べた。

「別にお前を100%信用した訳じゃないぜ」「俺たちは元の世界に帰る。その過程で茅場を救い出す」

「絶対に茅場は救い出してやる」

すると凜花は俯き、涙を流した。聞くと、茅場が居なくなつてから皆が自分を茅場と比べる様になり、中には茅場というストッパーがいなくなりその美貌から凜花のことをそういう目で見てくる輩が少なくなかつたらしい。その事からいつしか人を信じる事が出来なくなつてしまつた様なのだ。

「ボクも・・・人を大切にして・・・誰かに大切にされて・・・いいんだね・・・」

「当たり前だ。お前みたいなお前を大切にしないなんて、あつちやいけない事なんだよ」
「立ち振る舞いは大人でも、心はまだまだ子供だからな」

ひとしきり泣いた後、凜花が「見苦しいところをお見せしました」と言つて立ち上がり、キリト達も立ち上がつてみんなで基地に向かつた。

「そういえば、茅場が居なくなつた経緯とかはどうなんだ？」

「その事についてはまたいつか話します。私の独断で話す事は出来ないのです」
「そうか」

この時は、何か訳ありなんだろうと深く追求する気は起きなかつた。

(アリスやアルゴならここで無理やり引つ張り出すんだらうな・・・)

などと思いながらキリト達は玉狛へと向かった。まさかあんなトラブルが起きるとは思っ
てなかったが。

玉狛支部①

という訳で玉狛に着きましたハイ。いや道中クツソ大変だったんだけど。俺らって知名度高かったんだな。まあコボルド事件以来大抵イレギュラー門の処理俺らだったし民間人の目にも止まったんだらうけどさ。多いわ！しかも凜花も俺たちがいない間にナンパされてるし。てか中学生ナンパする相手がゴミなのか、中学生でナンパされる凜花が凄いのか、どっちだろうか。いやまあ確かにアスナとかアリスとかと同レベルの美人さんではあるけども。ちなみに三雲は親が心配しそうだから返した。

「おいイキリト。何無駄な思考シーンで文字稼ぎしてるんだ。さっさと入るぞ」
「いが一個多いんだよ」

メタい会話をしながら玉狛の門を潜り、「お邪魔しまーす」と一言声をかけるとリビンのドアを開けた先からエプロン姿の落ち着いた筋肉ことパーフェクトゴリゴリマツチヨの木崎レイジさんがやってきた。

「お前今俺のことバカにしただろ。まあいい、迅から話は聞いている。お前ら晩飯まだだろ？食ってけ」

「ありがとうございます。レイジさん。（相変わらずのエスパーっぷりだことで）」

「おお、レイジさんか。よろしく」

「お前たちが迅の言っていた二人か。俺は木崎レイジだ。よろしく」

「ご丁寧にも。俺は空閑遊真だよ」

「ボクは茅場凜花です。よろしく！」

簡単な挨拶を交わしてからリビングへと向かうと、何やらいい匂いがしてきた。

「おお、今夜はカレーですね？」

「大正解だ。小南がたっぷり作っていったからたらふく食ってくれ」

「あれ？　そういうや小南達は？　とりまるもないし」

「今ウチの風呂が壊れててな。小南と宇佐見は近くの銭湯に行ってる。烏丸はバイトだ。どっちももうすぐ帰るだろう」

「へー、本当頑張るよなアイツ・・・今度飯奢ってやる」

とりまるは五人兄弟の大家族で、長男のとりまるが家計を支えているらしくボーダーの仕事の他にスーパーや新聞配達達のバイトを掛け持ちしていて、お金を稼いでいるらしい。

「じゃあ悠一は？」

「アイツは屋上だろう。話すなら上行って話した方がいい。聞かれない事なんだろう？」

「はい。ありがとうございます。まあでもレイジさんなら大丈夫だと思いますけど」

「いや、いい。俺は食器の片付けがあるからな」

「何から何まですいません」

腹が減っていた俺たちはカレーを僅か5分で食い終わり、四人で悠一のいる屋上に向かった。

「おーい悠一」

「おつ、キリトにセイ。待ってたよ」

「どうせ来ていたのには気づいてたんだろう？中に入っててくれたら良かったのに。ここじゃあ寒いじゃないか」

「まあまあ桐ヶ谷隊長殿。赤司指揮官殿もいいじゃねえか。万が一聞かれてもしたら面倒だしな」

後ろから扉のバタンツと閉まる音が聞こえて、聞き覚えのある優しい声が聞こえる。ゆっくりと振り返って一応対象を確認してから挨拶をする。

「林道支部長。ご無沙汰しています」

「おうおう、そんなに固くなんなや。それで？そっちが例の人型近界民か」

「はい。こっちの白髪の方が空閑遊真、こっちの美少女が茅場凜花です」

その瞬間、林道支部長の目の色が変わり、ありえないものを見るような目で遊真達を

見つめた。

「空閑……？それに茅場だと……？」

「まあまあボス、落ちついて。てことは君たちはあの空閑勇吾さんと茅場晶彦さんの子どもって事でいいんだな？」

「うん（はい）」

「で、でも、あの人たちがちよくちよくこつちの様子見に来た時にもお前らはいなかったよな」

という林道支部長の少々呂律の回っていない言葉に落ち着いた表情の凜花が答える。

「えっと、それは勇吾さんが「アイツらっていうか特に林道は絶対嫌味言ってくるからな。アンタより結婚するのが遅くてしかもこどもまで作ってるなんてって言うだろうから」って言ってました」

「あく言うわ」

「おい迅ん！お前どつちの味方だよ！」

なるほど。つまり林道支部長は「自分の知り合いの子ども」という部分に驚いているのではなく、「自分より先に結婚して子どもまで作った」という事について驚いていたんだな。

「あの一ついい？」

「あ、ああ。話の腰折ってすまなかったな。なんだ？」

「モガミソウイチって人知ってる？」

その瞬間二人の表情が一気に暗くなった。やっぱり旧ボーダー組は何か知ってるみたいだ。

「悪い桐ヶ谷、赤司、ちよつと外してくれるか？」

「はい、分かりました」

林道支部長のさつきとはまるで違う雰囲気から俺たちが踏み込んではいけない領域だと悟り、すぐに屋上から出た。

「最上さんに何があったのかな・・・」

「きつと俺たちには話せない、何か特殊な事情があるんだよ・・・って凜花？なんでここに？」

「あの話は勇吾さんとお父さんが出会う前の話なので、ボクは多分関係ないと思う。だからその間にキリトさんとセイさんにSAOの思い出話でも聞こうかと思って♪」

「そうか・・・分かった。俺たちが知っている限りの茅場の事をはなすよ」

「いや、そうじゃなくて」

「じゃあ、なんだ？」

「キリトさん達の話をしてよ。そっちの方が面白そう♪」

無邪気な笑顔に、心を奪われそうになった。いやロリコンとかこういう方向の話ではなくて。

「よし分かった。長くなるけどいいか？」

「うん。多分あつちも長いから」

割愛。リクエストあつたら番外編とかでアインクラッドやる。

「へえ〜・・・お父さん悪趣味だったんだね」

「ああ。本当に殺したくなるくらいに悪趣味だったよ」

「お前の場合マジで殺すだろ」

「アハハハハハ！」

凜花の顔はもうすっかり警戒が抜けていた。俺たちも凜花も表向きは楽しくしていたが、警戒は全く怠らなかった。ずっと何か不審な挙動を起こせばすぐに剣を抜けるよう身構えていた。でも、もう違う。凜花からは茅場の雰囲気は滲み出ている。最初は俺たちと戦った時のヒースクリフそのものだった。だが、いまの凜花からはラーメンについて延々と語っている時のヒースクリフと同じ、そして別の何かの元気な明るい太陽のような雰囲気伝わってくる。

「お、何だ？俺も混ぜてくれよ」

「ああ遊真。話終わったのか？」

扉からヌツと出てきた遊真に対して尋ねる。

「うん。林道支部長と迅さんはまだ話してるよ。親父を生き返らせる方法はこつちにも無いってさ。あとは凜花の手伝いをするだけだ」

「そうなのか・・・やっぱりこつちの世界でもそう言う技術はないんだな・・・」

「ん？キリト先輩も近界民なのか？」

遊真には流石に異世界の事をバラすわけにはいかないもので、何とかしてごまかそうと考えたが、その間にセイが答えた。

「いや、地球では世界って言うのは一つ一つの国の事なんだ。ほら、日本全国とか言うだろ？」

「なるほど。そういうことか。日本語は難しいな」

相変わらずのトーク技術に圧巻しながら「サンキュ」と礼を言って立ち上がり、

「そういうことだ。じゃあ悪いけど今日はここに泊まってくれるか？俺たちは今から本部に戻るけど、万が一俺たちの知らないところでボーダーの人間に見つかったら大変だからな」

「ここもボーダーだけいいの？」

「ここは近界民どんとこい集団だから大丈夫だよ」

「ほほう。じゃあお邪魔しようかな」

「分かったよキリトさん。じゃあとりあえずレイジさんに挨拶に行こう」

「ああ。じゃあ明日また来るよ」

その会話を最後に俺たちは玉狛を去った。

「さて、早く帰らないとアリスにどやされるな」

「まあ既に遅いと思うけどね」

その頃本部では……

「その話は本当だな？」

「はい。近界民発生地付近の警戒区域にいた中学生グループによると、C級隊員の三雲という人物が関わっているとのことですよ」

「これは明らかにC級の技ではないでしょう。三雲くんの今までの訓練を見てみましたが、とてもあんな芸当ができる技術はありません」

「いや、分からんぞ。手を抜いているだけかも知れん」

「だが、トリオン能力が乏しい彼が、こんな事をできるはずがないだろう。第一このトリガー反応はボーダーのどのものとも違う」

「恐らく彼は近界民と何らかの関係を持っていると思われまます」

ボーダーの最高幹部達が口々に自分の意見を言い合う。その中でも最高である司令に位置する城戸が言った。

「三雲とやらを明日会議室に呼べ。桐ヶ谷隊も一緒にな」

修、遊真と凜花、キリトとセイの道が、この出会いから交差し、強く結びついた。これから始まるのは、本来生まれる事の無かった世界の話。

桐ヶ谷和人①

俺たちは朝一で飯も食わずに玉狛に向かっていった。一刻も早く二人の安全を確かめなければ気が済まないからだ。ちなみに現在時刻は6時である。本部からはかなり遠いのでバスか電車に乗りたいたいところだが、あいにく俺たちにそんな財力はない。

「それにしてもキリト。朝食を食べなくて良かったのか。お前いつも食わない日は調子悪いだろ。疲れた、飽きた」

単語の問題を出しながらセイが言った。

「大丈夫だって。最悪どつかのコンビニでおにぎり買えばいいし、できれば昨日のカレーをたかるから。weary」

「全くお前は・・・がめついな」

「人聞きの悪いこと言うな。単なる節約術だよ」

「人のところの朝食をたかることは節約とは言わないぞ」

軽口を叩き合いながら時々問題を出したりして歩いていると、じきに到着した。インターホンを鳴らすと「はい今開けまーす」という声が聞こえたので、少し待って鍵が開いたのを確認してから扉を開けた。

「お邪魔しまゝす」

と言いながら中に入ると、ちようどエプロン姿で鍵を開けたと思われる小南がいた。

「あらキリト、赤司さん。どうしたのよこんな朝っぱらから」

「だからなんでお前は俺だけ呼び捨てなんだよ・・・」

「赤司さんは尊敬できる先輩だけドアンタはただの戦闘厨だから敬う気が起きないのよ」

相変わらずの生意気な後輩にため息をついてからここにきた目的を思い出し、その行方を尋ねた。

「あーはいはいそうですね。遊真と凜花起きてるか?」

「起きてるわよ。凜花はアタシと一緒に朝ごはんの手伝いしてるわ。遊真は外で雷神丸体操してる」

雷神丸体操とは一体何なのだろうか・・・と考えかけたが、別にどうでもいい事なので思考を移す。後で聞いてみようところっそり思ったのは秘密だ。

「そうか。なあ小南、なんか食えるものないか?俺飯食わずに来たから腹ペコでさ」

「はあ。そんな事だろうと思つたわよ。今ご飯炊きたてだから鮭も焼いてあげるわ。赤司さんもどうですか?」

「ああ、折角だからいただこうか」

というわけですと玄関で話してるのも何なのでリビングまで入れてもらった。すると台所には味噌汁の味見をしている凧花がいた。

「あつ、キリトさん、セイさん。おはよう」

「おはよう凧花。お前も手伝ってるんだってな」

「うん。泊めてもらったのに何もしないのはいけないと思つて」

「アンタ中学生にも敬語使われてないのね……。凧花。その塩取つてくれない？」

「はい。どうぞ」

「ありがとう」

なんかこうして見ると姉妹にしか見えないな。テーブルで出来上がるのを待つっていると、ベランダの扉から遊真が出てきた。

「ふう。気持ちいい朝だな。お、キリト先輩、セイ先輩。おはようございます」

「おう、おはよう」

「おはよう」

「随分と早いんだな。登校ギリギリくらいだと思つてたぞ」

「いや、お前らが無事かを確かめないと気が済まなくてさ」

そつうとうと遊真は口を³にして首を傾げて尋ねた。

「ここなら安全だつて言ったのはキリト先輩じゃないのか？」

「いや、そういう意味では安全なんだけどき、違う意味で危ない奴がいるからさ……」
と言つて横目でチラツツと小南の方を見るとあつちも視線に気付いたようで、ニコツと怪しげな笑みを浮かべると

「凜花、その砂糖取つてくれる？」

「ああー！タンマタンマ！冗談だから！ジョークだからあー！凜花も取るんじゃない！」
俺の無様な姿を見てセイは大きいため息を吐いた。

「全く、バカな奴だアイツは」

「おお、相棒からも辛口コメントですな」

「俺たちはそんなもんだよ」

無事に鮭を塩で焼いてもらう事に成功した俺は凜花と遊真と小南を含めた五人で朝食を取つた。小南が作った鮭の塩焼きも美味かつたが、なんと行つても凜花の作った味噌汁が絶品だった。今まで食べたことのないような旨味が出ていて、どうやったらこの旨味が出るのかと小南が問い詰めていた。

「じゃあ行つてくるよ小南先輩」

「行つてらっしゃい。気をつけてね」

「ほんとお前お姉ちゃんみたいだな」

「アンタはどうなつてもいいわよ。てかどうにかなれ」

「ひどいな……」

辛辣なコメントを受けながらも扉を開けて三雲が待っているであろう公園まで向かった。

そこまで到着するとカラツカラに干からびて三雲がベンチで死にかけていた。

「お、おい！三雲！どうしたんだ！」

「あ、ああ、きりがや、せん、ぱい……み、みず……」

「あ、ああ！待ってろ！セイ！」

俺よりダツシユ力が数段高い相棒に声をかけると、横からチャプチャプと頼もしい音が聞こえてくる。

「既に用意してある」

我が隊の指揮官様は流石の判断力で三雲の姿を視認した瞬間水道に水を汲みに行っていたようだ。コップはどこに入れていたのか分からないが。

「ナイスハイスペック！三雲！飲め！」

三雲はゴクツゴクツと気持ちいい音を立てて水を飲み干した。するといきなり目をカッと見開きプハァー！つと言いながら体を勢いよく起こした。

「大丈夫か？何があつたんだよ」

「ええ。実は……」

三雲が言うには、遊真達が心配すぎておちおち寝ることも出来なかつたらしく、飯も食わずに朝4時からこの公園に居たらしい。それから安心することはなく、むしろ最悪の場合を想定しまくって口の中の水分どころか全身の水分が抜け出たらしい。そこに俺たちが来たことでなんとか復活した。

「おまえ4時とか干からびるのも驚いたけど、よくそんな時間からここに居て通報されなかつたよな……」

「全くだ。もつと自分の体を大事に行動しろ。公園で干からびて警察のお世話になるなんて笑えないぞ」

「はい、すみません……」

「とりあえず、もう時間だから学校行け。ほらこれ」

俺はポケットから一つスマホを取り出し、三雲に投げ渡した。三雲はそれを慌ててキヤッチして、スマホを一瞥してから、これは？と言った表情を返した。

「俺の仕事前のケータイだ。なんかあったら俺のケータイにかけてくれ」

「は、はい。分かりました」

「じゃあ学校では二人のこと頼んだぜ、三雲」

俺がそう言うのと三雲はキラッキラした表情になってハイ！と答えた。ウンウン、元気がいいのは何よりだな。

「ねえキリト先輩」

「ん？どうした遊真」

遊真が珍しく普通の顔で質問をしてきたので不思議に思った。

「俺と凛花は名前呼びなのに、修は苗字って不公平じゃない？」

俺はなるほど・・・と思つてうんうんと頷いた。確かに一人だけ違うのはフェアじゃないな。俺はSAO時代に散々アンフェアと言われ続けてきたのでそこらへんの事は考えがいかないらしい。

「そうだな。じゃあ改めてよろしく修」

「よ、よろしくお願いします」

その会話を最後に俺たちは別れて、修達は中学校に、俺たちは本部に向かった。

「ただいま」

「おかえりなさい。キリトさん、セイさん」

住み慣れた隊室に着くとアリスがコタツに入って寝転がりながら事務処理をしていた。

「お前・・・起き上がってやったらどうだ？」

俺がそう言うのとアリスは少々大げさにコタツ布団をかぶり直しぶるぶると震えながら言った。

「だって寒いんですもん。私生まれ九州ですからこつちが寒すぎてビックリですよ」

俺がはあ、とため息をつくのと何かを思い出したようでアリスは俺に言った。

「あ、そうだキリトさん。今日5時くらいから会議室に来て言っていましたよ。あのC級の・・・三雲くん？も一緒について」

「なんだって」

冷や汗が頬を伝った。まさかあの時のやりとりとか遊真達が本部の誰かの目に入っていたというのか。

「まあとりあえずキリトさんは今日三雲君の学校が終わったら迎えに行くようについて言っていましたよ？」

「あ、ああ、分かったよ」

その後時は流れて、図書館に行つて、みんなで勉強をしまくつた。参考書とか買う金もないし、コタツをずっと付けてるより電気代が浮くからだ。

「なあセイ、この問題つてどうやって解くんのだ？」

「ああ、ここはここをこうやって・・・」

「あつ、そんなやり方があつたんですね。私相当りくどいやり方してました」

・・・まあ最終的なセイ頼りは相変わらずだったが。

「そういえば今日またイレギュラー門が発生したつてな。おお、解けた」

「朝から既に2件くらい発生してるらしいからな」

「もしかしたらまだ発生するかも知れませんよ？二度あることは三度あるつて」

なんか楽しそうに話すアリスに対して苦笑を浮かべる。

「そんな事あつたらダルすぎるよ。前のゲートン（仮）の時も1日2回が最高だったのに」

と言つた時、バリバリとまるで雷が落ちたかのような聞き慣れた音がかすかに耳に

入った。恐る恐る窓の方を見てみると、300mほど先にこれまた見慣れた黒色の円が空中に浮かんでいるのが目に入った。

「・・・二度あることは三度あったな」

すると俺のプライベート用のケータイに着信が入った。着信画面を見るとそこには忍田本部長の文字が書いてあった。もう既に察している電話内容にため息を吐いてから応答ボタンを押す。

『もしもし桐ヶ谷か？今お前達の近くにイレギュラー門が発生している』

「はいはい知っておりますよ。今ガッツリ見えています」

『そうか。では頼んだぞ』

本当に簡潔に指示をしてから電話を切った。指揮官としては正解なんだろうが、ちよつとぐらいいらいをかけて欲しかったと言う気持ちも少しある。

「じゃあ、行こうか」

「ああ」

俺たちは各々のポケットからトリガーを取り出し、手のひらでグツと握りしめて起句を叫んだ。

「「リンクスタート」」

俺たちの肉体が見るみる戦闘隊に換装されていく。換装され終わると同時に俺は叫

んだ。

「皆さん！ボーダーです！今この近くで門が発生しました！落ち着いて速やかに門から遠くに離れてください！」

と簡潔に述べてから俺とセイは図書館から門の発生地まで走り、そして到着した。

「なあセイ、俺なんか地味に嫌な予感がするんだけど」

「奇遇だな、俺もだ」

恐らくこの門からはSAOのボスが出てくる。俺の勘がそう告げている。天帝の眼を持つセイもそう言っているので間違いないだろう。

「もういいや、何でも来やがれ。もう半年前みたいにはいかないからな」

「今回は初っ端腕を切られたりするなよ」

「うっせ」

門から何かの影が見えてきた。だがその影は中々に多く、そして一体一体が小さい。

「あつれ？ボスモンスターじゃやないのか？複数湧きのボスなんていたっけ」

「一応トールラス系は3体だったぞ」

だがその影は明らかに3体ではない。しかもそこまで大きくないのでボスモンスターではないと安堵した。すると一体モンスターが降りてきた。

「これは……アレだ。ルイン・コボルド・センチネル。コボルド王の取り巻きだよ」

「懐かしいな・・・ボスは覚えていたけど取り巻きとかまでは覚えてないからな」
「まあこいつらなら湧く数は6匹だからすぐに終わるだろ」

と思つて門を見ると、明らかに数が多すぎる事に気付いた。

「・・・なあセイ、アレ何匹くらいいるかな？」

「・・・大体100匹ぐらいじゃないか？」

「・・・降りてきたやつから速攻狩るぞ。セイはバイパーで降りる途中狙つてけ」

「了解」

セイに指示を出してから俺はセンチネルに向かつて飛び出した。

「レイガスト！」

SEのシステムスキルから疾走スキルを起動し、全速力でセンチネルを切り倒して行つた。

「バイパー！」

上から降つてくる敵は大体セイが撃ち落としてくれるので、俺はそのおこぼれを斬つていくだけだ。流星にセイでもセンチネルを一発で吹き飛ばす大きさにすると降りてくるやつを全部撃ち落とす事は出来ないようなのだ。

走りながらなぎ倒すのはめんどくさいしトリオン消費もデカイので、センチネルが一列になった瞬間を見計らつて剣を地面と平行になるようにして左手を添え右腕を限界

まで引き絞る。

『スラストアーON』

スラストアー（改）の自動起動が働き、剣が加速し始める。片手直剣ソードスキル、ヴオーパルストライク。黒の剣士の代名詞とも呼べるソードスキルだ。

「うおおおおおおお!!!」

一列に重なったセンチネルを次々と貫いていく。ただその中で違和感に気づいた。（斬るごと）に手応えが増していく・・・？）

不審に思つて周りを見渡すと、倒したセンチネルから出てきたトリオンが生きている他のセンチネルに流れていつているのが見えた。

「セイ！気をつけろ！こいつら倒せば倒すほどどんどん強くなっていく系のやつだ！」
「分かっている！キリト一回離れろ！」

「了解！」

グラスホッパーを起動してセイの場所まで後退する。

「エスクード！」

セイはエスクードを大量に出して門を覆い隠す壁のようにした。そして左手を開いて前に突き出した。

「メテオラー！」

大きさを調節していない全力のメテオラを生成し、エスクードの上に飛び乗った。そしてまた左手を前に突き出し、

「ファイア！」

の掛け声と共に打ち出し、エスクードから飛び降りた。着弾すると中からとんでもない爆発音が鳴り響き、凄まじい大爆発を起こした。いくらエスクードを満面に展開していると言っても周囲への被害が半端ない事になると思ったが、そこはトリオン量の暴力を思わせる流石の強度でギリギリ持ちこたえていた。

「・・・お前って結構無茶するよな」

「勘違いするな。ちゃんと計算した上での行動だ」

中々にいい顔で言ったので無性に腹が立った。

爆発の跡を見てみるとセンチネル達は木っ端微塵になっていた。

「これなら再生しようがないだろう」

「ああ。一応索敵で見しておくか」

俺は目を瞑って索敵を起動した。すると一つの小さいトリオン反応が段々と大きくなっていくのが見えた。

「セイ、一体残ってるぞ。しかも今どんどん成長してる」

「そうか。ならさっさと片付けよう」

俺たちは二本の剣と一本の槍を構えて近付いた。セイがエスクードをしまうと、そこにはボスモンスター級に成長したセンチネルが立っていた・・・

「・・・え？」

・・・というわけではなかった。

「えつと、なにこいつ」

そこにいたのは、俺たちの膝下くらいの高さのセンチネルだった。

「どうやら、さっきのでトリオンはちゃんと吹っ飛んでいたみたいだな」

「お、おう」

張り詰めて身構えていたのに拍子抜けで、一気にやる気が抜けた。とりあえず抜刀した剣の一本でチビセンチネルをコツンと叩くとそいつはトリオンの粒子となって消えた。とりあえず忍田さんに連絡をした。

「こちら桐ヶ谷。イレギュラー門の対処完了した。今から報告にそつちに戻ります」

『ご苦労だった。もう4時だからついでに三雲君も連れてきてくれ』

「了解」

と言つて俺は電話を切った。

「と、とりあえず俺は時間だから修を迎えに行つてくるよ」

「了解。俺はアリスと玉狛で待っているよ」

突然のイレギュラー門事件は、最後に締まらない感じで終わった。

「も？・監視役？」

謎の言葉に思わず？マークを浮かべた。修には本部から指令がいつていないから俺が連れてくる役になったのであつて、しかもその役は俺一人だった筈だ。第1監視役なんて大層なもんじゃない。

『いや、桐ヶ谷先輩も木虎と同じように監視役になつていのかと思ひまして』

「なるほどね・・・そこに門の処理をしに来たのが嵐山隊で、C級のお前がトリガーを使うのは規定違反だとか言つてそれでそんな奴は逃げ出すかもしれないとかで監視に来たんだな」

『はい。完全にその通りです』

「やつぱりか」

つくづく想像通りで助かる奴だ全く。

「もう着くから電話切るぞ」

『はい。お手数かけて申し訳ありませんでした』

「いやいいよ。ちゃんと連絡くれてサンキュな」

と言つて電話を切つた。全力で走つて中学校まで向かうと、門の所に人の大群ができていた。恐らく木虎に群がっているのだろうと分かつていたが、あの中に突つ込んでいくのはかなりの度胸が必要だった。俺は全身全霊の度胸とコミュ力を振り絞つて

「ちよつと失礼」と手刀を切りつつ突撃して行つた。人の波を掻き分けてようやく中心まで到達すると、そこにはケータイやカメラを構えられて写真を撮っている群衆に向けて嫌々ながらもしつかりポーズをとっている木虎がいた。

「・・・何やってんだお前」

「きつ、桐ヶ谷先輩!? こんなところで一体何を」

「修を迎えにきたんだよ・・・元々会議に連れて行く用事があつたからな」

「そ、そうですか。でも桐ヶ谷先輩と三雲君は名前で呼ぶような仲ですよね? だとしたら私情を挟んで逃がしたりすることもあるかもしれないので私も同行します」

「ねえよ・・・もう勝手にしやがれ。修! 行くぞ!」

既に俺たちより先に木虎と合流していた修の方をみると、汗をかいて呆然とこつちを見ていた修と、こつちの様子をニコニコと見つめていた遊真達があった。とりあえず凜花は先に玉狛に行かせて、遊真と修をを引き連れて俺達は本部への道を歩いた。

「三雲君、あなたトリオン兵を倒してヒーロー扱いされているからつて調子に乗らないことね」

「お前相変わらず口調キツイよな。もうちよつと丸くなれよ。とりまると話す時くらい」

「桐ヶ谷先輩は黙つて下さい」

oh... it, sシンラーツ...

「お前、ほんと修に対抗心燃やしてるな」

「なつ、バカ言わないで！何でA級の私が必要なC級に対抗心なんか燃やさなきゃならないのよ！というか何であなだが付いてきてるのよ！」

「俺は元から修と一緒にいたよ？付いてきたのはお前だろ。悪いけどお前と修じゃ全然勝負になんないよ」

「何ですって!?？」

「はいはい喧嘩しな〜い仲良くしような〜」

バチバチと火花を散らす二人の間に俺が割って入る。すると修が俺に尋ねてきた。

「あの・・・今日は何で僕たちの所に門が発生したんですか？」

「そうそう。警戒区域にしか門は発生しないようボーダーがしてるんじゃないのか？」

「その辺は良く知らん。木虎ならなんか知ってるだろ」

「知ってますが部外者がいるので教えられません」

「俺は部外者じゃない被害者だ」

「なんでお前らは口を開けば喧嘩すんだよ・・・」

俺は大きいため息をついてみせる。それを見た木虎がゴホンと咳払いをしてから少々皮肉そうに言った。

「まあ今回はしょうがないので教えてあげます。まだ詳しくは分からないけどボーダーの誘導装置の不具合か何かで、イレギュラーな門が発生しているみたいなの。今日は貴方達の学校の他に7件も門が発生していたのよ」

「イレギュラーな門??？」

「俺らが処理したやつその他に7件もあったのかよ……そうだ。俺からも一個聞いておきたいんだけど、修達のとこのを含めた7件のイレギュラー門から出現したトリオン兵の種類と数を教えてくれるか？」

「……まあ桐ヶ谷先輩の頼みならいいでしょう。まず三雲君達の所に出たのがモールモッド2体、三門モールにモールモッド3体、引鉄山にバンダー1体、三門公園にバムスター1体、三門寺にバムスター2体、三門タワーにモールモッド2体、そして三門市高速度道路にモールモッド1体です」

「三門市三門って付く名前の施設多いな」

「ということは俺たちの所みたいにならなくていいよ。S A O m o b が出現したところはなかったのか。規模も小さいし。だが何だ……?このまるで俺たちを狙って門が発生したような……気のせいだな。うん。」

「なら早く対処しないと!」

と焦って修が言った。

「落ち着け修。これは技術者側の仕事だ。俺たちが同行できる問題じゃない」

するとその時、甲子園でなるようなウーーーーーーという音が鳴り響いた。いやこれは警報だけでも。

『緊急警報！緊急警報！市街地に門が発生しました！市民の皆様は速やかに避難して下さい！繰り返します……』

その警報と共に門がどんどん形成されて行く。そこから大型のトリオン兵が空を優雅に飛んでいった。あれは……

「何？あのトリオン兵は？！」

「木虎お前知らないのか？イルガーだよイルガー。まあお前がB級に上がってくる前にはか出てこなかったから仕方ないか」

「イルガー？ああ、嵐山さんに聞いたことがあります。一時期イルガーを見るとその日一日運がいいのかなんとか。全くあんな噂を信じる人も広める人も理解できません。お陰でピュアな嵐山さんは騙されていましたし」

理解できないと言われて最初に噂を流した張本人の俺はショックを受けた。てか嵐山そんな騙されたのか……

という無駄なことをしているとイルガーが体から何かを落としていった。それが地面に着弾すると爆発を引き起こした。

「アレ？イルガーにあんな機能あったっけな。前は自爆するだけだったのに」

「なに呑気にコメントしてるんですか！？止めに行かないと！」

「分かったよ。お前は先に行つといってくれ。俺もすぐにグラホで追いつく」

「僕も行きます！」

と修がまた無茶をしだしそうになるので、肩をポンと叩いた。

「ダメだ。お前はまだC級だろ？お前がやろうとしている事は間違つてない。でもお前のトリガーにはベイルアウトも備わっていないんだ。入ってるのもレイガスト一本だけだろ。お前は遊真と一緒に逃げろ」

「でもー！」

「でもじゃない。遊真。修の事よろしく頼むぞ」

「了解。キリト先輩。イルガーは自爆モードになるとすっごい硬くなるから気をつけてね。まあ凜花の父さんと戦つて勝つたキリト先輩なら大丈夫だと思うけど」

「ああ。任してろ」

と言つて俺はグラスホッパーを起動して飛び上がった。上まで着くと既に木虎が攻撃を開始している。

「おお、流石嵐山隊をA級昇格に導いたエース様だな」

するとイルガーの体から柱の様なものが出てくる。自爆モード変形の合図だ。

「まずいな・・・アレは木虎じゃ削りきれないぞ」

と言いつつイルガーの背中に着地する。

「桐ヶ谷先輩！不味いです、コイツ硬すぎます！」

「分かつてる。お前はイルガーから降りてろ。俺がなんとかする」

「先輩一人じゃ無理です！」

「お前がいたって変わらない。むしろいい方がいい。お前は民間人のサポートに行け」

「・・・分かりました」

渋々了承して木虎は町に降りていった。

「さて、やるか」

俺はまず一度普通にレイガストでイルガーを斬ってみた。それだと傷一つつかなかった。今度はスラントを使って斬ってみた。今度はしつかり切れ込みを入れることができたので、スラスター使用で勢いをつけまくればなんとかなることがわかった。

「問題はどうかやって勢いをつけるかだよな・・・久しぶりにアレを使うか」

俺はイルガーから飛び降りて、グラスホッパーで距離を取った。充分な距離を稼いだ所で今度はまたイルガーの方に飛び、剣を一本上段に構えた。

「スラスターON！」

剣が光り出し、爆発的な推進力が生まれる。俺はそれに身を預けて、体を縮めて回転した。

「風車ああああああ!!!」

ヘリのプロペラの様な爆音を鳴り響かせてイルガーに迫っていく。そしてそのままイルガーを横からスパアアアンと斬った。爆発に巻き込まれるといけないので、スラストを解除し、レイガストを出したままの重力を最大限に受ける状態でグラスホッパーで一気に下に降りた。

イルガーは無事に空中で爆散した。俺も無事着地に成功したので、木虎を迎えにいうとすると、怒鳴る様な声が聞こえた。

「何が助かっただ！俺の店は壊されちまったんだぞ！」

「俺の家もだ！」

「ボーダーは何をやっているんだ！」

声のする方に近づいていくと、そこにはさつき怒鳴り散らした3人の人と、結局トリガーを使っていた修、そしてその様子を見ている木虎がいた。として木虎がその人達の方へ行つて説明をした。

「近界民による新手の攻撃です。詳しくは近々会見を開くの思われますので、損害補償などのことは後日そこで発表します。今はとにかく被害に遭われた方は避難所までお

願います。非常時ですので、ご協力を」

「おおく流石は広報部隊。俺たちみたいな脳筋とは違うな」

どこかからそれはお前だけだという声が聞こえた気がするが、きつと気のせいだろう。

「ありがとう。木虎」

「・・・別にお礼を言われることなんてしてないわよ。それよりあなた、また規律違反を犯してどういうつもりなの？」

「うんうん、木虎の言う通りだ。俺は逃げろと行ったはずなんだがな」

「うわあー!」

俺が会話に入ると、二人は大げさに声を上げて飛び退いた。

「桐ヶ谷先輩!脅かさないで下さい!」

「いや別に脅かしたつもりねえよ・・・。ま、何はともあれ修。お前はまだC級なんだ。あまり無茶はするな。自分の命を軽く思う奴ほど他人の命を守るところか戦場で命を失うんだぜ」

「はい、スイマセン・・・」

「まあ、お前のお陰で救われた命だつてあるんだ。本部からはお咎めが少なくなる様俺が言つといてやるよ」

「おお、流石キリト先輩は話が分かるな。どっかのルール厳守主義とは大違いだ」
「何ですって!」

「だから喧嘩はやめろって言うてるだろ。どんだけお前ら仲悪いんだよ・・・」

と言つてまた大きなため息を吐いた。今日だけで周りの幸せが逃げまくってカラッカラになった気がする。

「ほら、修は先に本部に行つてろ。木虎は俺と一緒に逃げ遅れた避難住民の保護だ。さっさと終わらずぞ」

「了解」

俺たちは避難してない人を聞いた後、町を走り回って、逃げ遅れた住民を探し回った。

俺はボーダー本部の入り口の認証キーにトリガーをかざした。

『トリガー認証。本部への直通通路を開きます』

「ふむ、トリガーが入り口の鍵になってる訳だな」

「ああ。そうだ。悪いけどここからは遊真は来れない。先に帰つててくれ。俺も後でそっちに行くから」

「了解。ご飯一人分多く作ってくれる様頼んどくよ」
「おう。サンキュー」

と言つて俺と修は手を振りながら遊真と別れて本部に入った。さて、これから会議か・・・めんどくさいな・・・

と思いつつ今日起こったことを振り返って、あまりのハードスケジュールにまたため息を吐くのだった。

迅悠一 ①

コン、コンとドアをノックすると、どうぞ。という返事が帰ってきた。俺は扉に手をかざして会議室の扉を開けた。

「は〜いこんちわ〜・・・じゃねえんだよ!」

最初のゆるゆる挨拶から俺は一気に怒鳴って机を叩く。いきなりの行動にとりなりのオサム（トトロ感）はビビっていた。

「うむ、ご苦労だったな桐ヶ谷」

「いや本当にご苦労なんだけど!?!? アンタら受験生舐めてんのか!?!? 高校受験ならまだしも大学受験だぞ!?!? しかも俺たちのスタートライン他と300倍くらい違うの分かっただけのか!?!?」

こんな荒い口調で忍田さんと喋ったのは初めてかもしれない。すると今度は鬼怒田さんが答える。

「仕方ないだろう。あの状況でたまたまお前らが近くにいたから出勤要請を出したただけだ」

「だからってなあ、今回は門が門でもイレギュラー門ですからなあ。報酬は良く働いた

時の防衛任務の……2倍？いや……3倍出るかも知れませんが」さあ皆さん会議を始めましょう」

根付さんの一言で俺のやる気は一気に向上した。まあしようがない。飯を食うのも宿に泊まるのも装備を揃えるのも、現実だろうがSAOだろうが結局は金だ。

「はあ……全くがめついい男だ」

忍田さんがため息を吐いた。なんかがめついいって言われすぎな気がする。

「まだ一番重要な奴が来ていないからな。それまで少し待っていてくれ」

「了解。じゃあそこ座っていいですか？」

「桐ヶ谷さん。お久しぶりです」

声のする方向を見ると、そこには俺の一番弟子である三輪秀次が座っていた。

「おお、秀次。ほんと久しぶりだな。お前こっちは来いよ。修はもう片方の俺の隣な」

「はい、失礼します」

秀次と少し世間話に興じていると、後ろからコン、コンとノックの音が響いた。するとそこから見慣れた人物が登場した。

「やあやあ上層部諸君。S級隊員実力派エリート迅悠一。ただいま参上いたしました
！」

「何がただいま参上だ遅刻派セクハラ野郎」

「ひどいなキリト。秀次もやつほー」

「黙れ。裏切り者の玉狛支部が」

やっぱり秀次は悠一に対しては辛辣だな。俺とのダブルパンチでちよつと目が涙ぐんでるぞ。ていうかメンタル弱っ。

「まあいい。会議を始めるぞ」

「じゃあ、まずはイレギュラー門の対処についてですな」

「待て。まだ三雲君をどうするかを決めていない」

「どうもこうもないだろう。隊務規定違反でクビ。それだけだ」

「だがあの状況で迷わず動いてあの戦闘力だ。切り捨てるよりもB級に上げてより活躍してもらった方がいい」

「ですが彼の行動が他のB級にまで影響するかも知れませんかねえ・・・」

たった数秒でこれだけの意見が出た。この人達ゴチャゴチャ言う以外の選択肢ないのか？てか司会するべきの城戸さんが何も言わないのもどうかと思う。そうするとやつと城戸司令が口を開いた。

「御託はどうでもいい。・・・三雲隊員。君はもし今後このようなことがあつた場合、どうする？」

おお、ここで修に話を振るのか。まあ確かにこの状況だと最善の選択だな。幹部達が

わらわら勝手に意見を言うより簡単にスパッと決まる。だがこの受け答え次第で修の未来が変わることも事実だ。まあ後ろに立っている奴には丸わかりなんだろうが。

「……もしそうだった時は……僕は多分、使うと思います」

「……それは何故だ？」

「それは……僕がそうするべきだと思ってるからです」

「反省の色無しですか。これは即刻クビですね」

そう言う根付さんに俺は抗議をしようとした。すると後ろから悠一が小さく「任せろ」と言ったので、大人しく引き下がった。

「そうかい？俺はメガネ君よく言ったと思うよ？まあとりあえず、門のこともメガネ君の事も、一旦俺に預けてよ。責任は全部俺がとるからさ」

「ですが迅くん「やめたまえ根付メディア対策室長」……城戸司令……」

「よろしい。お前に免じて今回のところは三雲君の処理は保留にして、全てお前に任せよう」

「感謝いたします！実力派エリート迅。全力で任務を遂行いたします！キリト、メガネ君、行こうぜ」

「あ、ああ」

そう言っただけで俺と修は立ち上がった。すると横から「ちよつと待ってくれ」と三輪が

立って修に尋ねた。

「三雲君。一つ聞きたいことがあるんだが」

「はい。何ですか？」

「昨日基地近くの警戒区域に出現したトリオン兵。あれも君がやったのか？」

俺と修の額に冷や汗が浮かぶ。アレをやったのは修でも俺でもなく、遊真だからだ。それがバレたかと思つてヒヤヒヤしたが、修が「そのとおりです」と答えると普通に引き下がったので、俺たちはそのまま会議室を後にした。

「・・・あーヒヤヒヤしたー。秀次つてやつぱ勘が鋭いな」

「そうですね。空閑の事がバレたかと思ひました」

「だよなー。・・・それにしても悠一、お前どうするつもりだ？このままだと修はクビになつちまうぞ」

と言つて悠一の方を覗くと、悠一はぼりぼりとぼんち揚を口いっぱいに入れて食していた。俺はレイガストの腹で思いつき背中をぶつ叩き、悠一を地に沈めてグリグリと踏みつけた。

「ブフオアツ!!」

「おい実力派。まさかお前に限つてその場しのぎの発言とかじゃねえよな。アア？」

「いつててて・・・大丈夫だよ。メガネ君もイレギュラー門も何とかなるつて、俺のサイ

ドエフェクトがそう言ってる」

悠一が決め台詞を言いながらドヤ顔をした。こいつがこう言った時は必ず成功してきた。失敗した事はない。ならば大丈夫という事だろう。だが・・・

「お前・・・それは床に這いつくばって口をぼんち揚でもがもがさせながら言う事なのか？」

現に隣の修は引いている。既に修の中の悠一は「変な人」認定されたようだ。

「あーそうそう。キリト、明日メガネ君貸してよ」

「何でだ？」

修を借りたところでどうこうなる問題だとは思わないんだが、なにかクビにされないようにするための動きでもとるのだろうか。

「実はイレギュラー門を何とかした未来にはさー、必ずこのメガネ君が関わってるらしいんだよね」

「分かった。じゃあ明日は何時集合にする？」

「いや、キリトは来なくていいよ」

「は？」

突然の戦力外通告に思わず声を上げた。

「いやー、悪いんだけどさ、キリトはメガネ君とは対照的な存在なんだよ」

「いやだからどういう・・・ああ、そういうことか」

修と対照的という事はつまり、修がいい未来に必ずいる事とは反対に、俺は必ず悪い未来にいる。もしくはほとんどの確率で悪い未来に導くという事だ。

「分かったよ。偶には大人しく受験勉強しとくから、お前はしっかりやってくれよ」
「ああ、任せといてくれ」

翌日、陽も完全に落ちた頃、俺のケータイに電話が入った。また修からの連絡かと思つて着信画面を見ると、そこには実力派イキリト悠一と表示されていた。

「もしもし」

『もしもし、キリト？悪いけど今からこつち来れる？今から場所送るからさ』

「なんだよ。俺が行くと悪い未来に行くんじゃないのか？」

『いや、もう未来は一つの道に確定した。今からイレギュラー門の原因の駆除作業にかか。俺はアタッカーだから効率悪いんだよ。お前もそうだろうから一緒にやろうよ。セイと一緒にやってもどうせお前の出番ないでしょ?』

「まあ確かにそうだな。OK、分かったよ。じゃあまた後で」

と言つて電話を切った。すると直後隊室の放送機から放送が鳴り、指示が出された。

『イレギュラー門の原因が解明された。今回は半年前に比べてかなりの量がいるため、C級も含めた全員で殲滅を行う。各自連携して、1秒でも早くトリオン兵を消し去れ!』

「丁度出動要請か。セイ!俺悠一んとこ行って狩ってくるからお前は自分で適当に狩つてくれ!SE共有が欲しくなったら言えよ!」

「了解。何かあったら連絡しろよ。すぐに向かう」

「お前もな。ほんじゃ行くとしますか」

「リンクスタート」

入り口から出ると絶対混雑しているだろうから、俺たちは窓を開けてそこから飛び降りた。夜風を思いつきり全身に受けて死ぬほど寒かったが、なんとかそれに耐えて着地した。俺は悠一のところに、セイは一番敵の多い基地南西地区に向かった。

「お、おーっすキリトー」

「よう悠一。それにしても寒いな……上も真冬の夜に出動しろとか正気の沙汰じゃないぞ……」

と手に息を吹きかけブルブルとしながら言う。

「文句言うなつて。そんなロングコートまで着てちやつかりコーヒーまで買ってるくせに。俺やメガネ君の方が絶対寒いよ?」

「うっせ。インドア派舐めんな」

「まあまあ、そんな事より早く行こうよ二人共」

そんな会話をしている俺たちの間にニユツと遊真が顔を出して言った。よく考えたらしいのはトリオン体でもないのに寒く無いのだろうか。

「そうだな。さっさと狩って帰ろう」

SEの索敵を起動して敵の数を探った。そのトリオン反応を見て俺は飲んでいたコーヒーを盛大に吹き出した。

「どうしたんですか!? 桐ヶ谷先輩!」

「ゲホツ! ゲホツ! い、いや、大丈夫だ。それより……これ見てみる」

俺はSE共有によって3人にも索敵レーダーが見えるようにした。すると3人は揃いもそろって苦笑を浮かべてこう言った。

「「うわあ」」

「これ、軽く数万はいるんじゃないの?」

「ああ。長い駆除作業になりそうだな」

俺はとりあえずリアルタイムバイパー組の那須、セイに連絡を取って、2人にもSE共有をさせて、リーダーに映ったトリオン反応にバイパーをブチかまして貰った。あいづらなら正確にバイパーの弾道を設定できるから、歩き回りながら狩るよりも効率はいいだろう。セイは百発百中だろうけど、那須は大体3〜4割越えれば上々かな?とにかく、今回のラッド(例のイレギュラー門を出す奴の名前。ゲートン(仮)の本名)討伐の6割はあいづらが狩ってくれた。(内訳はセイ4.5割、那須1.5割)

「いやーほんとうちの指揮官様は優秀だなあ」

あいづらが空から流星のように弾をガンガン撃っている間、俺たちはちまちま剣でラッドを殺していた。

「何ボサツとしてるんだキリトー。まだまだたくさんいるんだぞー」

「悠一・・・なんかこう俺たちが苦勞して歩き回ってやってるのにさ。あんなに簡単にボコボコ狩られるとモチベが下がるんだよなあ」

剣を振り下ろしてまた一匹狩る。もう何回これを繰り返したか分からない。

「まあそれは分かるけどさ・・・あ、またいた」

悠一が指差した先にはまた見慣れたラッドがいた。だが何か違和感を感じる。

「なんかアイツ様子がおかしくないか？」

トリオン兵に詳しい近界出身の遊真に聞いてみると、遊真の指輪から出てきたレプリカが言った。

『キリガヤ、アレはまずい。アレは門を開く時に見られる動きだ』

「何？？」

よく見ると背中が開いている。そこから黒色の円が出てきて、それはどんどん大きくなっていつている。

「まずい。アレを止めないと！」

「風刃起動」

声が出た隣を見ると、悠一が凄まじい速さで剣を振り、風刃の斬撃を地面に滑り込ませた。それがラッドの所まで届くと、斬撃は姿を現し、ラッドの体を一刀両断した。

「・・・遅かったか」

ラッドを倒しても門の膨張は止まらず、通常の門のサイズまで大きくなった。

「本部。こちら桐ヶ谷。イレギュラー門の発生を防げなかった。ただ今より迎撃に当たる」

『了解。警戒区域外への被害は最小限に抑えろ』

「はあ・・・最初はこんな未来なかったんだけどなあ・・・ほんとにお前どこの幻想○し？」

「うっせーな。どつかのー〇通行相手にするより遙かにマシだつっの」

本当にやつと一萬切ったところだつてのに、これじゃ徹夜コース真つしぐらじゃねえか。

「悠一。これもうお前がちやちやつと風刃でやつちやつてくれよ」

「OK」

門からやつとトリオン兵が姿を現した。そこから出てきたのは大きな立方体だった。その立方体は垂直に下に落ち、金属質な音を響かせた。

「……マジかよ」

あの時の記憶が、蘇る。アイツは中々に厄介な代物で、集中力が切れかけた今相手するものではない。

「ジ・イリテーティング・キューブときたか……」

横で悠一が風刃を振りかぶり、そのまま斬撃を飛ばした。だがその斬撃はキューブの表面に傷をつけることすら出来なかった。

「ええ……黒トリでも傷がつかないってどういうトリオン密度してんだ全く」

「落ち着け悠一。アイツの対処法はルービックキューブと同じだ。立方体の面を全て同じ色に揃えればあの装甲は破れる。遊真。アイツはレーザー攻撃をしてくるから、もし民家に被害が出そうだったらお前のシールドで空に受け流してくれ」

「了解」

SAOPシリーズを読んでない方に解説すると、あのボスは、ジ・イリテーティング・キューブ。SAOβ版第六層のボスだ。アイツの特徴はなんといってもあの特殊なシステム。見た目はルービックキューブの超拡大版で、攻撃手段は立方体の頂点から打ち出されるレーザー。装甲が死ぬほど厚く、どう足掻いても面の色がバラバラの時はダメージが入らない。ダメージを与えるためには、ルービックキューブの動かしたい列に攻撃を当てて、それを6面全て揃えるしかない。βの時は最初は計画的に揃えようとしても後から皆んなイライラして好き勝手叩くようになって連携が全く上手くいかず、色揃える段階でレイドが全滅してしまう事が多々あった。

俺たちもさつきからずっと叩きまくっているが、一向に揃う気配がない。

「クソツッ……このままじゃ埒があかない！」

「悠一……レーザー来るぞ！」

レーザーの射線にいた悠一は間一髪で避けて遊真がそれを黒トリの盾で空に跳ね返した。俺はレーザーを撃つたことによる硬直で動かないキューブに向かって剣を叩きつけようとした。

「くらえっ！」「桐ヶ谷先輩！そこじゃありません！右の列を上！」修？？分かった！」
修の言った通り右の列を剣で切り上げた。ガツコンと音を立てて列が切り替わる。

「全体の把握は出来ました！ここからは僕の指示通りに叩いてください！」
「了解！」

まさかここに来て修が役に立つとはな。意外な才能があるもんだな。

「空閑。お前も僕のトリガーを使つて先輩達を援護してくれ。空閑のだと本部に気付かれる確率が高いからな。トリガー解除！」

修が自分のトリガーを隣の遊真に渡す。

「了解。トリガー起動」

遊真の身体がトリオン体に換装され、俺たちの連携に参加する。

「迅さん！一番下の列を右に二回！」

「空閑！左の列を下に一回！」

「桐ヶ谷先輩！……」

修の指示は見事なもので、ものの数分で全ての面の色を揃える事ができた。キューブの装甲は剥がれ落ち、中身が姿を現した。キューブの中身はβ版SAOのまま、スライムみたいな形をしたものから気持ち悪い触手がうねうねしていた。中身が出てきたらもう俺たちの出番はないので、遊真と俺はスライム(仮)から離れて、悠一の背後まで後退した。スライム(仮)が何か言っていた気がするが、風刃の一閃でぶった斬られてしまったので、結局その真相は分からずじまいだった。

「はあ・・・疲れた」

「ほんとだよ。ドラ○エのメタル狩りより大変な作業久し振りにやったよ」

俺の言ったことに対して悠一が物凄く分かりやすい例えで今回の作業を表してくれた。確かにまじん斬りとか一閃突き外した時や逃げられたのイライラ度は半端ない。まじん斬り5連続で外した時は画面叩き割ろうかと思った。(作者の実体験)

「あの・・・一ついいでしょうか」

ベンチに座ってコーヒーをゴクゴクと飲んでやり切った後の休息を満喫している俺たちに修がおずおずと手を挙げてきた。

「どうした？お前も早く帰らないと親が心配するぞ？」

「いえ、だから・・・まだラッド討伐終わってませんよ？」

「あ」

すっかり忘れてた。そもそもアレが出てきたのラッドのせいだったんだ。索敵を起動してトリオン反応を確認する。

「あーまだ5千体くらいいるな。やりたくねえー」

「わがまま言うなってキリト。さっさと終わらせよう」

まあ5千体のうち3千体はセイ達がやってくれたので楽だった。夜明け頃には全てのラッドが討伐され、全員が一箇所に集まってお疲れ会をしていた。オペレーター達が

隊員に飲み物を配っていたが、俺は既に缶コーヒー2本を飲んでお腹たつぷたぶだったので、オレンジジュースを貰って遊真にあげた。

「今回は遊真のお手柄だったな」

「ああ。ラッドのことを掴んだのも遊真なんだろう？ キューブ討伐にも貢献したし、ボーダー隊員じゃないのが惜しいな。なんか報酬欲しかったら俺たちの手柄って事にして遊真に渡すけど？」

「いやいや、全然いらぬです。それなら修の手柄って事にしてよ」

「えっ!?」

ずっとベンチでお茶を飲んでいた修が反応した。

「確かにな・・・修の手柄にすればクビの取り消しどころかB級昇格もあり得るぞ？」

「いや、いりませんよそんなの。そんな僕がやった訳でもないのに、そんな不正みたいなこと・・・」

「いいから貰つとけて。修が貰つてくれなかつたら俺の手柄が無しになっちゃうじゃん」

あーこれは修の性格を逆手に取ったいいやり方だな。こんな事言われたら修は貰わないと申し訳ないって思つて貰わざるを得ないだろ。

「・・・わ、分かったよ。じゃあありがたくもらうよ」

まあ、キューブ討伐の貢献の事を言えば、最低クビは取り消しになっただろうけどな。その後本部に戻り上層部に修（遊真）の手柄を報告すると、数日後、会議の末修のB級昇格が決定した。

ちなみに今回の討伐でセイが特級戦功、俺と悠一が一級戦功を獲得した。

桐ヶ谷隊①

雲一つない快晴の冬の空の下。風がヒューヒューと弱く吹き抜ける草原に寝そべり昼寝をしている。チュンチュンと小鳥のさえずりが聞こえ、パタパタと飛び立って行く。お？猫が寄ってきた。隣でニャーニャーと鳴き始め、俺は安らかに眠りにつこうとした。だがその猫の声はだんだんとはつきりしたものに聞こえてきて・・・

「おい、キリト。起きろ」

「猫が喋ったあ？？」

余りの衝撃に俺は飛び起きた。すると横にはセイがいて、空は雲一つどころか数えきれないほどある。その上俺が寝ていたのは作戦室に備え付けられているベッドだった。

「あれ・・・？俺草原でポカポカ陽気に誘われながら眠ってたと思うんだけど・・・」

「寝ぼけるな。昨日本部にいた木虎に聞いたんだが、お前は編入試験が終わった直後、いきなりトリガーを起動して本部まで爆走した後本部の入り口でぶっ倒れたらしい。そのお前を木虎が隊室のベッドまで運んでくれたんだ。それからお前今までずっと爆睡してたんだぞ」

そうだ。確か俺は昨日編入試験を終えた後、これまでの勉強の疲れで急激に眠くなっ

「たんだ。それでもここで倒れたらダメだと思ったからトリガーを起動して疾走スキルをフル稼働させて本部まで何とかたどり着いたんだ。でもそこから結局倒れて・・・」
「そうか。木虎には悪いことしたな。後で謝りに行こう。でも、何で今起こしたんだ？ 忍田さんが気を使ってくれて、試験後3日は防衛任務入れなかつたじゃないか」
「いや、俺もいいと思っただが、今までずっと我慢してて待ちくたびれた奴らが来たもんでな」

セイの見た方向を見てみると、そこには心配そうな顔をして部屋を覗き込んでいる俺の準教え子達がいた。

「おお、鋼に荒船、それに辻じゃないか。よし、待つてろ。すぐ準備すつからな」

俺がベッドから降りると、鋼が申し訳ないような顔をして言ってきた。

「いい、いえ、お疲れのようであれば出直しますが・・・」

「いや、大丈夫だ。アリス！ 訓練室の電源入れてくれ！」

「了解」

俺は未だに扉のところまで俺の様子を伺っている3人に声をかけた。

「ほら、今日は秀次がいらないから教わるなら今のうちだぜ？」

「はい！」

俺たちは訓練室に入った。フィールドはとりあえず市街地Aにしておいた。シンプ

ルなどこの方が分かりやすいからだ。だが指導を始める前に一つ腑に落ちないことがある。

「それにしても綱も荒船も、何でまた急に俺んどこ来たんだ？どっちももう俺からは卒業したじゃないか」

そう。コイツらは半年前にある事がキツカケで俺の指導を受けなくなったはずだ。詳しくは、14話半年間の軌跡を読み返してみてほしい。その質問に対しては荒船が答えてくれた。

「別にそんな大した理由はありませんよ。もうすぐ今期のランク戦が始まるので、出来れば手解きをいただければと思っただけです。前期は受験で忙しそうだったので」

「そうか。悪いな俺の事情で……って、あれ？」

俺はふと疑問に思った。辻はともかく、コイツらは18歳なんだからセンター試験の前なんじゃないかと。

「なあ、お前らもうすぐセンター」「言わないで下さい」「お、おう」

「キリト。俺も今から那須の所に行くから留守は頼んだぞ」

「分かった。あんまりスパルタしてやるなよ」

「分かってるさ」

「どうだかなあ……まあいつて……ら……」

セイの方を振り向いて返事を返すと、視界の端に何かどす黒い炎が上がっていたのでそつちに視線を移した。そこにいたのは金色の髪がなんか逆立ち始めた黒い炎のオーラを纏ったアリスがいた。てか何アレ超サイ○人？超サ○ヤ人3の悪形態？

「ん？どうしたキリト」

「い、いや、なんでもない。なんでもないからさっさと行け」

「？おかしな奴だな」

と言い残してセイは部屋から出て行き、同時に視界の端の炎も徐々に収まっていった。いつのまにか全身に力が入っていた俺は力を抜いて大きく息を吐いた。

「・・・鋼、荒船、辻。・・・女は怒らせるなよ」

「「・・・はい」」

今の光景を目の当たりにしていた3人は深くく頷いた。

「何か言いましたか？」

「「何も言っていないです！」」

とだけ吐いて俺たちはそそくさと訓練室に引っ込んで行った。

「・・・分かったかお前ら。アレがボーダートップクラス美少女の正体だ」

「「・・・はい」」

アイツの本性を知っている俺とセイはなぜアイツがあんなにモテるのか分からない。

ちなみにセイもモテる。この桐ヶ谷隊でリア充でないのは俺だけである。

「さて、じゃあ指導始めるか・・・つつても俺が教える事もう無くな？」

コイツらは伸び悩んでた時期に俺がちよよと手解きしてやったら簡単にマスタークラス届いちゃったし、その後も指導してくれって頼まれた時に教えることは教え尽くしたしな。現にコイツらもう鋼はアタッカー5位だし、荒船と辻はポイント10000弱だし。

「いえ。まだまだ桐ヶ谷さんには遠く及びません」

「当たり前だ。そう簡単に追いつかれてたまるかよ。お前ら相手なら片手一本で・・・」

その時、俺の頭に電撃が走った。

「なあ、お前ら全員孤月だよな」

「はい。そうですか・・・」

「よし。オツケー。じゃあトリオン漏出無し、部位破壊そのままに設定して、と・・・これだよ。さあお前ら。片腕出せ」

3人は一度顔を見合わせてから訳が分からないといった顔で片腕を突き出した。俺はおもむろに3人の横に移動し、剣を構えた。その行動を疑問に思った荒船が尋ねてきた。

「あの、桐ヶ谷さん。一体何を「スラストアオン」へ？」

スラストスターを起動し、3人の片腕を二の腕辺りからぶった斬った。

「あの、桐ヶ谷さん。意図が伝わって来ないんですが……」

辻が頭上に沢山の？を浮かべて尋ねてくる。それでもポーカーフェイスは崩さない。流石だ。

「何、簡単なことさ。孤月やレイガストは片手だとバランス崩れやすいからな。その対策を教えるんだ」

「なるほど。分かりました」

「じゃあ俺が手本を見せるよ。アリス！モールモッド出してくれ！」

『了解』

俺は自分の左手を斬り落とす。数十メートル先に出てきたモールモッドを視界に入
れ、剣を肩に乗せ、構えるのではなく、脱力する。モールモッドが自分の方に寄って
るのが見えた。焦らず、慌てず、モールモッドの動きと自分の動きを同調させ、ゆっく
りと重心を移動させて……すると、剣から道のようなものが流れているのが見
えた。あとはその移動の勢いと流れに任せてその道に剣を乗せ、ただ滑らせるだ
け……

……スパッ

ごくごく小さな音が聞こえた。剣を振り下ろしてから約2秒後、モールモッドに一筋

の線が入り、そこから二つに分かれて上半分が滑り落ちた。

「「おお〜」」

パチパチパチと訓練室に拍手喝采が起きた。その音は訓練室に響き渡り、俺の耳を延々と反響し続けた。・・・まあ現実この広い訓練室に儂く消えていったのだが。

「まあこんな感じだ。片手だけになつたら、重心の移動つてのがミソになってくる。重心を正確に捉えるだけじゃ無く、それをちゃんと思い通りに動かさせてこそ、剣は破壊力を生むんだ」

「なるほど。毎度参考になります」

「鋼なら直ぐにものできるよ。荒船達もな。てか、これは意外と簡単な部類だから、お前らも直ぐできるぜ?」

「「いや、桐ヶ谷さんみたいな変態じゃないので無理です」」

「何でだよ・・・てか何で鋼まで?」

まあそんなことを言っながら、鋼は寝たら直ぐマスターしてたし、荒船達も数時間でするレベルには習得した。

「な?言つた通りだろ?」

「でも、これだけ教えて貰って追いつけないのも皮肉なもんですよね・・・」

辻がポツリと呟く。

「んー、じゃあ次はちよつと高度な技に挑戦してみるか。荒船。ちよつとどっか行つてから適当に狙撃してみてくれ」

「?分かりました」

言われた通りに荒船は狙撃ポイントに着いてから、俺を狙撃した。俺は張り巡らせた索敵でトリオン反応を察知して直ぐさま伐倒したのち、スラストスターを起動。飛んできた弾丸を……真つ二つに斬り捨てた。

「「は?」」

今日声揃うこと多いな。

「とまあ、こんな感じだ。やってみろよ」

「無理です」

「今回ばかりは本当に」

「アンタみたいな変態と一緒にしないで下さい」

上から辻、鋼、荒船の順で否定してくる。

「変態つて……別にちゃんと弾を認識できればそれくらい「出来ません」ええ……」

まさか鋼に全力で否定されるとは思わなかった。鋼ならできるだろ……

「てか、そんな事できるのになんで二宮さんとかに撃たれるんですか?」

「射手には流石に出来ないよ。弾数が多すぎて捌き切れない」

実は今も試行錯誤してなんとか頑張つてやろうとしているのだが。その時、外にいるアリスが通信で訓練室に声をかけてきた。

『キリトさん。なんか電話が来てますよー』

「え？マジ？誰から？」

『えつと・・・迅さんからですね』

一瞬そのままシカトしようかと思つたが、なんか今日は暗躍してるらしいから重要な話かもしれない。

「分かった。今出る」

俺は訓練室から出て携帯を取り、応答ボタンを押した。

「もしもし？」

『よつすキリト。悪いけどちよつとお願いあるからさ。こつち来てくれない？』

「何だ？お前また暗躍すんのか？」

『人聞き悪い事言わないでよ。・・・実はな、遊真達がボーダーに入る事になったんだ』

なるほど。いつかはそうなるんじゃないかと思つてたけど、ついに現実になったか。「で？それを伝えるだけなのか？それならそつち行かなくていいだろ」

『まあ、色々問題がありそうだね。こつちで林道支部長も交えながら話したいんだよ』

「分かった。そういう事なら俺たちも考えてた事があるんだ。今すぐにそっちに行くよ」

『OK。また後でね』

と言って電話を切った。俺は少し悲しみを覚えたが、まあしようがない。と思つて訓練室へと戻った。

「あ、桐ヶ谷さん。終わりましたか?」

と鋼が聞いてくる。どうやら俺がいない間に狙撃斬りを練習していたようだ。まあ体の傷からして出来てはいないようだが。

「ああ。．．みんな、聞いてくれ。俺はもうお前らに頻繁に教える事は出来ないかもしれない」

「?どういうことですか?」

降りて来た荒船が尋ねる。

「いや、まあ忙しくなるからとかそんなところだ。お前らの受験も邪魔できないしな」

18歳組がウツといった顔になる。

「まあ、お前らはもうこれでほぼ免許皆伝だよ。これからは各々技を磨いてくれ」

「はい!」

(ほんと、いい奴らだ全く)

この後、お礼を言つて立ち去つて行つた3人を見送つてみると、同時に入れ替わりでセイも帰つてきた。

「キリト」

「その様子だとお前んところにも電話が来たつぽいな」

「ああ、正直ちよつと申し訳ない気もするけどな」

「それは俺も同じさ。でもしようがない。決めただろ。アイツらがボーダーに入った時にはこうするつて」

「ああ、じゃあ行こうか」

「アリス！出かけるぞ！」

俺たちはある三枚の紙を持って玉狛に向かつた。・・・今度は急ぎだから電車で。

「こんばんはー」

「おお、キリト先輩にセイ先輩にアリス先輩。どもども」

玄関で遊真が出迎えてくれた。頭からはホカホカと湯気が上がっていて、首にタオル

をかけて端を握っている。どうやら風呂上がりの様だ。

「よう遊真。ボーダーに入るんだってな」

「うん。ふつつかものですが、どうぞよろしく」

「お前ってほんと変なことばっか覚えるよな・・・」

頼むからそんな事よりお金の事を覚えて欲しいものである。すると遊真の指輪からレプリカがニユルツと出て来た。

『キリガヤ、アカシ、アリスガワ。ジンがリンドウ支部長の部屋で待っていると云っていたぞ』

「分かった。伝達ありがとうレプリカ」

アリスがレプリカの頭をひと撫でした。多分この光景を恋する乙女おとこ緑川が見たら相当羨ましがらるだろうな。

『お安い御用だ』

二人に手を振ってから支部長室まで歩み寄り、コン、コンとノックをした。すると中からは「入ってまーす」といういささか使う用途を間違っているような気がする返事が返ってきたので、苦笑まじりに扉を開けた。

「おつす。お疲れ桐ヶ谷隊諸君」

「こんばんは林道支部長。悠一」

支部長室にはまるで待つていたぞと言わんばかりの顔で座っている林道支部長と、何やらゲームをピコピコしてる悠一がいた。

「おうキリト。お前もやる？ドラ○EXL」

「XLだあ!!？」

正直ビビった。俺たちの世界では最新作がXXだったはずだ。いくらここが俺たちのいた20年後だと言っても、それだと1年に一本出してる計算になる。SEX、お疲れ様です。

「まあ、お前たちをここに呼んだのは他でもないんだ。あつやべ、凍てつく波動来た」

「お前ゲームやめて喋れよ。そこベホマラー使わねえと痛恨来たら死ぬだろ」

「林道支部長も参加しないでください。おい悠一。そこはとりあえずスクールかけて守備力上げとけよ」

「ミイラ取りがミイラになるなバカキリト」

セイに3人ともどこからか取り出したハリセンでぶっ叩かれた。この馬鹿力が。ハリセンなのに痛い。

「いつてて・・・じゃあ本題に入ろうか」

「おせえよ。バトマスもビツクリの遅さだよ」

やっと悠一が真剣な表情になって話し始めた。

「3日後の夜、うちの遠征部隊に三輪隊を含めた特別部隊が遊真の黒トリガーを奪いにくる」

「何?」

驚愕した。未来視のSEを持っている悠一が言うことだから本当なんだろうが、まさかそんな実力行使に出るとは。

「そんなメンバーで来るんだったら、俺でも確実に勝てるとは思わない」
「なるほど。だから俺たちも加勢しろってわけか」

確かに黒トリガーだからって悠一一人で何とかなるほど、ウチのトップは甘くないからな。

「そういうこと。電話で話しても良かったけど。もし城戸司令派に聞かれたら不味かったからね」

「ああ。現に俺あの時辻といた」

本当に危機一髪である。もしかしたら悠一の考えでこの作戦が終わっていたかもしれない。

「キリト達は名目上は忍田本部長派だからね。別に協力しても不自然じゃない」

「あ、その事なだけどさ」

「ん?どした?」

「これ受け取ってくれないか」

「……」 「お前一人で俺たちを相手に出来ると思ってるのか？」

薄暗い街の中で煌々と光る街灯だけが人を照らす。その中で対峙している一人の青年と集団。上の言葉は集団の中の一人の青年が言った言葉だ。

「まさか、いくら俺でもアンタらとやったら勝つのは確率が低い。いいとこ五分だ」
「そうか。ならお互い相手にするのは不利益だな」

迅の横をステルストリガーカメラオンを使った風間隊が通り抜ける。それを迅は分かっていたがあえて通すのを許した。否、止める必要が無かったのである。

「バイパー！」

風間達が通ろうとしていた道が滝の様に降ってきた無数のバイパーによつて完全に遮断された。足を止めた風間隊の前に新たな黒い影が出現した。その影は自分たちがいる場所を正確に斬り捨てた。何とか後退する事で事なきを得たが、あとコンマ一秒でも遅れていたら斬られていただろう。そしてその二つの影は集団の前で止まる事でようやくその姿を視認させた。

「・・・桐ヶ谷隊」

「なるほど。忍田本部長派と手を組んだか」

風間、太刀川がポツリポツリと呟く。その言葉をギリギリ聞き取ったキリトは、「違う違う」とその発言を否定してから叫んだ。

「本部所属、A級2位桐ヶ谷隊改め、玉狛支部所属、A級部隊玉狛第三、現着！」

本当は存在することのなかった、この世界。本来とは全く違うルートを走る彼らの鍵となるこの二人が、大きく未来を、突き動かす。

迅悠一②

「残念だけど、キリト達がいたら確実にこっちが勝つよ。俺のサイドエフェクトがそう言ってる」

「ははっ、面白い。久しぶりにお前の予知を捻じ曲げてみたくなったぜ」

太刀川さんがニヤリと笑う。この笑い方はマジで勝負する時にしか見せない笑いだ。

「あのさ、太刀川さん。なんか完璧にスルーしてるけどさ」

三輪隊の攻撃手、米屋陽介が前に出てきて言った。

「玉狛第三って、どゆこと?」

その場にいた全員（キリトたちと迅を除く）から「よく言った」という空気が流れ出た。

「別にどうって事はないよ。玉狛に転属したって、それだけ」

「なんでそんなことしたんですか！桐ヶ谷さん！」

そう叫んだのは、キリトの一番弟子である三輪秀次。近界民を毛嫌い、近界民を大事にする玉狛支部に猛反発している彼が、自分の師がその敵対派に入った事が解せないらしい。

「悪いな、秀次。ただ俺たちには守らなくちゃいけない奴がいるんだ」

その中に、近界民の中に、という言葉が隠れている事は察していた。そこで時は遊真達がボーダーに入隊した時まで遡る……

『これを受け取ってくれ』

そう言つてキリトが取り出したのは、3枚の紙。それを机の上に置いて林道に差し出した。

『なんだこりや、転属届け?』

『はい。俺たちが異世界から来たのはご存知ですよね』

『おう。そういやお前らが来てからもう2年かゝ早えな』

『凜花は俺たちが元の世界に戻るための鍵を握っています』

二人の目付きがギラツと変わった。

『なるほど。凜花を入隊させるには玉狛じゃないと無理だけど、それだとお前らがもしもの時守れないから、こっちに転属しようつて訳か』

『はい。それに……』

「俺たちはお前達とは違う世界の人間だ。そんな得体の知れない奴を玉狛で管理するのはいつものことだろ?」

その場にいたほぼ全員が何も言わず硬直した。いや、何も言えなかつたという方が正

しいだろう。

その中でただ一人、太刀川だけが硬直から逃れてキリトに尋ねた。

「てことは何か？お前らは近界民ってことか？」

その質問には赤司が答えた。

「実際にはそうではない。俺たちは地球でも近界でもないもつともつと遠い場所から来たんだ。でも、今の俺にそれを証明する手段はない。だから、お前達が今の話を信じなければ、俺たちはお前からからしたら人型近界民と変わらないという事だ」

その返答に太刀川の周りの全ての者が気持ちを様々にしたが、太刀川の一言で、頭にかかった靄を振り払った。

「もういいだろ。こういう時には目の前の事実だけに集中しろ。俺たちの目的は玉豹の黒トリガーの奪取。アイツらの目的は俺たちを黒トリガーにたどり着かせないこと。ならやる事は一つだ」

「ああ。その通りだ太刀川さん」

「目の前の敵を倒す」

その瞬間、意識を取り戻した風間隊がスコープオンを起動して特攻を仕掛けて来た。

「バイパーー！」

赤司のバイパーが風間と菊地原の足を止める。一人抜けた歌川が迅の懐まで潜り込

み、攻撃を与える。だがその攻撃を難なく避けた迅はブレードで歌川の肩を狙う。受太刀をした歌川のスコーピオンは抵抗も虚しくまるで竹ひごのように折れた。

「甘いぜ」

歌川の横をすり抜けて来た太刀川が弧月で反撃を繰り出そうとする。剣を振り抜いた形の無防備な状態からは抜け出せない……と思ったのも束の間、迅は無理やり体制を立て直してブレードで受太刀をした。風刃のブレード相手では罅迫り合いには勝てないと察した太刀川は風刃と弧月を滑らせ、ブレードがダメージを負わないように自分の方に剣を引き寄せた。

「旋空弧月」

旋空弧月。トリオンを消費して瞬間的に攻撃の間合いを伸ばす弧月専用のオプシヨントリガーだ。太刀川は弧月の間合いを1.5mほどに拡張し、迅達に斬りかかった。

「纏まってるやうにやういな」

『なあ太刀川さん。俺帰っていい?』

そう言ったのはスナイパーランクNO.1の当真勇だ。

「ダメだ。何考えてる」

『だってさ。迅さんは射線通してくんねー上に通つても予知で避けまくるし、カズさんは変態的に弾切るし、赤司さんに至っては弾に弾を当てて相殺した拳句迎撃してくんだ』

ぜ？自信なくしちゃうぜ全く』

「はあ・・・全く。出水。風間隊と俺とスナイパー二人で総攻撃で迅をやる。お前は三輪と米屋と組んでキリト達と戦って来い。当真。お前はキリト達に当たれ。なるべく粘ってから死ねよ」

「いや死ぬ前提っすか・・・」

「お前らがあいつらに勝てるなんて思っていないからな。足止めですら厳しいだろ」

本場の事を言われているので出水は反論する事が出来ない。赤司より先に入った自分は赤司と初めてやって以来未だに勝率は三割ほどだ。それがキリトも揃ってとなると勝てるビジョンが思い浮かばない。ウチがA級1位を守り抜いているのが奇跡なくらいだ。米屋の方を見ると、全力の師と思い切り対決できると思ってたワクワクしている様子だった。

なのでその意見に反論する者は誰もいないと思っていたが、ただ一人、納得の言っていない様子の者がいた。

「反対です」

「ああ。お前は反論するとおもってたよ」

そう太刀川が言った相手は、桐ヶ谷和人の一番弟子、三輪秀次。彼は自分の師が自分が毛嫌う玉狛に行ったとしても、師と敵対する事はしたくないのだろう。

「お前に拒否権なんてねーぞ秀次」

「陽介。いくらお前がなんと言おうと「見てみるよ」……!!」

そう促されて見た先には、ピンピンに殺気立ったキリトが目であつたえかけていた

『戦ろうぜ』と。

「……桐ヶ谷さんの頼みとあらば、仕方ない」

頼みではねーよと突っ込みたくなつた米屋だったが、ここで言うとならば逆効果そうだったのでやめておいた。

「全員合意だな。じゃあ行くぞ！」

「俺たちもだ」

5人が闇に紛れて飛び上がる。うち二人は、目に悲しみを浮かべながら。

「・・・さて、お三方。折角の機会だ。楽しくやろうぜ」

「目が楽しんでないっすよカズさん。あと、赤司さんは何で瞳孔開いてんすか」

「そりゃあ暗いからね」

「いや絶対素でしよ」

出水が鋭いツツコミを入れる。キリトが一瞬（太刀川さんとかツツコミどころ多いんだろなあ。唯我にはいつもツツコミ（物理）してるし）とかいう緊張感のないコメントを心の中でしていたのは秘密だ。そこにまだ納得していない様子の三輪が言う。

「・・・桐ヶ谷さん。やはり俺は戦いたくないです！」

「・・・秀次。本当は俺だって戦いたくないんだ」

キリトがさっきの殺気が嘘の様に笑いかけて言う。三輪もようやく分かってくれた！と喜びを見せたが、それも束の間、キリトが顔を険しくさせた事により崩れ落ちる。

「・・・けどな。もう止める事は出来ないんだ。俺たちはお前らの敵、お前らは俺たちの敵。こうなっちまったら・・・」

キリトが目ギラつかせ、相手を睨みつける。

「どつちかが死ぬまで終わらない」

「キリトの言う通りだ。この場では、勝者こそが正しい。最後まで立っていた者が勝者

なんだ。悪いが……」

「デスゲームで俺たちに敵うと思うなよ」

先ほども数段濃い殺気が3人に襲いかかる。完全初見の出水は思わず怯み、殺気に耐える訓練をさせられていた三輪と米屋は何とか堪えた。だが、その一瞬の隙をキルトが見逃す訳もなく、枯れ葉が落ちるのよりも早く出水を間合いに収め、先制攻撃をくらわせようとした。

「シャープネイル」

鋭い三連撃が出水を襲う。だがA級1位の射手が斬られるのをただ待っている訳もなく、

「メテオラー！」

地面に手をつきメテオラの爆発の反動で飛び上がった。爆発に巻き込まれないため双方共にフルガードを使用してダメージを受けるのを防いだ。

「へえ、やるな出水。流石出水。メテオラからフルガードへの切り替えとか相当シビアなテクニックなのによく被ダメ0に抑えられたな」

「いや俺の日々の努力の賜物です」俺の教えた技術をよく使いこなしてるじゃないか出水」ちよつ、何で言うんすか赤司さん！それにメテオラからのフルガードのくんだり
は元々俺の技でしょう!?？」

「あ、確かに手をついて弾ぶつ放すのって元々セイの技だもんな」

まるで普通の日常の様子に見えてしまうが、これも駆け引きのうちの一つである。話している中で相手の注意を引き隙を伺う。戦闘に重要な技術だ。

「はく……このめんどくさい駆け引きやめませんか？」

「ああ。俺もこの駆け引き苦手」

「お前はコミュ障だからな」

「はい。もう終わらせちゃいましょう」

出水がそう言った瞬間。周りのビルから窓を割って三輪と米屋が飛び出してきた。

「首貰うぜ赤司さん」

「ここで決めます桐ヶ谷さん」

槍特攻と二丁拳銃。それぞれが二人に習った技で二人の首を獲りに来た。全く警戒していないかった二人、シールドはブレードの強度を超える事は不可能。エスクードを出す時間もない。防ぐ方法はないと思っていた……だが二人はそれを認めることもなく、攻撃が来る方に手を突き出した。その手の中にあつたのは

「レイガスト」

レイガストの柄。キリトが起動句を詠むと、二人が片手ずつに握りこんでいたレイガ

ストが起動した。

『スラスターON』

静寂の中に機械音が響き渡る。この音は、弟子の二人が一番多く聞いて来た。

「不味い、これは！」

「スピニングシールド」

二人は突き出した手を開き、スラスターの推進力で手中の剣を円形に回転させ白く輝く光の盾を作り出した。

「うわっ！」「チィッ！」

二人の攻撃は光の盾によって弾かれ、槍を掴んだまま武器を弾かれた米屋は一緒に体制を崩した。その隙を見逃すことなく、赤司は回転の止まったレイガストを掴み、肩に担いだ。

(SE共有！限界重量拡張起動！)

『スラスターON』

機械音が再び鳴り響いた。今度は赤司の持つ剣だけが光を帯び始め、推進力を生み出す。

「デッドリーシンス」

片手直剣7連撃ソードスキル、デッドリーシンス。

限界重量拡張によってそのまま繰り出すより剣は遥かにスピードを増す。腕の振り、身体の捻り、スラストの推進力、全てが剣速へと変わる。

「避けられるか？米屋」

「ハッ、そうこなくっちゃ！」

米屋は崩れた体制から無理やり柔軟な身体の捻れを使つて最高速の7連撃を避けきつて見せた。

「今まで秀次の奇襲や、桐ヶ谷さんの超連続攻撃に赤司さんの超速攻撃とか散々食らつて来ましたからね！これくらい余裕つすよ！」

「へえ、流石だな。だけど」

米屋の着地した地面を無数の弾丸が貫通して来た。片足で着地していた米屋はその弾を避けることが出来ずに右脚を失った。何とかギリギリ膝から上をのけぞらせる事でトリオン供給器官と脳を守る事が出来たが、やはりあの精度は悔えることは出来ない。

「足元がお留守なのは感心しないな」

「ほんとなんなのそのお化け精度」

これには嫉妬せざるを得ない出水だったが、あの精度は赤司のSEである天帝の眼があるからこそ可能なものであるため、自分には到底真似できない芸当なのは分かっていた。

「多分くるだろうと思つてたけど、流石にキモすぎらつて赤司さん」

米屋の隣にズシヤッと反対方向にいた三輪が着地する。

「陽介。出水。連携して倒すぞ」

「はいよつと」「OK」

「キリト。今回は俺は援護に専念する。思う存分暴れてこい」

「了解」

赤司がキリトに剣を返す。

米屋と三輪がキリトへと特攻する。米屋の足はスコピオンを代わりにしているようだ。米屋が槍、三輪が二丁拳銃で両サイドから攻め込んでくる。

米屋は槍の持ち手を縮小して短剣タイプにした弧月とスコピ蹴りで素早い動きで常にキリトの首を狙う。三輪は二丁拳銃でバイパーと鉛弾を巧みに操りキリトの行動を制限すし、状況次第ではアステロイドも組み合わせ決めてくる。A級ですらこの二人を相手にすればすぐに倒れてしまうだろう。だが、

「お前らが俺の攻撃を受け続けて来たように、俺もお前らの攻撃を受け続けて来たんだ」キリトは二人の攻撃をずっといなし続けている。三輪が片手に弧月を構え、二人の攻撃が完全に同調し、キリトに斬りかかって来た時、キリトはテレポーターを起動し、二人の背後を取った。

「まだまだお前らに負けるわけにはいかないな」

二本の剣で二人の背中を一閃する。完全に不意をつかれた二人は背中に大きな切り傷を負った。

「アステロイド！」

三輪と米屋が射線から外れた事によって威力の高いアステロイドを撃てるようになった出水がフルアタックでキリトを獲りに来た。

「甘いな出水」

だがそのアステロイドも少し大玉にしてアステロイドの威力に対抗できるようにした赤司のバイパーで全て相殺されてしまった。だがそれはキリトを仕留める為のものではなく、

「さあ、くらえ」

自分のアステロイドと赤司のバイパーによる撃ち合いによって銃弾の檻を作り、スナイパー当真による狙撃に逃げられない為だ。この不意打ちの一発なら当たると、そう思っていた。

キーン！

だがその一発ですらキリトは弾を着る事で防いでしまった。さらに、

(じゃあ次は赤司さんをつと．．．ツーーー！)

赤司の方に照準を合わせスコープを覗くと、赤司はキリト達の方ではなく、自分の方を向いていた。

「うっへっこっわ、やっぱちよつと移動しよ『おいコラ当真！ボサツとすんな早く逃げろ！』お前年上に敬語使えよ。逃げろって何から」

全て言い切る前に当真は背後から全身を撃ち抜かれた。

（嘘だろ？一体誰が応援にきたんだよ・・・ああ、なるほど）

当真は床に空いた無数の穴で全てを察した。

（見られた時に既に『眼』が発動してて、後は足から出したバイパーをここまで届かせたってわけね）

「はく、もうこの任務やんない」ピキピキ

『戦闘体活動限界、緊急脱出』
ベイルアウト

当真が光の柱となって本部に飛んでいった。

「いや、あの一連が全部釣りとか、ほんとどんだけ戦い慣れしてんすか」

「まあな。これで漸く厄介な当真も消えたし、本気でやっていいよな」

赤司がキリトの隣まで歩み寄る。装備を接近戦仕様に変える。

「ここからは弾は各々で対応だ。いいな」

「了解」

その瞬間、三輪達の視界からキリト達が消える。

「クソツ！テレポーターか！「残念不正解だ」ガハッ！」

「おいどうした秀次！「心配なんかしてる暇があるのか？」ゲホッ！」
みるみるうちに3人の体に切り傷が付いていく。

「クソツタレ！姿が見えないから弾が当てらんねえ！」

「出水！気をつけろ！これは桐ヶ谷さんのスピードアップのSEだ！」

「それ気をつけたところでどうにか「ならねえよ」・・・ですよねー」

『戦闘体活動限界。緊急脱出』
バイルアウト

「さ、厄介なのはどっちも消した。思う存分やろうぜ」

二人共SEを解いて普通のスピードに戻り、そのまま突っ込む。

「もう速いのは終わりっすか？」

「残念ながらトリオンが保たないんだなこれが」

今度は真正面から剣戟を繰り広げている。キリトが三輪、赤司が米屋を相手取りながら。

「おいおいどうした？防戦一方じゃんか」

「くっ・・・付け入る隙がない・・・」

横を見ても米屋と赤司が同じことをしているだけだった。

(ダメだ・・・何か突破口を・・・)

『スラストーON』

(・・・！コレだ！)

三輪はキリトに習ったことを思い出していた。

『このスラストー斬りは重い威力が出せる分空ぶったり弾かれたりしてリズムを崩されると制御が効かなくなるんだ。だからレイガスト使いとやる時にはうまくタイミングをずらしてやる事が大切だぞ』

「そこだ！」

三輪は左手の弧月を捨て、生成した拳銃を向かってくるキリトの剣に向けて構えた。

「鉛弾！」

レッドバレット

二度発砲した鉛弾は二発とも命中し、キリトの剣の狙いを逸らす事に成功した。直ぐさま右手を剣を振り上げ、体制の崩れたキリトを狙おうとする。

「セアア！」

コレで決まった。何度目か分からない確信を抱きながら、同時に疑問も抱いていた。

(桐ヶ谷さんはなぜこんなにも分かりやすい隙を作ったんだ・・・あんな大振りの技で無くとも決めきる方法はもつとあつたらうに・・・)

「まさか！」

三輪は咄嗟に米屋と赤司が戦っていたであろう場所を見た。だがそこに二人の姿はなく、横からの奇襲の可能性はないと安心した。

(・・・ん？ 『二人共』 だと？)

「バイパー」

その疑念が解消される前に三輪の身体は真後ろから撃ち抜かれた。三輪が後ろをみると、そこにはこつちをチラリとも見ることもなく片手一本だけをこちらに突き出して米屋と戦っている赤司がいた。目の前のキリトは体制を崩して倒れ込む形になっていたお陰で被弾を防いでいた。

「そういうことだ。唯一のジョーカーである当真が消えた時点でもうこの勝利の未来は確立していたんだよ」

「・・・なるほど。流石だ桐ヶ谷さん。でも、貴方が人型近界民かもしれない以上、俺は貴方にはもうついていきません」

「・・・そうか」

「・・・今まで、ありがとうございました」

『戦闘体活動限界、緊急脱出』

三輪なりに精一杯の感謝を述べてから、光の帯となつて戦場から離脱していった。

「ああ。どういたしまして。・・・さーて米屋くうくん？」

三輪の感謝に対する返事を返してから、立ち上がり黒い笑みを浮かべながら米屋に近付いていった。赤司による攻撃の手から離れて一度一息吐いている米屋は、顔を引きつらせながら顔中に冷や汗という冷や汗を満遍なくかいて言った。

「お、お手柔らかにお願いします」

その後ももの1分程度で猛攻に耐えられなくなった米屋は光の帯となって逃げるように本部に飛んで行った。

迅悠一③

『太刀川さん。作戦終了だって』

時は米屋が落ちた後、太刀川組 vs 迅は菊地原と歌川がベイルアウトしたところから明らかに形勢は迅に傾いていた。太刀川組は必死に足掻いてはいたが、結果を見れば戦局を見事に迅にコントロールされていた。そこに届けられたのは、オペレーター国近からの作戦終了の通達。

「何？本部は俺たちが迅に勝てないとも思っているのか？」

本部の決定に納得のいつていない太刀川。同じく通信の届いていた風間とその通信を聞き取っていた迅は固まっている。作戦終了になった以上ここで戦闘を続けても双方にメリットがないからだ。

『実際勝ててないでしょ。それに三輪君たち全員ベイルアウトしたからキリ君達こつち来てるよ。迅さん一人にいつぱいいつぱいなのに勝てるの？』

「チツ……手の内を隠していたのは気にくわないが、今回は完敗だ」

「悪いね。生粋の能ある鷹なもんで」

「……だが風刃の性能は把握した。3週間後の正式入隊日までに、必ずお前を倒して黒

トリガーを回収する」

「ベイルアウト」

二人が光の帯となって飛び上がる。少し遅れて離れた場所から光の帯が上がる。スナイパー組だろうと仮定した迅は一安心して道端に寝転がる。

「は〜終わった〜」

「それが終わってないんだなこれが」

迅が上を見上げると、そこには笑みを浮かべてこちらを見下ろすキリトと赤司がいた。

「ほら、さつきと本部に行かなきゃいけないだろう？」

赤司の問いかけに答える前に、寝転がった状態から足を胸まで引き寄せて最大の反動をつけてから耳の横に手つき、全身のバネを使って起き上がる。

「分かってるよ。てかお前ら、秀次達とやって傷一つないのかよ」

「お前には言われたくないな。太刀川さん達とやって無傷とか人間辞めてんのか」

「まあ実際人間辞めた人を武器にしてるけどね」

さつきまでの戦いの面影は欠片も無く、そんな他愛もない話をしながら本部への道を進んで行った。

「一体どうなつとるんだ！」

ボーダー本部会議室に鬼怒田の怒号が激しく響いた。

「迅の妨害！トツプチームの潰走！だが何よりも」

鬼怒田は視線を忍田に移しまた叫んだ。

「忍田本部長！なぜ桐ヶ谷隊が玉狛側についた！なぜ近界民を守ろうとする!? ボーダーを裏切るつもりか！」

「裏切る・・・？ 論議を差し置いて強奪を優先したのは一体どちらだ？ これ以上強硬策を取り続けるのであれば次は桐ヶ谷隊ではなく・・・」

城戸の方をギリリと睨みつけて言った。

「私が相手になるぞ・・・城戸派一党・・・！」

そこまで言いきってから溢れ出す闘気を抑え込んだ。

「それに彼等はまだ玉狛の隊員だ」

「それだ！なぜ易々と桐ヶ谷隊の転属を我々に通さずに認めたのだ！」

鬼怒田の怒りが再発する。だが鬼怒田の言う事も最もだ。忍田派において桐ヶ谷隊は最高戦力となるほどの言わば切り札になりうる存在。そんな貴重な戦力を手放すのはたとえ忍田でも考えにくい。だからこの転属発覚は上層部内に大きな驚愕をもたらした。

「だからそれは言ったじゃない鬼怒田さん。あの茅場つて子に俺たちが帰る場所への道案内をしてもらう。その達成すべきプロセスの中にあの子の目的も含まれてる。ただの利害の一致だよ」

突然聞こえた聞き覚えのある声に議論に集中していた人間が一斉に入口の方を振り向いた。そこにいたのは先程発言をしたキリト、ニマツと笑って手を振る迅。澄ました顔でこちらを見つめる赤司がいた。

「きつさまらあ……よくもぬけぬけと顔を出せたものだな！」

「落ち着いて下さい鬼怒田さん。また血圧が上がってしまいますよ」

赤司に優しくフォローをくらう鬼怒田。そんな異質な場面でも眉一つ動かさない城戸が来訪者に向けて尋ねた。

「何の用件だ。宣戦布告でもしに来たのか」

その質問には迅が答える。

「違うよ城戸さん。ただ交渉に来ただけ」

「交渉だと？裏切っておきながら・・・」

「いや、本部の最精鋭部隊が倒され忍田本部長派とも手を組んだ。逆にこれ以上ない交渉機会ですよ」

「・・・して、交渉内容は何だ」

城戸が満を持して迅に尋ねる。わざわざここまで大掛かりなもの前振りをしてからの交渉。交渉内容が大きいものでも戦力的な威圧で幾らかはどうにか出来るはずだ。

「簡単なことさ。・・・ウチの後輩、空閑遊真と茅場凜花のボーダー入隊を許可して貰いたい」

「ハッ、だと思ったわい！そんな要求を飲めるわけが「こっちは代わりに風刃を出す」何じゃと!?？」

突然の思いもしなかった交換条件に思わず席を立つ鬼怒田。風刃を差し出すと言う事は、異様なまでに執着してきた自分の師である最上宗一を差し出す事と同義。だがそれでも迅は全く引くこともなく、

「そつちにとつても、悪くない取引だと思っただけ」

それどころか攻めの姿勢を示して来た。

（これは思いもよらない好展開だ・・・使えるかどうか分からない玉狛の黒トリガーよりも、A級トップ数隊に匹敵しなおかつ適合者の多い風刃の方が遥かに価値がある・・・）
（それで入隊させた近界民が問題を起こしたとしても・・・天羽と風刃で問題なく対処できる・・・実質リスクなしで風刃を手に入れるようなもんだ・・・！）

「取引だと・・・？」

取引という単語に反応した城戸が迅に言った。

「そんな事をせずとも私は太刀川たちとの戦闘を理由に、隊務規定違反としてお前かららトリガーを没収することも出来るのだぞ？」

「それなら好都合。平和に正式入隊日を迎えられるのならそれでいい」

「その時奪うのがお前のトリガーだけだと言ったら・・・？」

「やってみなよ。そんな無理が通るかどうか」

二人の間で目線の火花が散る。そんな中でその様子を傍観していた赤司がようやく口を開いた。

「空閑と茅場の存在は城戸司令。貴方の真の目的にも大きく関わっていますよ？俺のサイドエフェクトがそう言ってる」

城戸の顔がやや曇る。だが一息吐いてからすぐに言葉を発した。

「いいだろう。特例として空閑遊真と茅場凜花の入隊を許可する。並びに、桐ヶ谷隊の

玉狛転属も同時に許可する」

「迅速はやつたぜと3人でハイタッチを交わす。それを見て城戸は迅へと尋ねる。

「迅、お前には何が視えて・・・」

「・・・悪いけど、それは言えない。言う事で未来が動いちやう可能性もあるからね」

「・・・そうか」

その会話を最後に、迅は会議室を後にした。だが桐ヶ谷隊の二人は扉の前で立ち止まって、上層部の面々に顔を向けて頭を下げた。

「皆さん。行く宛の無かった俺たちを今まで支援してくれて、大学にまで行かせてくれてありがとうございます」

「恩を仇で返すような形になって本当に申し訳ないです」

目の前で若者二人に頭を下げられては、大人としてきちんとした対応を取らなければならぬと、そう感じた。

「フン、お前らはワシらに協力してくれた。その対価を与えてやつただけじゃわい」

「そうですよ。どうせ玉狛に行ってもしっぴかり働いては貰うんだ。残りの恩はこれから返しなさい」

「それに私たちは、仇で返されたなんて微塵も思っていないさ」

「そうそう。学生時代をこんな戦場で過ごすより、青春に生きて欲しいと我々が思った

から援助をただけだよ」

鬼怒田、根付、忍田、唐沢がそれぞれ思いを口にする。城戸は何も言わなかったが、言いたい事は大体理解できた。

キリト達は頭を上げて、また扉の方に向き直った。そうするとキリトが何かを思い出したように今度は顔だけを後ろに向けて言った。

「じゃあ、今までのお礼に一つアドバイス。〇〇社かその提携の株を持つてる人がこの中にいたら、さつさと売った方がいいよ。この前のイルガー爆撃事件で本社が塵になって、今地盤がガタガタで崩壊寸前らしいから」

数人が身体をピクリと反応させたのを見届けてから、キリトたちは会議室を後にした。

「おお、用事は終わったか。じゃあ行こうぜ」

他愛もない話をしながら本部出口への道を歩んでいると二つの影が姿を現した。敵襲か、と思いきや即座にトリガーを手に取ったが、影の正体が露わになった事でその心配は杞憂に終わった。

「……………よう、お二人さん。悠一のぼんち揚食う？」

「……全くお前は意味不明だな。何あつさり風刃渡してんだよ。勝ち逃げする気か？」
迅からぶん取ったぼんち揚をポリポリと噛み砕きながら太刀川が尋ねる。

「今すぐ取り返せ！そんなでもつかい勝負しろ！」

「無茶言うね太刀川さん……」

「黒トリガー奪取の指令は解除された。風刃を手放す気があつたのなら、最初からそうすれば良かっただろう」

風間の問いかけに「いやいや」とかぶりを振ってから答えた。

「昨日の時点じゃ風刃に箔が足りなかった。太刀川さん達を蹴散らしたからこそ、この取引が生きた」

「……俺たちを利用して風刃の価値を引き上げた。ということか」

「ご名答。それがプランB」

だがその作戦を理解しても一つだけ納得のいっていない部分が太刀川にはあつた。

「でもよ、キリト達の転属をよく忍田さんが認めたよな。お前らが玉狛に移動したら戦力差は一気にひっくり返るだろ？」

太刀川の質問にベンチに腰掛け熱いお茶を嗜んでいたキリトが立ち上がって答える。

「・・・署名を集めたんだよ」

「署名？」

時は2日前まで遡る。・・・ここは本部長室。そこにいるのは室内の机に座っている忍田本部長。そしてその机の前にいる桐ヶ谷隊メンバー、林道支部長。

「・・・玉狛への転属だと？そんな事したら今まで拮抗していたパワーバランスが崩れるだろう」

『ええ。分かっています。だからこれを用意してきました』

赤司は一枚の紙を取り出した。

『派閥無し自由派の署名を集めました。加古隊影浦隊那須隊と、これだけの戦力を忍田派に吸収すれば、城戸派や玉狛支部にも引けを取らない戦力を確保する事ができます』

『そうきたか・・・だがそれでも他勢力とウチでは届かない黒トリガーの差があるだろう。それを埋めるためにはお前達の力が必要なんだ』

『それに関してなんだけだよ』

林道がようやく口を開いた。

『俺たち玉狛と忍田派、意見が食い違うことなんて早々ねえんじやねえか?』

『……どういう事だ? 近界民を庇うやり方と三門市の防衛第一。進む道は全く別だと思
うのだが』

『そこだよそこ。俺たちだって全部の近界民を庇う訳じゃねえ。悪い近界民とは戦う
し、もちろん三門市も守るぜ。俺たちがいがみ合うのは城戸派の奴らとだけだ』

『……結局何が言いたい』

『結論から言うと、桐ヶ谷隊を貰う代わりに、忍田派と城戸派がいがみ合う事になった場
合には、俺たち玉狛支部は忍田派への全面協力を約束する。これが交換条件だ』

『ちなみにこの署名は俺たちが転属した前提で書いてもらっているので、この契約を飲
まなかった場合は破棄となります』

忍田は赤司と林道の流れるような話運びにため息を吐く。赤司にこういう系統の話
をさせるだけでこちらの勝ち目は薄いのに、性格が捻じ曲がった林道まで参加するとな
ると手がつけれないからだ。結局忍田は抵抗する間もなく桐ヶ谷隊の転属を許した
という。

「……という訳さ」

「……何というか、ただただお前がドヤるんじゃないと言いたくなくなったな」

「それは俺も思った」

キリトの説明に風間は愚か赤司までツツコミを入れる。そこで迅がパン！と乾いた音を出して自分に視線を集めてから言った。

「まあともかく、これで全ての疑念は解消されたよね。俺そろそろ帰って寝たいんだけど」

「ああ、時間を取らせたな。迅、桐ヶ谷、赤司」

「いえ、そんな事はありませんよ」

全員がその場を去ろうとしたところで迅が「あ」と何かを思い出して、振り向いた。

「それともう一つ。俺黒トリガーじゃなくなったからランク戦復帰するよ。とりあえず個人で攻撃手一位目指すからよろしく」

その言葉に太刀川がバツと振り返り弧月の抜剣もかくやというスピードで迅に詰め寄り肩をバン！と叩いた。

「そうか！お前もうS級じゃないもんな！そうだそうだ！何年振りだ？3年ちよつとか！こりやあ面白くなってきた！なあ！風間さん、キリト！」

キリトがこれまた言い忘れていたという表情になってからそれを誤魔化すように言った。

「あれ？言つてなかったつけ。俺もう玉狛に移り住む事になったからしばらく本部には

顔出さないけど」

「はあ？」

太刀川が素つ頓狂な声を出す。

「そうか、本部に住んでたお前らが玉狛に異動したらそつちに住む事になるのか。おいおい寝言言つてんじゃねえぞキリト。さつさと転属届破り捨てて戻つてこい」

「だからアンタには常識つてものがないのかよダンガーさん……まあ安心しろよ。今回の取引で入隊させた近界民のうちの一人。そいつがウチのチームに加わるからさ。そいつと俺たちの波長合わせに時間を使いたいんだ。次のランク戦では一位貰つてくぜ」
いつのまにかキリトの方に詰め寄っていた太刀川がキリトから離れ、ニヤリと笑みを浮かべた。

「……そいつは、楽しみにしておくぜ。だが、お前らのチームに入つてお前らの連携を崩したりしないのか？ 最悪唯我みたになるパターンじゃないだろうな」

「大丈夫だよ、足を引つ張るところか逆に俺たちが引つ張らないか心配なくらいだ」

「そうか。お前がそこまで言う程の奴ならさぞかし強いんだろうな。それと、個人ランク戦にも偶には顔出せよ」

「ああ。例えポイント上でお前に勝つたとしても、お前を倒さなければ本当の2位を勝ち取つた事にはならないからな。赤司も偶には参加しろ。お前がランカーでなくとも、

俺はお前よりも上だとは思ってないからな」

太刀川だけでなく風間も便乗して釘を刺しにくる。こんなに自分達を待っている人がいるのに、何も言わずに黙っているキリトではない。

「ああ。こつちこそ玉狛で鍛えて個人でも一位狙ってやるよ」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

そう言つてキリト達はその場を後にし、玉狛への帰路を辿つた。

sideキリト

「ただいま」

玉狛支部の面々が集まるリビングに悠一の帰還報告が響き、全員の視線が集結する。その中で遊真が迅に返事をする。

「おかえり迅さん、キリト先輩、セイ先輩」

「おお遊真。ボーダーのトリガーには慣れたか？」

「うん。小南先輩に勝ち越す日も近い」

遊真が目の横に星を浮かべるエフェクトを見せた。……ん？あれどうやってんだ？
と思っていると悠一が「そうか」と言つて口にテーパーに置いてあつたマカロンを三つ
四つと詰め込んで言つた。

「励めよ少年少女。その努力は必ず結果となつて身を結ぶからな。んじやおやすみ」

「口に物を入れたまま喋るな」

「ちゃんと歯磨けよ」

そそくさと出て行くこうとする悠一に俺とセイでダブルツツコミをかます。悠一は
「はあくい」と子供のよな声を出してリビングから出て行つた。

「さてと、じゃあ俺も寝るかな「あの、キリトさん、セイさん」ん？何だ凜花」

一度伸びをして歯を磨きに行こうとすると、凜花に服の裾を引っ張られた。

「出来ればなんだけど……寝る前に一本お願い出来ない……かな？」

稽古のお願ひだった。少々躊躇いながらなのは、今日の戦闘で疲れている事を見破ら
れたからだろう。全く、遠慮する事なんて無いのに。

「いいぜ。一本どころか、徹夜上等だ」

凜花の顔がパアアと明るくなる。こんだけ明るい無邪気な笑顔を見たのは、秀次と最
初に会つた時以来かもしれない。

「よろしくお願いします！」

セイと凜花とアリス、こいつらとなら何でも出来る気がする。

「よし！んじゃあやるか！」

「「おおー！」」

このこいつらの輝くような笑顔。この笑顔を失いたくない。もう2度とこいつらに、人を失う悲しみを味わって欲しくない。こいつらと、悲しむ人を少しでも減らしたい。

その悲しみを知っている俺たちだからこそやれる事、俺たちの結末は決して、誰にも壊される事はない。この時はそう、思っていた。だがその結末は思わぬところで崩壊を迎え、多くの悲しみを呼び寄せる事となるとは、この時は誰一人として、予想だにしていなかった。

桐ヶ谷和人②

争奪戦から3週間。修達の学校も俺たちの大学も冬休みに入り、ついに遊真達の正式入隊日がやってきた。周りに多くの新C級隊員がいる中で、A、B級である俺とセイ、修はかなり目立っていた。周りの隊員から「なんか俺たちの中から有望株を引き抜いてチームに加入させるらしいぜ」「てことはここでアピールすればワンチャンA級狙えるってわけか」とか聞こえてくる。まあただの引率なわけだから引き抜きでも品定めでもないからアピールしても意味はない。隣を見ると修が遊真と千佳に向かって自分の目標を確認している。

「いいか。二人共。まず空閑は攻撃手、千佳は狙撃手でB級に上がる」

「そしたら俺と修と千佳でチームを組んでA級に上がって」

「必ず遠征部隊に選ばれる」

まるでお芝居のような流れる台詞の連携だな。目標がすっかりしているのも何よりだ。だが……

「修。お前らいつまでそれやってんだ？支部出てからずっとそれじゃねえか。取り憑かれているようにすら見えるんだが」

「いや、緊張してしまつて何かする事と思つて何かしようと思つたびに最終的にこれに辿り着いて……」

手のひらに書く人感覚かよ。修が緊張しちやつてどうすんだか……。そんな事を考えてたら、ステージの幕がゆつくりと上がつていき、壇上に嵐山隊の嵐山、佐鳥、時枝、木虎が出てきた。

「おつ、始まるみたいだな。また嵐山隊か。頑張るなあ……。修の時もだつたら？」

「はい」

やつぱり嵐山隊はすごいな……。アイツら広報とかの仕事こなしながら6位の座にいるわけだし。まあ唯一気がかりなのが木虎が毎回壇上でポーズとつてることだけだ。

そこから嵐山隊の挨拶からボーダーの説明に入ったが、俺たちはそのタイミングで上に上がった。実は俺たちが本部へと来たのはこれからのことが本当の目的なのだ。引率だけなら別に修たちだけでも大丈夫だし、後から京介も来るつて言つてたしな。

俺たちが向かったのは本部の屋上。トリガーを認識パネルに当て扉を開く。するとそこには既にボーダーの本部長であり、防衛部隊指揮官である忍田さん、ボーダーの

最高責任者である城戸さん、我らが玉狛支部の支部長を務める林道支部長、そして屋上にバリボリとぼんち揚のカスを撒き散らす街の散らかしエリート迅悠一の4人がいた。

え？悠一の紹介がひどいって？仕方ないよ。だって悠一が支部で食べ散らかしたぼんち揚のせいで買ったばかりだっていう掃除機がぶっ壊れたんだもん。

「待つていたぞ。赤司、桐ヶ谷」

「はい。待たせてしまい申し訳ありません」

腕を組んで仁王立ちをしている城戸さんに対して挨拶を返す。他の隊員には悠一とかを除いて〇〇隊員っていうのに、なぜ俺たちは呼び捨てなんだろうかというのをこの1年半色々考えているが、答えはまだ出ていない。それとこれは伏線でもなんでもない。

「よし、では始めるぞ。赤司。途中でトリオン体になつたりしていないな？」

「はい。問題ありません」

「分かった。では迅。頼む」

「あいあいさー」

忍田さんの指示に敬礼して答えた悠一が屋上の端に歩み寄り、三門市を見渡す。一

回、二回と深呼吸をした後・・・

「ーーーーっ！」

一気に目を見開いた。悠一のS E、『未来視』の発動シークエンス。いつもは別にこんな大掛かりな動きはしないのだが、今回は街全体と街の人々を一度に「視る」ので話は別だ。

「……ガハツ！ハアツ、ハアツ！ハアツ！」

「大丈夫か、悠一！」

「ハア、ハア、大丈夫だよ。ちよつと色々情報を詰め込みすぎただけさ」

悠一の疲れ方が尋常ではないが、もう慣れたことのようにダメージはあまり見当たらない。だがこの疲れ方は今までになかった。これは……

「……視えたのだな。迅」

「ああ、アンタの欲しがってた情報手に入ったよ。城戸さん」

「では赤司。バトンタッチだ」

「了解」

次はセイが屋上の端へ寄った。そして林道支部長がポケットから黒い柄を取り出し、セイへと投げ渡す。セイはそれを前を向いたまま見事にキャッチし、脱力する。

「トリガー起動」

セイが起句を唱えると、体がトリオン体へと換装され、手の中の黒い柄から緑色ブレードが現れる。そう。かつての悠一の黒トリガー、風刃だ。

「ふうー………っ！」カッ！

セイが目を見開くと、セイの瞳に光輪が描かれる。今度はセイのS E、『天帝の眼』エンペラーアイだ。セイは未来を見続けながら立ち尽くしている。そのセイの姿を腕組みしながら見ていると、いきなり頭に強い頭痛が来て、誰かの声が頭に聴こえてきた。

『キリト君……キリト君……』

顔を悲痛に歪め、右手を頭に当て目を閉じた。頭の痛みに必死に耐えながら、聴こえて来る声の主に対して答えを返す。

(だれなんだ……！出て来い！)

『……私が出向かずとも、君なら、こちらの世界への扉をこじ開けられる。なぜなら、君は……私に勝ったのだから』

……そうか……お前は……

そういう事ならば、話は簡単だ。お前はずっと、俺たちの事を見守っていたんだな。だけど、もう我慢できなくなっただら？人のやっているゲームを横から見ることほど、つまらないものはないからな。

(……ああ、俺は、剣士キリトだ！)

そう頭で強く言い放つと、電撃の音と共に頭痛が消えた。頭から手を離し目を開けると、そこに広がっていたのは、トリオンで作られた灰色のタイルで敷き詰められた

ボーダー本部屋上と、この2年過ごしてきた見慣れた三門市の街並みではなく、視界全体に広がる夕焼け空だった。

「……ここは……?」

「ここは私の作り出した電脳空間さ。赤司君が予知に使う膨大なトリオンを少し利用させて貰って君をここに読んだんだ。キリト君」

「……へえ、随分と面白いものを作ったじゃないか……茅場晶彦」

振り返るとそこに立っていたのは、白衣を身に纏い、こちらを見つめる一人の男。紛れもなく茅場晶彦その人だ。

「2年ぶりだな……。いや、初めましてか。お前は俺たちの世界の茅場じゃあないんだろ?」

「流石の鋭さだね。異世界のキリト君」

なぜか、本能的にそう分かった。コイツは俺の戦った「ヒースクリフ」ではないと。「あの時力を貸してくれたのは、お前だったんだな?」

「ご名答。その通りだよキリト君」

俺の言うあの時とは、今から約半年前。イルファング・ザ・コボルドロードが三門駅の駅ビルに出現した時のことだ。コボルドロードに俺がトドメを刺した直後、アイツは最後の力で野太刀で修に斬りかかろうとした。俺はその時とつさにレイガストを投

げてコボルドロードの手首から下を切り落とした。その時に俺がとった行動の中に思い当たる事が一つ。

「お前はあの時、俺の刀剣スキルにソードスキルの力を付与したんだろ？」

「HP切れになったボスモンスターが動くなんて、設計者としては黙っていられないからね」

やっぱりコイツの仕業だったか。結果として修の命を救うことができたから感謝しかしていないけど、ついにコイツは、現実世界のG Mゲームマスターにまでなっちまったんだな。

「さて、ここからが本題だ。君も大体の事は、分かっているんだろう？」

「ああ」

コイツが俺をここに呼んだ理由。それはさっきの茅場の返答で察する事が出来た。

「俺にこつちの世界の茅場を救ってほしいって事だろ？」

「・・・その通りだ。どうか私の代わりにあの子を・・・凛花とこの世界の茅場晶彦を救ってほしいー！」

茅場にしては珍しい、感情を剥き出しにした声で俺に向けて頭を下げた。

「・・・知っているんだな。凛花の事」

「ああ。私はこの電脳空間に來た事で、他のパラレルワールドの私の事を共有できるようになったんだ。無論、凛花や遊真君、勇吾の事も知っている」

「へえ……そいつは便利だな。色んな世界を見て回るなんてとても楽しそうじゃないか」
「……そのようなものではないよ」

茅場が悲痛に顔を歪めて俯いてから囁くような声で言った。

「これまで多くの世界を見てきた。私が死ぬだけの世界ならまだしも、妻が、娘が、私の関係者が死んでしまうような世界を多く見てきたんだ……。それに、私がその世界に口出しをする事は出来ない。それが出来るのは自分の世界の人間と君たちの世界の茅場晶彦とだけだ。今のようにな」

……それは確かに、俺ならば耐える事の出来ない心の痛みだろう。それに耐えてまだ自分の意思を保っているのは、自分が元々人を殺していたからであろう。あの……ソードアートオンラインで。

「今まで私が見てきた凜花が生まれてきた世界は、ことごとくバッドエンドで終わっていた。だが、この世界にはまだ希望が残っているんだ！キリト君とセイ君、この世界に飛ばされてきた君達という希望が！」

この茅場の言い方からして、この世界に俺たちが迷い込んだのはコイツの仕業ではないのだろう。コイツなら俺たちが元の世界に戻る手がかりであるあの女の事を知っているかと思ったのだが……甘かったようだ。

「頼む！あの子を……この世界の私を……救ってやってくれ！」

ここまで感情的になれたのか。正直どんなことでも冷静さを欠かさず、無表情な奴だと思っていたんだが、今では涙を流して、顔も見るに耐えないものとなっている。これを見せられたら、漫画の主人公とかは、助けてやるだろう。だが・・・

「ふざけるな！」

俺は違う。茅場の顔面に渾身の右ストレートを叩き込み、茅場に尻餅をつかせた。茅場は殴られた箇所を抑えながら呆然とこつちを見つめている。

「救ってやってくれたと!?寝言言ってるじゃねえぞ！お前は今まで何をしてきやがった！あのSAOで死んだ人々へ向けて、何かしたか！何もしてねえよなあ？だってあの世界では、弱い奴が負ける事は当たり前前の事だったんだからよ！罪もない人達を殺しまくった快樂殺人者の teme が人を救ってくれだあ？まずは自分の罪と向き合ってから言いやがれ！」

どんな辛いことを経験しようが、コイツがSAOで一人の人を殺した事実は変わらない。そのコイツが人の命を救ってほしいと願うとは、ちゃんちゃらおかしい話だ。俺はポケットに入れていたトリガーを起動して、茅場へと剣を向けた。

「勝負だ。茅場。システムアシスト全開でいいぜ。今度こそ俺はお前に勝って、お前を現実からも仮想世界からも消し去ってやる」

俺は茅場に立ち上がるよう命令する。コイツには戦う以外の選択肢もある。だが、

俺がそんな選択肢を認めるわけがない。

「お前が戦わないのであれば、俺は現実で凜花をこの手で殺す」

その言葉に反応した茅場が、立ち上がりこちらを睨みつける。

「そんな事をさせてたまるか！」

茅場もデータを操作して、かつての《神聖剣》ヒースクリフの姿となる。

「逃げなかつた事は褒めるぜ茅場。さあ、始めようか」

SAOの時と同じように、左手を振るとウィンドウが出てきた。俺はその中から慣れた手つきでデュエルボタンを選択した。

「完全決着モードだ。SAOと同じ、敗れた方は死。電腦世界なんてのを作ったお前なら、ここで俺を殺すことぐらい簡単だろ？」

「ああ。・・・設定を変更した。このデュエルに負ければ君は現実世界でも命を落とし、この電腦世界からも消える事となる」

デュエルのカウントが始まる。60秒後、スタートの合図が鳴れば、その瞬間から俺たちの殺し合いのスタートだ。

カウントがどんどん減っていく。残り10秒を切り・・・7秒、5秒・・・3・・・

2・・・1・・・

「スラスターON！グラスホッパー！」

スタートと共に俺は右手のレイガストのスラスターとグラスホッパーを起動。一瞬で茅場に詰め寄る。右から左への斬り払い。この一撃は盾によつて難なく止められてしまった。だがこれは想定済み。これでヒースクリフの胴体はガラ空きだ。SAOではこの状態から攻撃をする事は出来なかつたが、今の俺はSAOプレイヤー、黒の剣士キリトではなく、ボーダー隊員、桐ヶ谷隊長桐ヶ谷和人なのだ。

「スラスターON!」

盾と接触している右手の剣のスラスターをそのままにして、左手の剣を逆手で持ちスラスターを起動させた。着地させた右足を軸にしてスラスターの推進力で無理矢理回転し、ヒースクリフの心臓に突きを喰らわせようとした。これなら盾は右の剣で動かせないし、ヒースクリフは盾に体を完全に入れ込んでいたのでこの攻撃を防ぐのは不可能と思われた。

バキーン!

だがヒースクリフはいつのまにか左手に持つていたはずの盾を右手に持ち替え俺の突きを弾く。右手の剣は左手に持ち替えた剣で受け流された。

(マズイ、背中がガラ空きになる!)

背後から突きが迫ってくる。だがキリトはあえてそれを防がなかつた。そして剣先が一ミリほど刺さったタイミングで。

「グラスホッパー！」

体の中にグラスホッパーを作り、突きを跳ね返す。早く作ってしまったと、それを認知した茅場はシステムアシストによって攻撃を変えてしまうだろう。だから僅かに剣が入り始めたその瞬間に弾いたのだ。

「っ！」

弾いた時の衝撃に耐えきれず、ヒースクリフが剣から手を離れた。すかさずもう一度両手の剣のスラスターを起動し、推進力を利用した回転で左の剣でヒースクリフの剣を遠くへ突き飛ばした。ガラ空きになった左半身に右の剣を斬り払いヒースクリフの心臓を狙う。

「無駄だ！」

またもやシステムアシストで盾を動かさず、完璧にガードする。今度は左の剣の突きで狙うが、その攻撃もシステムで完全にシャットアウト。最早ただの攻撃でダメージを喰らわせるのは不可能に近いだろう。

(クソツ……こっちは傷が付くだけで動きに支障が出るけど、あつちは完璧に斬り落とすでもない限り正常な動きをしてきやがる……。圧倒的に不利だ)

その時、少し前にセイが言っていた事を思い出した。

『かつての俺の仲間に、面白い奴がいるんだ。バスケ部の仲間だね。相手の視線を自分

以外に誘導して姿を消すんだ。アイツがいるとすぐく試合が組み立てやすかった」
 (・・・やってみるか)

一度体制を立て直し、右手の剣で斬り払いを仕掛ける。そしてそのタイミングで左の剣のスラスターを一瞬起動。そのタイミングで自分の視線を左の剣へと一瞬移動させる。すると見事にヒースクリフの視線と注意が左の剣へと行った。

(今だ！)

斬り払い中の右の剣を地面と平行にする。すると体が型にはまり、電腦空間に無機質な機械音が響く。

『スラスターON』

「セアアアアアア!!!」

叫びと共に剣が加速する。俺だけでなく、セイの思いも乗せたこの一撃。全ての加速を力に変え、ヒースクリフへと迫る。だが、一瞬のノイズの後、また盾が自分の前に立ち塞がる。

(頼む！ここで終わるわけにはいかねえんだよ！俺は元の世界に戻って！)

「セイを、アリスを、凜花を、救い出さなんだああああ!!!」

その瞬間、体と剣が見えない力によって更に加速する感覚に陥った。

そうだ。これは、スラスターによる無理やり生み出した加速ではない。自分が制御

するのではなく、自分に力を貸してくれる、見えない力。まさしく、これは、

「………システムアシストによる、本当のソードスキルだ。」

刀身がスラスタアの白い輝きと共に青白い輝きを放ち始めた。その光は混ざり合
い、まるで光のような速さを生み出す。そして、次の瞬間

バキーン!!!

先程聞いた盾と剣の接触音が大きくなり再び耳に届く。だがさつきとは違い、弾か
れたのではなく確実に剣は進み続けた。その剣の行方は………

「……完敗だ。キリト君」

その剣はヒースクリフの心臓のところまで推進を止め、横に入った剣傷と共に深々と
胸に突き刺さっている。

「まさか、このタイミングでソードスキルを習得するとは思わなかったよ」

「ああ。俺も驚いたよ。まさかソードスキルがお前の与えた能力ではなく、俺に元から
宿っていた能力だったとはな」

ソードスキルが発動した時、俺の頭にこのソードスキルに関する情報と、コボルド
ロードの時にヒースクリフが俺の能力を操作していたのが見えた。コイツはあの時、俺
の剣にコイツの力を付与したのではなく、俺のSEである『システムスキル』に元から
眠っていたソードスキルの力を瞬間的に目覚めさせたただけだったんだ。つまり、俺は俺

の力で勝てたという事になるのだが……
「納得いかねえな」

ソードスキルを使つて勝つたという事は、ボーダー隊員、桐ヶ谷和人の勝利ではなく、S A O プレイヤー、キリトの勝利だという事だ。俺はそこが気に入っていなかった。「そんな事を気にする必要はない。それは紛れも無い君の力だ。黒の剣士キリトも、桐ヶ谷隊隊長桐ヶ谷和人も、君だということに変わりはないのだから」

「そこについては俺ももう受け入れた。だがそれと今回の勝ちとは話が別だ。俺はこれを勝ちだとは思わない。だから、一つだけお前の要望を聞いてやる」

俺は一度深い深呼吸をしてから、ヒースクリフ……いや、茅場に向き直つてから言つた。

「凜花は、俺に任せておけ。アイツは俺が何があつても守り抜いてみせるよ。俺達の剣と……お前に貰つたソードスキルで」

これが俺なりのケジメだ。元から凜花の願いは聞くつもりだったからな。コイツのいう事を聞くのは気に入くないが、負けた俺にはそれをしなくてはならない義務がある。

「キリト君……ああ。娘を、よろしく頼む」

「ああ。このアインクラッドに誓つて」

自分の隊服のエンブレムをトントンと叩いて見せると、茅場はフツと柔らかく笑みをこぼした。茅場の体が綻んでいくのと同時に、電脳世界も崩れていく。世界の主がいなくなった事で、維持が出来なくなり、崩壊を始めたのだろう。もうここにも長くはいられない。話すならこれが最後だろう。俺は最後に何か言い残した事はないかと考え、まだ一番大切な事を言っただけでなかった事を思い出した。

「茅場。俺を、SAOに出会わせてくれて、セイと、アリスと、アスナと、クラインと、エギルと、アルゴと、悠一と、凜花と、遊真と、出会わせてくれて、ありがとう。別れは多かったが、その代わりにお前は俺に多くの出会いをくれた。本当に感謝している」
「……そうか。では私も」

もうすでに肩から下が消えてしまっている茅場が、最後に懸命に口を動かし、俺に伝えてくれた。

「私にこんな素敵な最後を与えてくれて、娘に楽しい時間を与えてくれて、本当にありがとう」

それだけ言い残して、茅場は完全に電脳世界からも姿を消した。それと共に、電脳世界が眩い光に包まれ、消滅した。

目を開けると、そこには見慣れた三門市の風景が広がっていた。振り返って時計を見ると、屋上に来た時から時間はほぼ変わっていないので、電脳空間にいた時の時間はこつちでは進んでいなかったようだ。トリオン体に換装されていたはずの肉体も、今では生身に戻っている。だが戦いの感覚は、体が全て覚えている。あれは絶対に夢ではなかったと、自信を持って言える。

さて、茅場の介入によって忘れかけていたが、今はセイの未来予知中である。予知が始まってから30分が経ち、今もセイは屋上の端に立ち尽くし、三門市を見渡している。

すると、いきなりセイの換装が解け、風刃がただの黒い柄へと戻る。

「………終わりました」

「……そんな平然とした顔で言われると、あんなへばった俺がしよぼいみたいだなく」
「そんな事はないさ。俺とお前では能力の性質が違うだけだよ」

悠一が頬を膨らませてセイに言った。それでも表情は二人とも全然変わっていないから、未来視コンビの会話は怖い。

「それで、結果はどうだ？」

「はい。かなり道が絞られていて、正確な未来が視えました。敵の姿の確認も成功です」
「そうか。ではその情報をできる限りデータにまとめ近いうちに渡してくれ。きたる

大規模侵攻に向けて対策を打つ」

そう。俺たちのやってきた事は大規模侵攻への情報収集。悠一がいきなり近いうちに大規模侵攻が訪れるという予知をした数週間前から数日おきにこれをやっている。なぜ二人の予知能力者を使ったり、風刃を使ったりと分かっていない読者様もいると思うのでここで一旦解説を入れよう。

まずなぜ悠一、セイの予知予知コンビを同時に使ったのかというと、先程セイが言った通り二人の予知能力は少し性質が違うのである。

悠一の予知は一定のトリオンを使って一定の未来を「視る」ことしかできない。不確定な未来は短く、可能性の高い未来は長く、という風にな。

一方セイの予知は、トリオンを多く注ぎ込むだけ不確定だろうがなんだろうが長く未来を「視る」事ができる。だがそれにもデメリットはあり、要所要所を切り取って視る事が出来ないのです、どうでも良いことも重要なことも限られた時間の中で全部視なければいけない。

簡単に言えば悠一の予知は500円でラーメン一杯を食っていて、セイの予知は500円のラーメンに替え玉をして好きなだけラーメンを食っているんだ。例えば絶望的に下手くそだが。

この作戦はまず悠一の予知で大規模侵攻のことについてある程度詳しく知ること

が絶対条件だったんだ。悠一の予知は一度に多くの未来が視える。だから視えた全ての選択肢を考慮した上で、それに対して全ての隊員に対策が降りる未来ができる。それによって誰がどう動くかという未来がだいぶ制限されるんだ。これで未来への道が制限され、セイが全ての未来を視る事ができるようになった。

これで大体の人は分かっただろう。風刃を使った理由は別に敵の制圧とかそんな理由じゃない。黒トリガーを使った人間は、最大トリオン量が跳ね上がるのだ。その特性を利用して、セイは余りあるトリオンを全て『天帝の眼』に注ぎ込み、全ての未来を視通した。それによる成果が、大規模侵攻の情報だ。

「ご苦労だった。一先ず赤司達は帰って休んでくれ。迅と赤司には大分無理をさせてしまったからな」

「はい。分かりました」

「んじや、お疲れ様々」

そう言つて俺達は屋上を後にした。俺とあまり予知の疲労が見られないセイはそのまま遊真達の様子を見に訓練室まで行き、かなりダメージの色が濃い悠一は、帰って寝るそうだ。

悠一と別れたところで、俺はセイにさっきの出来事を全て話した。すると流石のセイでも驚愕の表情を見せ、絶句している。

「……すまない。もうだいぶ落ち着いた。で、要するにキリトは完璧にソードスキルが使えるようになったんだな？」

「ああ。その通りだよ」

「分かった。じゃあ帰ったら色々とする事があるな。戦術の幅も広がる。だが……キリト。大丈夫なのか？前のラフコフ討伐の後、かなり精神的に疲労していたが……」

セイの言う通りだ。例え電脳空間であれ、俺は一人の人間の存在をこの世から消してしまった。普通ならかなり精神的にくるものがあるのだが、今回はそれが無い。なぜかというところ……

「いや、今回は大丈夫なんだ。俺が殺した茅場は、まだしぶとく生きているんだ。俺のソードスキルっていう、強力な武器となってるな」

ふっきれた表情でそう言った。こんな事を言っているが、俺は別に罪のない人々を殺した茅場を許したわけではない。だが、みんなと俺を出会わせてくれた事には感謝している。でもそんな事を全く気にせず無視しても、俺はアイツの事が嫌いだ。今回俺が正攻法を使って勝つことができなかった事からもその理由は明白だ。アイツは、この世界でさえも俺たちのGM支配者だから……。

三雲修②

今日は正式入隊日。空閑や茅場。千佳のデビューの日だ。今は嵐山隊の皆さんの説明が終わり、千佳達狙撃手組と別れて、攻撃手銃手と一緒に訓練室に向かっているところだ。とりあえず、C級の皆さんの列から離れて歩いている事で、僕への注目はあまりされなくなった。その僕の目下最大の悩みと言えば……

「なあ二人とも。お前らC級の列に混ざってきたらどうだ？」

「何で？別にいいじゃん。被害があるわけでもないし」「そうそう！そうじゃないと修くん寂しいでしょ？」

僕の両隣のこの二人の注目度がえげつない事だろう。

まあ空閑は分かる。だって一人だけ隊服黒いし、髪白いし。

それ以上にすごいのは左隣の茅場だ。男子の注目を集めすぎだ。照○さんか。

よく考えたら、この二人は対照的だな。空閑はトリオン体になった事で11歳のまま成長が止まってるから15歳なのに幼い体だけど、茅場は生身の人間だが、すごく大人びた外見をしている。ぱつと見高校生くらいだ。二人ともお互い逆の意味で中学生とは思えない。

「だー！もう！じゃあ僕は先に転属手続き済ませてくるから！お前らは訓練室行ってこい！」

「りよくかーい」

トテテテ・・・と列に戻って行った空閑達を見届けてから、僕は本部受付へと足を運んだ。

その時、僕の頭に強い頭痛が走った。あまりの痛さに一瞬よろけてしまう。何とか体制を立て直すと、今度は誰もいない廊下でどこからか声が聞こえてきた。いや、これは頭に直接問いかけられていると言った方が正しいだろう。

『三雲修・・・三雲修・・・』

激しい痛みにも目を閉じ頭を抑えて耐えながら、謎の声に向けて大声で返事を返す。

「誰だ！姿を見せろ！」

その言葉に反応した声の主が返事を返す。

『空閑遊真、雨取千佳から捨てろ・・・』

謎の声が僕に命令をしてくる。空閑や千佳を捨てろ、だと？

「ふざけるな！そんなの、お前に言われる筋合いはない！」

ぐっ・・・叫ぶと頭痛のせいで頭に響く・・・だけど・・・

（大切な仲間を侮辱されて、黙ってるわけにはいかないんだ！）

『あの者達は……近い将来必ず……貴様に災いをもたらすぞ……』

「知った事か！僕達はチームなんだ！僕はまだ、空閑に生きる意味を示せていない！麟児さんや千佳の友達を助け出すことも出来ていない！それなのに、災いなんかにかけてたまるか！」

『なぜ、あの者達の為にそこまでできる……何が、お前を突き動かすのだ……』

そういうば、なぜなのだろうか。

なぜ、僕はアイツらの為にこの身を投げ出して戦っている？

なぜ、弱い僕が出しやばっている？

何が、僕を動かしている？

遠征に行つて麟児さんを救い出したいから？違う。それは千佳の願い。

空閑に生きる意味を示す事？違う。それはレプリカの願い。

空閑の親父さんを蘇らせる手がかりを探す為？違う。それは空閑の願い。

僕は、何のために戦っているんだ？

痛みで朦朧とする意識の中で、どこからか、声が聞こえてくる。先程から聞こえてくる闇に埋もれたような声ではなく、優しく包み込んでくれるような、暖かい声。

『オサム』『修くん』『修くん』『オサム』『修』『三雲』『メガネ君』『修』『修』『修』『修く

ん』『三雲君』

空閑、千佳、茅場、レプリカ、桐ヶ谷先輩、赤司先輩、迅さん、烏丸先輩、小南先輩、レイジさん、宇佐見先輩、木虎……

そういうえば、この1ヶ月くらい色々あったなあ……空閑に出会って、桐ヶ谷先輩達と関係を持って、迅さんに玉狛支部に連れて行ってもらって、そこで烏丸先輩達に指導を受けて……あ、イルガー事件では、木虎にも怒られたなあ……C級が出しゃばるなつて。でも僕はあの時、結局トリガーを使ったんだ。何でだっけ……学校にモールモッドが現れた時も、不良達に警戒区域まで連れてこられて、そこでバムスターが現れた時も、空閑に止められながらも、僕はC級のくせに、トリガーを使ったんだ。

『答えろ……お前はなぜ人のために戦う……何がお前を突き動かす……』

あの時も、空閑に何か言われたな……。その時僕は、なんて言い返したんだっけ……

『助けに行かなくちゃ!』

そうだ。あの時僕は、バムスターに捕まりそうになった不良達を見て、すぐに助けに行くことを決意したんだ。

『おいおい! アイツら自業自得じゃん! 勝手に立ち入り禁止に入ったからじゃん! なんでお前が助けに行くんだ!?!?』

そりゃあ、止めるよな。アイツらは近界民の危険性を軽く見て警戒区域に入り、それが自分に返ってきた。それを助けに行くだなんて、お人好しにも程がある。けど……なぜとか、何がとか、そんな事は関係ない！ただ……」

そんな理屈とか自分の得とかいう話じやない。ただ……

「『僕がそうするべきだと思ってるからだ！』」

そう叫ぶと同時に、頭に電撃が走り、頭痛が消え去った。突然目の前が光り輝き始め、その光に思わず目を閉ざした。光が収まり、目を開けると目の前に広がっていたのは、ボーダー本部の廊下の風景ではなく、玉狛支部にかかっている橋の上の景色だった。だが、その情景はいつも見ている玉狛支部より、少し違って見える気がする。苔生した壁もかなり綺麗になっているし、川の水もずっと綺麗に見える。

「えっ……？な、なんで玉狛支部にー」

「やはり俺の思ってた通りだったな。三雲修君」

後ろから誰かの声が聞こえる。いや、さっきまでとはエコーがかかっている分違ってくるが、この声は、さっき僕に空閑と千佳を捨てると言った、あの声だ。恐らく、直接僕を仕留めに来たのだろう。僕の実力では、勝てないかもしれない。だが、それで黙ってやられるほど僕は腰抜けでもない！

「アステロイド！レイガスト！」

体はトリオン体のままだったので、足に向けていた手のひらを後ろへと向けアステロイドを生成、発射。同時にホルスターからレイガストを抜刀。スラスターを起動し、桐ヶ谷先輩お得意の推進力を利用した方向転換で瞬時に体を反転させ男へと迫る。

アステロイドの弾丸と、スラスターレイガストの二段時間差攻撃。アステロイドが着弾した一瞬後のタイミングでレイガストを当てられるので、アステロイドをシールドを張ってガードされても張らずに逃げられても一瞬の隙でレイガストでの追い討ちが出来る。僕の現時点での最大威力かつ最高成功率の攻撃だ。

振り返って見ると謎の声の主はぱつと見40代くらいの男だった。全身黒の戦闘服に身を包み、肌はかなり白く、頭はかなりポリウームのある髪型をしている。目には何重にも重なっている円が描かれて、赤い色をした瞳がこちらを見据えている。考えている間に男がシールドを張り、アステロイドか着弾。その約1秒後にレイガストの追撃が襲いかかる。これは避けきれない筈だ。だが、その男の顔を間近で見ると、あることに気付いた。

(あれ……この顔どこかで……)

その疑問がレイガストを加速させる腕の振りを止めてしまった。振り下ろしている途中だったレイガストはそのまま重力と推進力に従って弧を描きながらその刀身を男へと滑らせていく。だが腕の振りが無い分ほんの少しだけ剣速が鈍る。

「甘いな」

男はレイガストの腹に左手を当て力の方向を変えて攻撃を受け流した。攻撃を当てる的を見失った剣は空を切り、そのまま勢いに身を任せ地面へと向かって僕の体を引つ張りながら刀身を滑らせていく。

（まずい、体制を崩された！サイドがガラ空きだ！）

すぐに両サイドにシールドを張ろうとしたが、時すでに遅し。両手でガツチリと掴んでいたレイガストの柄を手から出した短剣型のブレードで弾かれてしまった。そのまま流れるような動作で両手首をホールド。完全に反撃ができなくなった。やっぱり僕の実力では……

「まあ落ち着いてくれ。別に俺は君を殺すために来たわけじゃないんだ」

男が僕に自分は無害だと主張してきた。ふざけるな。僕達と空閑達を引き離そうとして、挙句貶した奴の言う事なんて信じろと言われても信じられるはずがない。

「誰がお前の言う事なんて……っ！」

顔を上げて男の顔を視界に捉える。面と向かって仲間を侮辱したことに對する怒りを口にしようとしたのだが、それも途中で声が出なくなってしまった。その顔の衝撃によつて、うまく口を動かす事が出来なくなってしまったのだ。だってその顔は、僕の知っているある人物とほぼ同一の顔だったのだから。

「空閑……?」

そう。その顔は僕のチームメイト空閑遊真とそっくり、だが空閑よりも大分大人びた顔をしていた。

「うーん、ちよつと違うな。俺の名前は空閑勇吾。遊真の父親さ」

「……………え?」

「ハハハハハ。疑わせるような事をして悪かったね」

笑い飛ばせるレベルではないのだが。こっちは今でも状況の整理ができていないのに、その原因を作った張本人は道路の上で正座をする僕の目の前で胡座をかいてドーンと座っている。いつまでも呆然としている訳にもいかなかったので、僕は空閑の親父さんに向かって問いかける。

「あの……失礼だとは思いますが、その、空閑の親父さんはもう、亡くなっていると聞いていたのですが……」

そう。一番重要なところはそこだ。普通に考えれば、死者が話しかけてくるなど、到底ありえない事だ。

「勇吾でいいさ。死んでるよ、もちろん。今はただ、君に伝えたいことがあったから、優

秀な相棒の力を借りてここにいるだけさ」

(優秀な相棒……？それって多分、茅場の親父さんの事だよな。でも、茅場の親父さんは、今は行方不明って聞いたけど……)

「おつと、あんまり長話してもいけないな。単刀直入に言おうか」

今度こそ勇吾さんが真面目な顔になって僕の顔を見つめたと思つたら、今度は膝に両手を音を鳴らすほど勢いよく置き、頭を下げ口を開いた。

「頼む！遊真を幸せにしてやってくれ！」

先程のおちやらけた様子からは想像できないほど、緊迫した声で叫んだ。

「俺は、死にかけてアイツを助けるために黒トリガーになつて死んじまつた。だから遊真は、表面上は平然としてもどこか俺に負い目を感じていたんだ。俺はアイツに、もう何もしてやることができねえ。俺が死んだ後の数年間、ずっと出がらしのようなアイツを見てきた」

なんだか、勇吾さんの気持ち少し分かる気がする……今は明るく笑っているが、隣児さんが近界に行つてしまった後の千佳は、見ているのがすごく辛かった。

「でも、君と出会つてからは違うんだ！」

下げていた頭をバツと上げて、力強い瞳で僕を見つめる。

「君と出会つてからの遊真は、前のように、いや前以上にキラキラした笑顔を浮かべるよ

うになった！アイツに平和な日常をくれた、楽しい学校生活をくれた、優しい友達、先輩、競い合えるライバル、仲間をくれた！君は、俺に出来なかった、与えてやれなかった事をいくつもしてくれたんだ！だから、頼む。アイツを、俺の呪縛から解き放つてやってくれ！」

そう懇願する勇吾さんの目には涙が浮かんでいた。これが、子を思う親の気持ちというものか。こんなただの中学生に頭を下げて、止めどなく溢れる涙を流し続ける。僕らのような子どもとは、重みが違うのだ。だからこそ、僕は勇吾さんの瞳から目を逸らさず、自分の思いをぶつけてきた勇吾さんに対して、僕も自分の思いを正々堂々とぶつける事で答える。

「僕は、僕がそうするべきだと思った事をするだけです」

これが、僕の貫く信念。折れない思い。空閑や千佳、茅場の事だけじゃない。気の弱い人を不良から助け出すこと、瓦礫に埋もれた人を助け出すこと、人々を守り抜くこと、全てが僕を突き動かす原動力。自分のためではなく、他人のために自分の全力を尽くす。自分がしなければならぬ事の一つすら見落とす事なく、全てをやってみせるという僕の意志だ。それを行ったと同時に、周りの景色が綻び始めた。その世界の中で、僕の答えを聞いた勇吾さんが、ニカツとこつちを見て笑い、こう言った。

「君は面白い嘘をつくね」

最後にそう言い残し、勇吾さんはこの世界と共に消え去っていった。世界が眩い光に包まれ、その輝きに思わず目を閉じる。

「………気付かれちゃってたか」

再び目を開けると、僕の目には先程までの玉狛支部とその周りを囲む透き通った川はなく、見慣れたボーダー本部の通路の廊下が写っていた。

「おっと、ブーツとしてちゃダメだ。さっさと転属届けを提出して、空閑達の訓練を見に行かないと」

さっきの事で今の場所を忘れてしまったので、一度地図のあるところまで戻ってから受付を目指した。

「………だ………だ。えーっと、空閑と茅場はどこだ………？」

空閑と茅場を探して訓練室とその周りを探してみるも、一向に見つからない。ここからでは見えない場所もあるので少し移動して探してみるが、二人よりも先に厄介なも

のに出くわしてしまった。

「烏丸先輩と木虎だ……」

これは早くこの場を脱せねば。桐ヶ谷先輩が言っていた木虎が烏丸先輩の事が好きというのは本当のようだ。僕には冷たい顔をして辛い事を言ってくる木虎が、いや、まあタメになっているからいいのだけれど。とにかくその木虎がテレビでも見たことのないような顔をしている。もし烏丸先輩に見つかってこつちに寄ってくる、又は僕が来るように促されたら、ただでさえ少ない二人きりの時間を邪魔してしまう。そんな事はしたくないし、何よりしたら木虎に殺される可能性大だ。足音を立てないように、そーつと踵を返そうとしたが――

「おお、修。遅かったな。遊真達と一緒だと思ってたぞ」

弟子が見つけることが出来て、師匠が見つけることが出来ないなど、あるはずもなかった。そーつと頭だけ振り返ると、こちらに向けて手を挙げてこちらに來いと示す烏丸先輩と、口をあんぐりと開けた、身体中の色素全て抜けて文字通り真っ白となった木虎がこちらを見ていた。

（これは弟子として行くべきなのか、木虎の恋の背中を押す身として引くべきなのか……
答えは決まっているな）

僕は二人にそつとお辞儀だけ返して体の向きを元に戻し、逆の方向から空閑達を探

しに行こうと足を踏み出した。

「おい、一人でどこ行くんだよ。次凜花の番だぞ。今木虎のいるところが一番よく見えるんだ」

時すでに遅し。一步目を踏み出したその瞬間には先輩は僕のすぐ後ろにいて、肩をポンと叩いていた。そのまま首根っこを掴まれて木虎の所まで引きずられて行く。はあ・・・さつきまでのシリウスはなんだったんだよ・・・。もう腹をくくろう。引きずられたままでカツコ悪いが、どうせ前からカツコ悪いんだ。今更このくらいどうってことない。

「そうだ。烏丸先輩。空閑はどうなったんですか?」

「ああ、遊真か。さつき終わったばかりだぞ。記録は0.4秒。その前にも一回やったらしいけど、俺は丁度2本目が始まる時に来たからな」

「0.4秒!?」

確か、聞いた限りでは赤司先輩が1秒台で現状ボーダートップだったらしいが、1秒切りとは驚いた。でも、近界での戦闘経験の豊富な空閑ならそのくらいはいくだろうと、納得はあった。

「ほら、凜花の番が始まるぞ。立て」

「は、は」

言われた通りに立ち上がり、茅場のいる訓練室を見つめる。アイツは普段桐ヶ谷先輩達と稽古してる時はレイガスト弧月二刀流だけど、C級はトリガーを一本しか使えないから弧月一刀流なんだな。

『3号室用意』

ダラリと下ろしていた弧月の剣先を引き上げ、西洋剣術のレイピアの構えを取る。その目はしつかりと敵を見据えていて、ギラついていた。

『始め！』

コールと共に茅場の姿が消える。と思つたら今度はバムスターの尻尾の後ろに立っていて、バムスターを見つめる。すると、そのバムスターの体に無数の穴が空いた。しかも、的確に足と急所を貫かれている。

『記録、1.7秒』

空閑には及ばなかったが、それでも歴代2位という記録だった。案の定出てきた茅場は注目の的だ。

「よし！お前ら二人、合格だ！俺達と組もうぜ。強者同士が組めばより上を目指せる」

なんか妙にカッコつけている3人組が空閑と茅場を勧誘している。それを見た茅場はうへえという顔をしていて、空閑の方は顎に手を当てて「ほうほう」と呟いている。あんなのから変なことを覚えなくてもいいものである。すると空閑と茅場が同時

に口を開いて言った。

「おことわりします」

「な・・・!?」

「悪いな。先約があるもんで」「それと君達。そのポーズとか言ってる事とか全然カッコよくないよ」

二人共それぞれ理由を言っつてしつかりと断つていた。にしても茅場の言っつてる事が酷い。すると嵐山さんが二人に近寄つて尋ねた。

「三雲君と組むんだらう?」

「うん。そう」「ボクは違うかな」

「・・・なるほどな」

「風間さん。来てたんですか」

上からある男の人が降りていく。嵐山さんが言うには、風間さんという人らしい。嵐山さんがさん付けという事は、嵐山さんより年上なのだろう。見た目的には考えられないが。

「訓練室を一つ貸せ、嵐山。迅や桐ヶ谷達の後輩とやらの実力を確かめたい」

「ほう」「へー」

まずい、風間さんの提案に、二人はかなり乗り気なようだ。二人の顔を見ると、僅

かになやけている。

「あの人は……」

僕の疑問に隣にいた烏丸先輩が下を見続けながら答えた。

「A級4位、風間隊の隊長だ」

A級4位……！ボーダーの精鋭、A級部隊の中でも上位に入る隊の隊長が、空閑達に挑戦……？まさか、この場で近界民である二人を始末するつもりなのか……？自然と手のひらが柄へと吸い込まれる。たとえ負けると分かっているとしても、そんな事をされては黙っているわけにはいかない。さつき勇吾さんとも約束したのだから。空閑を助けると。

「待つて下さい風間さん！彼等はまだ訓練生ですよ！トリガーだつて訓練用だ！」

「俺は構わないよ」

「ボクも！」

折角嵐山さんが止めようとしてくれたのに、空閑達は全く気にせず最早自分達からやろうとしている。

「いや、俺が確かめたいのはお前らではなく……」

風間さんはクルリと振り返って、僕の方を向いた。そして、僕を指差して――

「お前だ。三雲修」

「え．．．．？」

空閑、千佳、茅場のボーダー正式入隊日。まだまだ波乱は続きそうだ。

三雲修③

「あれ？何やってんだアイツら」

俺の茅場との話を聞いたセイが先に帰ると言い出したので、セイと別れて一人で遊真達の様子を見に訓練室に来た俺は思わぬ光景を目にしていた。なぜ、修と風間さんが対決していて、それもボロツカスにやられているのか。

「烏丸先輩、もうやめさせて下さい！見るに耐えません」

見物席の所から声が聞こえて来た。その方向を見ると、そこには先程の意見を言った木虎、その木虎の方を見ている京介、遊真、凜花がいる。

「三雲君がA級と戦うなんて早すぎます。勝ち目はゼロです」

「へえ、修の心配か？」

「そ、そういうわけでは……」

……京介ってほんと女の子いじるの上手いな。アイツ本当は木虎が自分のこと好きだって気付いてるんじゃないだろうか。

「でも、オサムもすぐに勝てるなんて思っていないだろ。先の事考えて経験積んでんだよ
経験」

『ダメで元々』『負けても経験』いかにも三流が考えそうな事ね。勝つつもりでやらなきや勝つための経験は積めないわ」

「おつ、いい事言うね、お姉さん。ここの戦闘員は強い人が多いんだけど、安全な訓練機関があるからか、絶対に勝たなきゃいけないって気迫を持った人が少ないんだよね。それこそ、キリトさんやセイさんみたいな人がさ」

遊真の問いに木虎が答えてそれを凜花が肯定する。確かに女子軍二人共いい事言ってるが、凜花は俺たちの事がバレそうな言動は控えてほしい。争奪戦の時に言ったのは殆どの人がホラだと思ってくれたけど、冬島さんとかこの前「体調をさせろ」とか言ってきたし。

「しかしまあ、いつ終わるかは始めた二人次第だからな」

「ああ。生きるか死ぬかの戦いじゃ勝敗がつけば終わるが、男の喧嘩の場合はどつちか、もしくは両方の納得がいくまで終わらないからな」

「二二桐ヶ谷（キリト）先輩（さん）!!?」

後ろから自分の意見を述べるとその場の全員がこつちを見て驚きの声を上げた。

「ようみんな。京介。とりあえず今の状況教えてくれるか？」

「了解っす」

「ここ」で物語は前話の最後に遡る・・・

修 side

『訓練室に入れ、三雲』

『三雲君！決して無理に受け入れる必要はないぞ！』

戦うよう促す風間さんと、心配してくれる嵐山先輩。確かにA級3位の實力を持った風間さんと、空閑のおこぼれを貰ってB級になった僕とでは、實力差は火を見るより明らかだ。でも、遠征部隊に選ばれるためには、いつか絶対に戦わなければいけない相手。ここで戦っておいて損はない。

『やりましょう！模擬戦！』

風間さんの後に続いて訓練室へと向かう。途中で空閑や茅場から「頑張れ」と、烏丸先輩から「少タイレギュラーな形だが、胸を借りるつもりで今のお前を全てぶつけてこい」と声援を貰った。なぜか木虎からは満面の笑みで「せいぜいもがき苦しんでから見ながら足掻く姿を見せてちょうだいね」という謎のDSの敵キャラの様なコメントを頂いたが。その場にいたC級隊員達は時枝先輩が他の場所へ連れてってくれた。これからする事は見世物ではないので。ありがたい限りだ。沢山の人から応援して貰ってるんだ。一つでも多くの経験を貰って来なければ。

『模擬戦、開始!』

コールを聞いた瞬間左手にレイガストを起動する。風間さんの武器はスコープオンの二刀流。間違いなく攻撃手だ。桐ヶ谷先輩と違って、機動力を生かして手数で攻める型といったところか。この場合は大きな隙が出来るまでは攻め入る事が出来ない。

(まずは、距離をとって射撃で……)

『なるほど。レイガストを盾に使う、防衛寄りの射手か』

そう言った瞬間に、風間さんの姿が消えた。さっきの茅場とは違い、速さで見えなくなったのではなく、本当に消えたのだ。

『なっ!??!』

気が付いたら胸に剣が刺さっていて、僕の負けという形であつという間に勝敗はついた。生身にダメージがあるわけでもベイルアウトするわけでもないが、精神的に混乱して思わず膝をついてしまった。

(今のは……体を消した、いや、見えなくなったんだ。きっとアレは、隠密トリガー、カメレオンだ)

姿の見えない敵に一体どうやって対処すればいいのかという疑問の答えは、今の自分では返すことができなかつたが、それでも諦めはしない。

(いや、風間さんだつて無敵な訳じゃない。必ず付け入る隙はあるはずなんだ。探せ。

風間さんの作る隙を)

「つて事で、後は模擬戦開始からなっ!??のところまでの繰り返しを24本しています」
大体の事のあらすじは見えてきた。てか修、毎回やられる時なっ!??言ってるのかよ。いや、そんな事はどうでもいいが。風間さんも冷静に見えて結構感情的だよな。あと木虎、ドS発言しつかり聞かれちゃってるから恐らくお前の恋は終わった。

「修、結構頭の回転はいい方だと思うんだけどな。そんな24本も一方的にやられるとは思えないな」

「俺もそこが疑問なんです。やっぱり木虎の言ってる通り勝つための意欲つてのが足りないんすかね」

「でもキリト先輩、とりまる先輩。オサム、何か変わったみたいだよ」

遊真にそう言われて修の方を見ると、確かにいつもの修とは何かが変わっていた。

アレは、覚悟を決めた顔だ。それに、あの目と気迫。まるで・・・

「すごいな、修。まるで本気の桐ヶ谷先輩みたいだ」

そう。あの溢れ出る闘気は、俺の、しかも稀にしか出すことの出来ない相手に完全に敵意を示したものとよく似ている。遊真や凜花のような敵に突き刺さる〈闘気〉ではなく、身体中から迸り相手を包み込む冷やややかな〈殺気〉。だが、俺のものと「似ている」

だけであつて、正確には全くの別物だ。いまの修は冷静にはなつてゐるが、それでもその身体の内燃え盛る闘志を秘めてゐる。

「・・・面白くなりそうだな」

頑張れよ修。風間さんに一矢報いてやれ。

キリト side out・・・

修 side

「もういい、ここまでだ。時間を取らせたな」

戦いが終わつて膝をつく僕に風間さんが上から冷ややかに言い放ち、振り返つて出口へと向かう。

「は、はい。ありがとうございます・・・」

(・・・動きも反応も鈍い、攻撃を当てることに集中しすぎて注意力は散漫、おまけに無防備。・・・こいつが近界民を手懐けたという話だったが、迅の後輩という事で期待しすぎた)

「全く、理解できんな。なぜこんな奴らのために迅は黒トリガーを・・・」

「え・・・!!? 黒トリガーを・・・!!?」

思わずその眩きには反応せざるを得なかつた。今、この人は、何と言つた?

「なんだ、知らないのか? 迅は、あの白髪と女を入隊させる為に、自分の黒トリガーを本

部に交換条件として献上した。お前たちの部隊を、本部のランク戦に参加させる為だそうだ。全く理解できない」

(迅さんが僕達の為に、最上さんの黒トリガーを・・・?)

「それだけじゃない。詳しくは知らないが、桐ヶ谷達が恩人である本部を裏切つて玉狛に異動したのも、お前らの為だそうだ」

「き、桐ヶ谷先輩達まで・・・」

(この前、桐ヶ谷先輩が教えてくれた。宿なし食なし金なしだった自分たちを救つてくれたのは、本場の上層部だって)

迅さん達がなぜ僕達にそこまでしてくれるのかは分からない。でも、そんな話を聞いて、

「すみません、風間さん」

このまま終わるわけには、いかないだろ！

「もうひと勝負、お願いします」

「ほう・・・いいだろう」

20戦以上戦つて、僕の攻撃は一度も届いていない。相手は超がつくほどの手練れだ。はつきり言つて僕に勝てるわけがない。だから、贅沢は言わない。ただの一発を当てる、その事だけに集中しろ。知恵を絞れ。烏丸先輩や赤司先輩に教わつたことを思い

出すんだ……

『いいか修、射手の特徴は、弾丸一発ごとに細かく設定をいじれることだ』

『ああ。極端に言えば、射程や弾速を捨てて威力重視の弾丸を作ること、逆に威力を捨てて超射程の弾丸を作ることとも可能だ』

『そういう部分から、射手は安定している銃手よりもセンスが必要だ』

『……その話を聞いていると、僕には射手よりも銃手の方が向いているような気がしてきます。センスなんて僕には無縁ですから……』

『俺の考えは逆だ。三雲、お前は戦況を考える頭と物事を柔軟に考える頭を同時に持っている。どっちをやるかなら迷わず射手をやるべきだ』

『……はい!』

『射手は考えながら戦うポジションだ。戦場のあらゆる要素を使って、相手の動きをコントロールするんだ。そのために三雲。お前にとっておきの武器をやろう』

透明化を封じる手は思いついた。問題はその先。風間さんにどうやって一撃を与えるかだ。僕の持っている武器から、出来る事を再確認するんだ。

まずは「レイガスト」。接近戦用トリガー。ブレード部分を変形できる。「盾モー

ド」で防御にも使える。

次に「スラストター」。レイガスト専用オプショントリガー。トリオンを噴出してブレードを加速させる。

「アステロイド」。射撃用トリガー。威力、射程、弾速の調節ができる。

「シールド」。防御用トリガー。防御範囲を小さくするほど耐久力が上がる。

そして赤司先輩に習った『あの技』。

全ての要素を選択肢に入れて、相手の動きを読み切れ。

『ラスト一戦、開始！』

風間さんが姿を消す。ここからさつきまでの流れを抜け出すんだ。アステロイドを起動。威力、射程、弾速を調節。さあ、行け。

「何じゃこりやあ!?？」

「これは、超スローの散弾……」

（訓練室ならトリオン切れはない。透明のままでは風間さんは貫かれて終わりだ。必ず姿を現わすはず……）

「考えたな修。けど、」

風間さんが姿を現し、両手のスコピオンで向かってくる全ての弾を斬る。

「カメレオンなしでも、風間さんは強いぜ」

風間さんが僕に向かって突撃してくる。ここからが本当の勝負。チャンスは、一撃。

(弾丸の壁で動きを制限して、大玉での迎撃か。考えは分かるが、そう簡単には当たらないぞ。視線で狙いが丸わかりだ)

「スラストターON」

「!?？」

「シールド突撃^{チャージ}!?？」

スラストターの推進力によって、レイガストと衝突した風間さんをそのまま壁まで押し込む。散弾はシールドによってガードされたが、壁まで押し込むことはできた。本命はこの次。

案の定風間さんが反撃に来る。すかさずレイガストで逃げ場をなくして風間さんを閉じ込める。それによって反撃はガード。さあ、ここだ。

「アステロイド」

(ゼロ距離射撃・・・!!)

レイガストの中がアステロイドの爆裂音と閃光に包まれる。

「やったんじゃねーかコレ!?？」

「いや、微かにですが、風間さんの手が前に出ているのが見えます。恐らくアステロイ

ドを撃つ時に開けた穴からスコープピオンでカウンターを食らわせたんだ」

その堤先輩の言葉から、その場のほぼ全員がが僕の負けを予想した。ただ一人……桐ヶ谷先輩を除いて。

「……俺の負けだ」

風間さんの心臓に、レイガストの刃が深く突き刺さっていた。

『と、トリオン供給機関破壊。風間ダウン！』

風間さんの突き出すその手には折れたスコープピオンの根元がある。折れた剣先は、

風間さんの足元に落ちていている。結果は、僕の勝ちだ。

「やつ、やった……」

「……三雲、さっきのカラクリを教えろ」

「……簡単な視線誘導、ミスディレクションです」

赤司先輩に教わった視線誘導ミスディレクション。相手の視線を誘導して、他の事から意識を外す。手

品に使われる技術だ。僕はその技を使って、ゼロ距離でアステロイドを作り、レイガストに穴を開けた。そのままではカウンターの余地がある事を察知していたので、わざとそっちの攻撃を本命だと思わせて、風間さんの視線と意識を完全にそちらに誘導させた。案の定一度読みを外した風間さんは、こっちが本命だと疑っていなかったようだ。だが、そこからが本当の一撃。僕はアステロイドを通すために開けた穴を閉じ、その代

わりに心臓部に近い部分の刃を変形させ、風間さんへと伸ばした。その刃は滑るように風間さんまで届き、深々と突き刺さった。

「・・・なるほど。俺はまんまとお前に攻撃場所を誘導されていたというわけだ」

「はい。ありがとうございます」

『模擬戦終了。24対1で、風間勝利!』

修 side out・・・

キリト side

「修、おつかれ」

「桐ヶ谷先輩!来てたんですか!」

皆などで訓練室の出口を囲んで出てきた修に向けて声をかける。遊真と凜花は修に飛びつき押し倒しながらもハグを続けている。てか凜花、お前は離れてやれ。お前の胸が当たって修が服の色素まで変えるくらい赤くなってるぞ。女である木虎はしっかりそれを理解してくれた様で、凜花を引つpegがしてくれた。そのおかげで修は意識を取り戻し、遊真をぶら下げながら立ち上がる。降りてやれよ遊真・・・。

「トリオン無限ルールだとはいえ、ラストはいい読みだったぞ。赤司先輩に教わったテクを完全に使いこなしていたな」

「烏丸先輩の指導あつてこそです」

「そうか。けど、1回読み勝つために20回も負けてたら普通はアウトだぞ」

「そうよ！あまり調子に乗らないことね！」

木虎よ。いくら修が羨ましいからつてそんな嬉しそうに言うのはやめてあげろ。修、なんでお前がそんな顔なのか気付いてないぞ。

「烏丸に桐ヶ谷か。・・・なるほど、烏丸の弟子か。最後のはお前の入れ知恵か？」

「あれ？俺の弟子の線は？」

「黙つてろ脳筋」

悲報。俺、人間を引退した模様。いやまあ間があつたつて事はちよつとは考えたんだらうけど。

「いや、俺が教えたのは基礎を固める事だけです。視線誘導だけは赤司さんの教えた技つすけど」

セイは基本的に俺と凜花を指導しているが、俺たちが休憩している間に修たちの方に顔を出して射手の訓練をしている。アイツは本当に疲れを知らないようだ。元強豪バスケット部主将恐るべし。ちなみに俺がさつき視線誘導を使えたのもセイ達の訓練をちよつと覗き見していたからだ。まあ正式に習ったわけではないから修のように綺麗に意識まで刈り取つて誘導する事は出来ない。せいぜいわずかな時間意識を外させて

タイミングを外すくらいだ。

「で、どうでした？うちの三雲は」

「・・・はつきり言つて、弱いな。トリオンも身体能力もギリギリのレベルだ。迅が推すほどの素質は感じられない」

修の顔色がどんどん暗くなる。なけなしの聞き耳スキルを最大限使つて聞いていたが、修は悠一が風刃渡したのは自分たちのせいって風間さんに言われてから雰囲気が変わったから、それでも実力が示せなかったのが悔しいんだな。俺もセイも悠一も、やりたくてやっただけだからそんな気負わなくていいのに。

「だが、自分の弱さを自覚していて、それゆえの発想と相手を読む頭がある。知恵と工夫を使う戦い方は、俺は嫌いじゃない。邪魔したな、三雲」

おつ、風間さんが修を褒めた。確かに風間隊はステルスを使つて連携で考えて戦う部隊だからな。個々の戦闘力として飛び抜けている奴はいなくてもA級4位まで上り詰めた実力は伊達じゃないってわけだ。きつと風間さんも試行錯誤してたどり着いたんだろうなあ・・・などとしみじみ考えていると、風間さんが階段を上つていつている。

『ある物』を掴みながら。

「あれ？俺とは戦つてくれないの？」

と遊真が尋ねる。そういえば、最初は遊真の事だと思つてやる気満々だったつて

聞いたな。

「勝負？お前は訓練生だろう。勝負したければ、こちらまで上がって来い」

やっぱり風間さんはプライドが高いから、ちゃんとしたトリガーで本気の戦いがしたいんだろうな。うんうん。やっぱりこういう先輩がいるから、俺たちも上を目指す気になったんだよな。……うん、そろそろ突っ込んでもいいよな。

「……あの、風間さん？なんで俺はアンタに首根っこ掴まれて物理的にそちらに引きずり上げられてるんですか？」

風間さんが掴んだ『ある物』とは、俺の隊服の首根っこである。まるで荷物置きに置いてあった荷物を取るかのように、流れる動作で俺の首を掴んで階段を引きずっていった。トリオン体だから体は全く痛くないが、いかんせん心はたんこぶだらけだ。

「何を言っている。お前には今までの約3週間分のランク戦のツケが溜まっているんだ。ランク戦300本、今から付き合ってもらおうぞ」

「いやおかしいよね？俺アンタとそんなに1日10本以上も戦ってないよね？？」

「利息だ」

「契約してねえよ！どんな闇商売だよ利根〇もビックリだわ！」

「おい大変だ三雲くん。今君たちのチームメイトが……」

「えっ……」

「ねえお前らなんでこの状況ほったらかしにしてシリアスできんの?？」

まずい、このままじゃあ確実に太刀川さんにも見つかってAll NightでENTERNABATTLE☆コースだ。なんとかしなければ。こうなったら奥の手だ。

「あー!太刀川さんがラウンジのゴミ箱でレポート捨てようとしてるー!」

「何?太刀川ア!」

よし、掴む力が緩んだ。

「グラスホッパー!」

ケツにグラスホッパーを当てて風間さんの射程圏内から一気に離脱した。その後空中で体制を立て直し階段の下で着地と共にダッシュ。狙撃手の訓練場へと向かう。

「風間さん!すみません!ランク戦はまた今度に!」

そう言い残してから俺に出せる全速力で走った。ここまでの速さが出るとは自分でも思わなかった。とにかく走った。玉狛へと向かって。

「どういう事だよ、セイ・・・」

隣に立つセイが、一息ついてから俺たちを見つめる。セイの口から放たれたその内容が俺たちの度肝を抜き、体は口内から音声を出す事を許さなかつた。その中でセイだけが真剣な表情をして、俺の返答を待つ。そんな・・・まさか・・・

「お前が死ぬって、一体どういう事なんだよ・・・」

寒気も大分強くなつて来た冬。無慈悲なまでに冷たい風が、体の奥まで襲つて来た感じがした。

桐ヶ谷隊②

「お前が死ぬって、どういう事だよ、セイ……」

時間は、風間さんと修が戦った日から約2週間後、今朝に遡る。

ガラツと勢いよくカーテンを開ける音と共に窓から日差しが差し込み、その眩しさに目を開く。枕元のスマホを手探りで掴み、時間を確認。時刻は5時50分。いつもなら余裕で寝ている時間だが、今日に限っては違う。

「さっさと支度をしろ。遅れるなんてもってのほかだぞ」

「うっせ、なら起こすとかしてくれよ」

俺は卓上のカロリメイトを3つ口に放り込み、ボーダーから支給されているエンブレムの付いた制服を身に纏う。集合時間は7時。バスが出るのは6時20分。ここから最寄りのバス停までは約10分。今から出れば十分に間に合うはずだ。

「二人共一、こっちも準備完了です」

俺たちの部屋のドアを開けたアリスは、久しぶりにオペレーター制服をきつちりと着た上にモコモコの上着を着込んで、俺たちの出発を待っている。

「おし、じゃあ行くか」

正直こういうのは俺たちの役回りじゃない気がするが、まあ頑張るとするか。
キリト side out . . .

修 side e

今日、朝学校に行ったらクラスメイト達からB級に昇格したことをお祝いされた。どうやらボーダーの正隊員は広報サイトに名前が載るらしい。三好はそれを全て暗記しているようだ。だがその暗記力は全く勉強の方には活かせていない。僕は人に囲まれることが苦手なのだが、今回はそんな事が気にならなかった。その理由は、

「三好、大丈夫か？風邪とかひいてないか？」

「だ、大丈夫だよ」

さつき囲まれることになった原因の三好コイツに対する心配で頭の中がいつぱいだからだ。何故ならば、今日の午前授業ぶち抜きで、ヤングキャリアアドバイザーとして僕達に講演会をする人達が来ることになってきているのだ。そして、僕達のクラスに来るのはボーダー隊員。つまり、超がつくという表現すら生温いほどのボーダーオタクのコイツは今日死んでしまったっておかしくはないのだ。

「心配すんなって。確かに今も心臓はバクバクだけど、こんなとこに来てくれるのな

んで開発院の人とか、戦闘員だったとしても下っ端の方の人だろ？それなら何とか気絶
一歩手前くらいで耐えられるよ」

なるほど。つまりコイツは今かなり危ない状況だ。本当に死んでしまってもおか
しくはない。今、先生が講師の人を呼びに行っている。どこに勤めているかは分かつて
も、誰が来るかはサプライズとして明かされていけないのだ。……僕以外は。チャ
イムがなったので、みんなが席に着き出す。何もしないわけにはいけないので、ポケッ
トから用意して置いたある物を取り出して三好の机に置く。

「三好。今のうちにこの栄養剤を飲んで、気絶しないようにどこかをずっと摘んでおく
んだ。いいな。絶対だぞ」

そう言い残してから僕も席に着く。さて、アレだけで果たして大丈夫なのだろう
か。そう思つて内心でドキドキしながら先生を待つ。足音が近づいて来た。みんなが
話を急にやめる。

「はい。今回はヤングキャリアアドバイザー講演会として、若手のボーダー隊員の方に
お越しいただきました。とは言つても、皆さんよりもかなり年上なので、粗相のないよ
うにね。それでは、隊員の皆さん！お入りください！」

「はいー」

そう返事を返して隊員が入ってくる。改めてみんなを見渡すと、あまり期待をして

いないという顔がいつぱいだ。でも、すぐにその顔は変わった。やがて全員が机から身を乗り出し、入ってきた人物を再確認する。

「始めまして、三門市立第三中学校の皆さん。私たちは界境防衛組織ボーダーに勤める、桐ヶ谷隊と申します。私が隊長の桐ヶ谷和人です」

「私は赤司征十郎です」

「私は有栖川京華です」

『うわあああああああああ!!!』

約30人分の歓声が教室中に鳴り響く。まあそれはそうだろう。ボーダーは結構人員問題が深刻なので、防衛任務などのシフトがかなり早いローテーションで回っていく。その上事務仕事などの量も、実力が上がって行くのに比例して多くなっていくのだ。今恐らくランク戦をやりまくっているお方達を思い浮かべただろうが、その方達は他の人達が優秀か、本人たちが先に終わらせている優秀さんかの二つだ。太刀川さんや三バカさん達は、言わなくても分かるだろう。だからここにいるみんなは、仕事もトツレベルで忙しくA級の隊員が、しかもここ半年イレギュラー門のニュースでテレビにうまくついていた桐ヶ谷隊が、午前ぶち抜きという長い時間を割いてこんなところに来るわけがないと思っていた。だから、対して期待もしていなかったところにこんな有名人が来たら、発狂して当然である。

そして、僕の一歩の懸念材料であった三好はというと、

「き、きり、がや、たい？う、うそ、だろ、おれ、きよう、しぬ、かも、しん、な、い……」
安心しろ。お前は今日の内どころかたつた今死んだ。とりあえず背中をぶつ叩いて息を無理やり取り戻させた。壊れたテレビ感覚なのはスルーしていただきたい。

「えーと、少し皆さん落ち着いてください。じゃあ、聞きたいことが多そうなので最初に一度質問タイムとしましょう。何か質問ある人？」

『はい！』

その瞬間、僕と空閑と茅場以外の全員から手が上がった。その迫力にまた先輩たちがたじろぎ、その中、唯一正常だった赤司先輩が質問に応対する。

「じゃあ、まずはその君」

「はい！なぜ、有名人の桐ヶ谷隊の皆さんが、こんなところに来てくださったんですか？」

「元々はこの話はボーダーの宣伝と新隊員募集のための活動でした。本来ならこの仕事は嵐山隊の仕事なのですが、嵐山隊は他の仕事で忙しいため、私たちが出向くこととなりました。このクラスに来たのは、こっちの桐ヶ谷隊長が理由です。「知らない人がいっぱいいるよりも、少しくらい知り合いがいた方が気持ち的に楽だ」と言ったので、三雲君たちのいるここが一番良かったんです。じゃあ、次はそのあなた」

「はい！三雲君たちとはどういった関係なのですか？」

おい、その話はするんじゃない。その答え次第で、僕の命が左右される。

「俺たちと修や遊真、凜花は、同じ支部に勤めている先輩後輩です。師弟関係でもありません」

言いたいことが多すぎる！とりあえず桐ヶ谷先輩！頼むからこういう場でそういう立場で来てるんだったら僕たちのこと名前で呼ぶのやめて！今の発言でクラス視線（特に三好の）が現在進行形でめつちや刺さってますから！僕は注目されるのが嫌いなんだ。目・^{アイ}N・Gだ。

「よし！最初の質問タイムはこれくらいにして、体育館に行こう！今日は皆さんに、あるものを持ってきました！」

「あるものってなんですか？」

「それは、出てからのお楽しみです」

言われるがまま、僕達は並んで体育館へと向かう。到着すると、既にスタンバイしていた有栖川先輩が手を振っていて、横に大きなバッグを置いている。アレは一体なんだろう？

「はい。じゃあ私の前に一列に並んで下さい。一人一個とつたら桐ヶ谷さんのところへ行つてね。あ、三雲くんと空閑くん、茅場さんは先に桐ヶ谷さん達の方へ行つてくださ

「い」

「え？はい、分かりました」

結局中身が何かわからないままになってしまった。でも、なんで僕達だけで・・・つて、まさか！

「桐ヶ谷先輩！もしかしてあれの中身って！」

「気がついたな。その通り、アレだよ」

やっぱり、何を考えているんだこの人は！まさかアレを使わせるなんて！

「うおおあああああすつげえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！トリガーだああああああ！！！！」

「・・・上層部に叱られますよ」

「心配すんな。アレは俺の作ったもんだし、ちゃんと許可も貰った。・・・少々汚

い手は使ったが」

脅したなこの人。恐ろしくなんらかの手段で根付さんを落としたりたんだろう。表向き
のことはほぼ全て担当している根付さんさえ落とせば、なんとかなるだろう
し。

「まあこの話はいいんだ。数の都合上、お前らには自分のトリガーを使ってもらうから
な」

「「了解」」

「よし、じゃあ皆んなトリガー行き渡ったっぽいし、そろそろ始めるか。じゃあ皆さん！トリガーを起動してください！修。サポートよろしく」

「はあ・・・分かりましたよ。みんな！大体知ってると思うけど、今から僕たちが実際に起動してみるから、真似してやってみてくれ！空閑、茅場、やるぞ」

「了解」

「「トリガー起動」」

実体がトリオン体へと換装されていく。周りのクラスメイトから「おおー」と歓声が上がった。

「やっぱ本物は風格が違うな！」

「うんうん、歴戦の勇者って感じ！」

お前らには一体何が見えているっていうんだ。僕になんの風格がある。何が歴戦の勇者だ。どっからどうみても歴戦の敗者のオーラしか漂ってないだろ。頼むからこれ以上ハードルを爆上げしないでくれ。

「やっぱり風格が違うなオサム」

「歴戦の勇者のオーラが漂ってるよ修くん」

「お前ら！悪ノリするんじゃない！ほら、みんなも早く！」

『トリガー、起動！』

トリオン体になった自分の体を見てみんながめちやくちや騒いでいる。その中の数名が僕達の方に寄ってきた。あれ、コイツらは……

「よおメガネ」

「今までは手が出せなかったが」

「俺たちもトリオン体になればお前なんか敵じゃねえぜ」

「……えーと、だれ君たち」

「俺も分かんない」

正直僕もほぼ忘れていたが、正体が分かっている読者様方のために説明せねばなるまい。コイツらは、初期にちよこつとだけ出てきて茅場に超威力の紙ボールをお見舞いされ、空閑に足を思いつきり踏ん付けられ、バムスターに食われたあの不良達だ。挙げた被害は全部リーダーの奴にいったが。一人のセリフの多さからコイツらのグループ内の立場が伺える。せめて最初の奴にもう少しセリフを分けてやれ。

「……何の用だ」

「決まってるだろ？この前の借りを返すんだよ」

空閑達に忘れ去られていたこの状況でなおシリアスを突き通す様には最早感服さえする。

「……空閑、茅場。武器は使うなよ」

「了解」

三人が僕達に向かってくる。不良達は体育祭や体力テストも全く真面目にやらないが、喧嘩で身体能力もかなり高いので、僕が相手になる強さではない。このままでは、まずい……!

「あ……が……」

……わけもなく、不良達はあつという間に地に伏せた。トリオン体にも確かに身体能力は反映されるが、それはトリオン体になれていてこそその話だ。使い慣れていない体ではいつも通り動くことすら難しい。思いつきりぎこちない動きで迫ってきたので、ローキックで体を宙に浮かせ、地面に手をつこうと伸ばした手を取り背負い投げをかけてあつげなく沈黙。両隣を見ると、残り二人が腹を抱えてうずくまっている。

「よし、じゃあここからは体育館で各自自由行動です!トリオン体だから痛みはないけど、一応周りには気をつけるように!」

『はい!』

「よしみんな!鬼ごっこしようぜ!」

「この狭いところか?」

「この体なら壁も使えるだろ!」

……みんな楽しそうだ。最近の色々トラブル続きで、こんなに心休まる時はなかつ

たからな。僕が不甲斐ない顔をしていたら、仲間まで困ってしまう。もっと、笑うんだ。心から。

「おーい修！お前もやろうぜ！」

「ああ！手加減しないぞ！」

クラスメートの元へ駆け寄っていく。空閑達も僕の大切な仲間だけど、このクラスのみみんなも一緒に笑いあえる仲間だ。

「……青春だねえ」

「ジジくさいぞキリト」

「厨二よかマシだ」

「なんだと」

「やるか？」

「喧嘩しないでください大人気ない」

「悪いな片付け手伝わせて。昼飯遅くなっちゃったな」

「いえ、構いません」

よほどトリオン体が楽しかったのか、みんな時間を忘れて遊んでいた。そのおかげでいつのまにか昼休みの時間になり、急いでトリガーを回収して、修に手伝ってもらって片付けをしてもらい、今は昼飯を食いに桐ヶ谷隊と修の4人で屋上に向かっている。

「おーいオサム！……」

「ああ！」

「……キリト、アリス。お前らに重要な話がある」

空閑の元へと駆け寄る修を見届けながら、セイが緊迫した声で俺たちに言った。

「……どうした、セイ」

「今回の大規模侵攻で……」

一呼吸置いてから、表情を全く変えずに、俺たちの予想の遥か上を飛び越える言葉を言った。

「俺は死ぬ」

言葉が、声が出てこなかった。何を言えいいのか分からなかった。だが、黙っているわけにはいかない。聞かなければならない。

「……どういう事だよ、セイ……」

「……あの時、未来が見えた。俺は、あの未来の中のどのルートでも死を避けられない。だから、お前がアイツらを導くんだ」

セイの言うことはいつも、确实だ。間違ったことなどなかった。だから、この言葉もきつと正しい。この予知は确实に当たるだろう。でも、言わなければならぬ。俺のやる事は一つしかない。

「なあセイ、覚えてるか？俺たちの戦いはいつだって一進一退だった。お前には予知、俺には反射。俺はいつだってお前の予知を反射で超えてやった」

「だからどうした」
「決まってるんだろ」

もう誰も失わせない。誰も死なせない。俺は、セイと一心同体だ。半身が死んでは意味がないんだ。

「お前の予知なんて、軽々飛び越えてやるよ」

青空に暗雲が広がっていく。この雲から数十の黒雷が落ち、その雷が門を形成する。

「緊急呼び出し……！」

修が驚愕の声を上げる。その中で俺たちと凛花は空に開く門を見据える。

「いくぞキリト」

「ああ。セイ」

一度戦闘が始まれば、私情を巻き込んで剣を鈍らせる事はしない。やってやるよ。絶対にお前を死なせたりしない。

「リンクスタート」

さあ、戦闘開始だ。

大規模侵攻くキリト編く

桐ヶ谷和人③

「僕」はこの人生を勝利だけで歩んできた。だからこのデスゲーム、ソードアート・オンラインの真実を知っても何ら恐怖を感じなかった。なぜなら、僕が負けるところなど、想像すら出来なかった。それもそのはず、僕には未来を視る眼がある。この眼を持つてすれば、効率よく経験値を手に入れることも、有利な立ち回りも、簡単だ。周りどむしろノーダメージでクリアすることの方が多くてつまらない。

「この世界も、僕の思い通りか」

現実世界の退屈さとうんざりし、猫の手を借りる思いでやってきた仮想世界。だがこの世界も、僕を満足させる事は出来なかった。だが、この認識は、すぐに改める事となった。

「………すまない」

武器を手に入れるために受けたクエストで、一時的に組んだパーティーメンバーに

モンスタープレイヤーキル
M P Kを仕掛けられた。いくらこの僕でも、視ようとしていないもの視る事は出来

ない。現在ソロの僕では、この状況から予知をしても、生き延びる術はない。

「終わりか」

この世界は、人間の闇を映し出す鏡だ。人と人が支え合うなんて考えは、ここにはない。唯一同じである事は、勝者は英雄と肯定され、敗者は死という形で否定される。もう抵抗する事すらも無意味に思つて、目を閉じた。

「セアア！」

目の前から大きな声が聞こえてきた。その声に目を開けて前を見ると、そこには一本の剣で僕に向かつてくる敵に立ち向かう男がいた。

「何ボサツとしている！ さつさと戦闘準備しろ！」

その男が僕に命令をする。ふざけるな。僕に命令をするなど、何様のつもりだ。

「僕の邪魔をするなよ」

「はあ？ 助けてやったのに恩知らずな奴だな！」

「俺」は、これを待つていたんだ。周りの者が溝を深めていつて、俺に絶対的なまでの信用を寄せて、悪く言えば俺のことを頼つてばかりだった。俺に負けた者は、全てこう言つていた。才能、才能、才能才能才能。ろくに努力もしていない奴が才能を語るのが、心底嫌になつた。いずれ俺と張り合つていた者達も俺には勝てないと思ひ出して、溝を開けていった。だから俺も、自分から孤独になつた。でも、コイツは違う。コイツとなら、俺は高みを目指せる。コイツの力を引き出し、俺の力を引き出してくれる。

「はあ……はあ……大丈夫か？」

「問題ない」

「ふう……お前、名前は？」

「僕は、セイだ」

「そうか。俺はキリトだ。よろしく」

それが、キリトとの出会いだった。

—————

俺のセイへの第一印象は、偉そうな奴、だった。コイツは効率の良い経験値稼ぎをしているようでかえって時間のかかる狩り方をしている。それを指摘すれば「僕に指図するな」とギラついた目で睨まれる。

でも、実力は本物なんだよな。立ち回りが完全に素人のそれじゃない。俺も何度かセイと戦った事があるが、あの的確に弱点をつき、攻撃をいとも簡単に躲し、コンマ一秒すら途切れることのない攻撃は、正しく上級者そのものだ。ゲーム歴がかなり長い俺でもこんな戦いは出来ない。というか、こんな事が出来るのは全VRプレイヤー中でセイだけだろう。それでも少しの割合で勝つ事が出来たのは、俺の昔からの並外れた反射神経のおかげだ。

だがそんなセイにも弱点はある。それは……心だ。俺とセイがあこのクエス

トで出会ってパーティーを組むようになってからおよそ半年が経ち、俺が数十回の敗北を経て初めてデュエルでセイを負かした時。あの後のセイにはいつものような冷静さは微塵もなく、ただただ怨念をこめて狂ったようにモンスターを狩り、過労によって倒れた。その後数日は眠りながら苦しそうに唸っていたが、目覚めた後のセイはまるで別人のようだった。今まではパーティーとは名ばかりで、勝手に二人で別々の狩場で経験値稼ぎをしていたのが、二人で連携で敵を倒すようになって、今まではギルドとのがみ合いの時は「頭が高いぞ」とか「僕に逆らう奴は親でも〇す」とか言って相手を脅していたのが、急に威圧感を残しつつも交渉相手にとっても優しい笑顔で優しい口調で話すようになった。俺への辛辣さは継続していたが。

今でさえそんな事はなくなったが、またいつセイが壊れてしまうか分からない。だから、パートナーとして、ライバルとして、セイに何かあった時は、俺が救い出すんだ。

—————
 キリト side

(索敵、起動)

数十個の門から出てくるトリオン兵の数を索敵スキルで見極める。単純に一つの門から一体というわけではなく、数体から数十体出てくる事もあるので、門が少ないから敵も少ないというわけではない。

(北西におよそ500・・・西に300・・・北東に450・・・)

そこまで把握してから索敵を切る。俺の情報処理ではこれ以上の使用は脳に異常をきたしてトリオン体の破壊を免れなくなるからだ。

「セイ。お前の予知に人型と遭遇するルートはあるか？」

「いや、今のところない」

「分かった。お前は基地北東部に向かえ。この敵の多さだと、連携するよりお前の弾幕で一掃した方が効率がいい。そこの殲滅が終わったら、よほどのことがない限り敵の多いところから順に削っていけ。もし何かあったら真っ先に俺に連絡しろ」

「了解。お前はこの学校の避難誘導をした後、三雲達に着いて行け。侵攻で雨取が狙われる未来はもう確定している。狙われる前に三雲が雨取を救いに戻るのも確実だ。その時はお前は三雲達のサポートに回ってくれ。この大規模侵攻を命運は、三雲にかかっているといつても過言ではない」

「了解」

「二人とも！何普通に作戦考えてるんですか！セイさんもしかしたら死んじゃうんですよ!??なんで一人にするんですか!??」

横のアリスが目には涙を浮かべ、俺たちの前に出てきて大声で訴えかける。セイに好意を抱いている身としては、俺の作戦に納得がいかないのだろう。確かに俺のやってい

る事は、重い病気を持つている人をほつたらかしているようなものだ。とても正常な判断とは言い難いだろう。だが、

「何言ってるんだアリス。俺たちにとつてそんな環境は日常と同じだろうが。むしろベイルアウトつていう機能があるだけ温いってmondぜ。それに、セイだつて」

「ああ。俺もキリトの判断が正しいと思つている。死ぬのが怖いのなら、俺は始まりの街から出てはいなかつたさ」

「でも「大丈夫だよアリス」セイさん……!」

アリスの唇をセイが人差し指で抑える。イケメンにのみ許される行動だ。

「俺の予知は絶対だ。外れることなんてありえない。だが……」

チラリと横目で俺の方を見てからまたアリスに向き直し、誇らしげな表情で言った。

「予知をしても追いつくことのできない人外が、そこにいるからな」

「……そう、ですよね。二人はいつつも、どんなピンチでも二人で斬り開いてきましたもんね」

アリスの顔は、大粒の涙でぐちゃぐちゃになりながらも、しつかりと笑っている。これに答えられなくて、何が男であろうか。隊員を守れなくて、何が隊長であろうか。

「ああ。そんな腐つた予知なんか、俺がぶつ壊してやる」

全員の気持ちは固まった。あとは、俺がそれを高めるだけ。三人で向かい合って、手を重ねていく。

「全員で生きて帰るぞ。元の世界に！」

「おう！」

「セイ、お前はもう行け。修達！来い！」

「了解。死ぬなよ」

「お前が言うな」

そう言い残してセイは屋上から飛び立って行った。ここからはアイツの事を考えてはいけない。自分の事にだけ集中するんだ。

「修、遊真、凜花。お前達は俺と一緒に本部南東地区の殲滅に行くぞ。千佳、夏目さん、アリス。お前らはこちら辺の住民の避難誘導を頼む。何かあったらアリス。お前の戦闘用トリガーで切りぬけろ」

『了解』

「千佳にもチビレプリカ渡しとく。もしどうしようもなくなったら必ず俺たちの中の誰かが助けに行くよ」

「ありがとう遊真くん」

「よし、じゃあ行くぞ！」

フエンスを飛び越えて正門近くに着地する。その後が続いて遊真、凜花が着地。最後に修が頭から転落。幸いなことに学校の人たちには見られていないようだ。

「皆さん！近界民の侵攻が始まりました！ここまでの経路にいる近界民は我々が食い止めますので、皆さんは落ち着いて学校にいるボーダー隊員の指示に従って、速やかに避難してください！」

学校の窓からこちらを見下ろしていた生徒達が、今はなぜか斜め上を見上げている。……まさか！

「……クソッ、こんな時に！」

生徒達が見ている方を見上げてみると、警戒区域の門から現れたイルガーがこちらに向かって来ていた。

「うわああああああ！近界民だああああ！！！！」

生徒の一人が長く続いた静寂を破り、その瞬間から全生徒がパニックに陥った。全員が我先にと避難をしようとする。

（この状況じゃいくら俺が言っても聞くわけがない。だったら！）

「みんな。とにかくなんとか説得して、学校みんなを外に出して落ち着かせるところまで誘導組をサポート。終了後、俺のところまで全力で来い。道中の敵は確実に倒せ。ラッドには要注意だぞ」

『了解！』

「よし、グラスホッパー！」

グラスホッパーを斜めに出して、イルガーの方に向かって飛び上がった。イルガーのスピードなら、被害が出ない範囲を越えるまで後3秒……！こうなったら、一か八かだ！

「グラスホッパー！」

今度はグラスホッパーを地面と平行になるように出して、イルガーと同じ高さまで飛び上がった。それと同時に、SEスロットから投剣スキルを指定。右のホルスターからレイガストを、起動せずに柄だけ取り出す。

(・・・距離約30m、向かい風、風速約2m、OK。ギリギリ射程範囲だ)

右手を肩まで引きつける。すると、体で何かがはまる感覚がする。その感覚とともに、柄と体が見えない力によって加速されていく。

『自動起動シークエンス確認。スラストON』『ソードスキル、投剣、発動』

『シングルシュート』

剣が力のベクトルに沿って放たれようとする。

(……だ！)

柄が手からリリースされる瞬間に刀身を実体化。少しだけ勢いが弱まったが、最小

考えてるそばから修達と合流することができた。ここからが本番だ。

「修、遊真、凜花。お前らにもきっきの情報が入ったはずだ。俺たちは千佳を狙えそうな位置にいるトリオン兵を片っ端から削っていく。新型を発見したら俺に知らせろ。俺が当たれない時は遊真も凜花も自分のトリガーを使い。いいな」

『了解』

「よし、じゃあまずは一―」

いきなり隣の家が壊れる音がする。それに驚いて隣をみると、そこには頭の部分に兎の耳のようなものが付いていて、太い腕を持った猫背のトリオン兵が立っていた。その後ろには、モールモッドが20匹くらい鎮座している。

「・・・うへえ、アレが新型か。あんなガチムチなら合同部隊組むのも領けるな」

つと、そんなコメント残してる場合じゃない。とにかく、ここは警戒区域のギリギリのところなんだ。一步でも外に出すわけにはいかない。

「3人は後ろのモールモッドの相手をしてくれ。俺はアイツと戦え」

『了解』

今日コイツらこれしか言ってるねえな。いやまあ俺が指示出してばっかだしそもそもここにセリフとか当てたら違和感半端ねえ（殴）

「よし、いくぜ兎やろおおっ!?」

いきなりでかい拳を叩きつけてきた。おいコラ主人公のセリフ取るとかいい度胸じゃねえか。なんとか咄嗟に劍二本でクロスブロックしたからいいけど、他のアニメ行ったらお前の出番なくなると思え。

「どおりやつ!」

少々不恰好な掛け声と共に劍と体を回転させて兎野郎の腕を地面に叩きつける。そのまま抵抗するもう一本の手を避けながら腕を登っていつて顔付近まで辿り着くと、劍を逆手に取る。

「スラスターON!」

劍と共に体を回転させて、逆手に持った劍で兎野郎の首を搔つ切った。すると抵抗する手も動かなくなり、地面に突っ伏した。

「まあちよつと硬かったけど、結構簡単に倒せるもんだな」

これなら遊真と凜花なら十分倒せるだろう。え?修?おいおい、そんな酷い事俺に言わせないでくれよ。修達の方を見ると、丁度修が最後の一匹を仕留め終わったところだった。最初は訓練用のバムスターも倒せなかった修が・・・成長したなあ・・・

「よし、次行くぞ!」

(この調子なら、セイの死だって回避できるはず・・・)

と、思っていたのも束の間だった。このような慢心は、この後直ぐに崩れ去る事と

なる。

大規模侵攻（赤司編）

赤司征十郎①

キリトに言われた通り本部北東部へ向かう途中、全ての門を見渡して全ての未来を視る。すると数多の未来のルートが頭に入ってきた。

（黒トリガーが4本、いや、5本か。事前に視た結果では最大でも4本だったが、やはり変わってきたな。俺の未来は……）

未来が変わったことにより直ぐに自分を視たが、視えたものは以前となんら変わっていないかった。

（……ダメだな。大口を叩いていても、身体は正直なようだ）

さきほどから身体が小刻みに震えている。なんとかキリト達に悟られないようにと冷静なフリをしていたが、心臓は早鐘を打ち、呼吸が早まっていくのが分かる。

落ち着け。平静を保て。俺は赤司征十郎だ。今までだってそうだったじゃないか。勝利は基礎代謝であり、敗北は死。何も変わらない。

（約1時間後には人型が出現する。その前に出来るだけトリオン兵を減らしておかなければ……）

『こちら本部。新型が発生した。嚴重注意で当たれ』

「……ここまでの展開は予想通りだな。だが予想以上に進行ペースが早い。早急に対処が必要だ」

俺は呼吸のペースを正常に戻し、スピードを上げた。

そう時間がたたないうちに、俺は目的地まで辿り着くことができた。到着した場所の周りには、予想に反さず民家が見えないほどにトリオン兵が蹂躪していた。

「こちら赤司。本部北東に到着した。これより殲滅を開始する」

『赤司か！ちようどいいところに来てくれた。今基地がイルガーに襲撃されていて、全自爆モードに入っている。お前の火力が必要だ。なんとか残り2体にまで減らしてくれ』

忍田本部長の指示を聞いて上を見ると、そこには6体のイルガーが基地に向かって飛んでいた。基地の外壁を見てみると、既に何度か爆撃を食らっているようだ。

「了解」

右手にバイパー、左手にメテオラを起動し、合成。トマホークを作る。それを丸々一発の大き玉にして、イルガーへと狙いを定める。

「トマホーク！」

空に浮かぶ6体のイルガーの内4体を標的にして、トマホークを放った。弾は最短

距離で一体目のイルガーへと辿り着き、その体を貫いた。だが、ここで終わりでは残りの三体の処理が間に合わない。

(今だ！)

トマホークの威力、射程、弾速の振り分け設定を遠隔操作で無理やり変えて、爆発を一瞬抑える。これは前に偶然見つけた性質だ。着弾した瞬間に無理やり弾の設定を変えると、そつちの処理が優先されて爆発が起きなくなる。それによつて生まれた一瞬で、トマホークは残りの三体を一気に貫き、強大な閃光と共に爆発した。それによりイルガーは跡形もなく粉々に消し飛び、残りの2体にも爆風で傷を負わせることができた。

「本部長。これでいいですか？」

『予想以上だ。協力感謝する』

残りの2体はどうするのか・・・と思つたが、基地の屋上から降りて来た一つの影が、イルガーを一瞬で切り裂き、空中で爆破させた。

「なるほど。流石は太刀川さんだ」

今の状態なら、基地も一体ぐらいは耐えられるはずだ。それよりも今はこつちの殲滅を最優先させなければ。

「バイパー！」

天帝の眼はできるだけ温存してトリオン兵を殲滅していく。ここで無駄遣いしては終盤でジリ貧になるのは目に見えているからだ。命中精度は落ちるが、仕方ない。

後ろから小型のトリオン兵が迫って来ていたが、それも一発の弾丸で仕留める。

「・・・『分岐点』に辿り着くまでは、何があっても死ぬわけにはいかない」

生死の『特異点』まで、後3時間。

—————

「アレが『キリト』と『セイ』かぁ・・・こいつらを使ったらどうなるのかねえ・・・」